
みすing -少女進行形物語-

好風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みすिंग ―少女進行形物語―

【Nコード】

N8765M

【作者名】

好風

【あらすじ】

夏休みを目前としたとある放課後。出雲は転校生の茜に頼まれ、図書室へと道案内をするのだった。そこで、抜け忍である茜を追いつけてきた双子の妹の堇が二人を襲う。堇の放つ忍法転化の術から、身を挺して茜を庇う出雲だったが、転化の術は対象者の性別を強制的に変える術だった。それにより出雲の身体は男から女へと変化してしまう――

1話（前書き）

某所にて掲載してるヤツを加筆修正した代物になります。

1話

キンコンカンコン——

スピーカーから流れるチャイム音と同時に、その日の最後の授業が終わった。

帰り支度にざわめき出す教室も、ものの10分足らずで俺達清掃担当の生徒以外の姿は消えていた。

「八坂君、ゴミ捨ててきましたよ」

黒板を消していた手を止め振り返れば、空になったゴミ箱に新しいゴミ袋をセットしているクラスメートの女子がいた。

「ご苦労さん、碓氷さん」

女生徒——碓氷さんに労いの声を掛け、俺は黒板消しを定位置に置いた。

「黒板も消したし、掃除終わる？」

完璧に綺麗になったのを確かめつつ、訊ねる。

「そうですね。終わりにしますか」

碓氷さんの同意を得、俺は出しっぱなしだった掃除道具を片付けていく。

今日は、掃除当番のほとんどが急用でいないため、俺と碓氷さんの二人だけで教室の掃除をする羽目になっていた。

おかげで、いつもの二倍以上の労力を使った気がする。

「あっ、八坂君」

教室を出ると、真っ直ぐ階段へと向かう俺を、遅れてやってきた碓氷さんが呼び止めてきた。

「ん？」

「あの、図書室って何処でしょうか？ 転校してきた時に教えて貰ったんですが、忘れてしまっただけ」

「図書室なら――」

説明しようと口を開け、碓氷さんが転校してきてまだ間もないことを思い出す。

「案内しようか？」

「あっ、お願いします」

人気の無い渡り廊下を歩く俺達。校舎の向こうに見えるグラウンドでは部活動に励んでいる生徒達がいた。

「碓氷さんはもう学校には慣れた？」

「学校に関しては大体慣れましたけど、街の方がまだ」

そう言う碓氷さんは小さく微笑を浮かべた。

「私、方向音痴なんです。それに、私の故郷は田舎の町でしたから、こちらの人の多さには圧倒されますし、散歩に出れば道に迷ってます……目印を撒いてもハトに食べられますし」

「ここらへんは結構複雑だから。高層ビルが増えたから遠くを見渡せないし、よそからの人じゃ道を覚えるのが難しいかな――あっ、図書室はここ」

階段から逸れ、突き当たりの扉を潜る。

「ありがとうございます」

「じゃあ、俺は――」

「あら？ 出雲じゃないの」

立ち去ろうとするよりも先にカウンターから声が掛けられ、俺は

肩を落としながら首を向けた。

「よっ、奈月ねえ」

そこには、一人の女子生徒が本を片手に座っている。

「うわぁ……綺麗な人」

碓氷さんの零した感嘆の呟きが、俺の耳朵を擦る。

確かに、ショートカットに眼鏡、整った顔立ちは、見る者にクールビューティーな印象を与えてくれる。

もつとも、必ずしも外見と内面が一致しているとはいえないけど……

「珍しいわね。出雲が女の子と一緒になんて」

「知り合いなんですか？」

「あっ、この人は姫川奈月。三年の先輩で図書館の主にして図書委員長。そして、俺の幼馴染みで通称奈月ねえと呼ばれる怪じゅー……!?」

ぶわぁ——

俺の頬を掠めるように、何かが飛んでいった。

振り返れば、壁に当たって落ちている分厚い本が転がっている。

「ふざけたこと言っていると、酷い目に遭うわよ」
投げてから言うなっ!!

口には出さずに心で叫ぶ。

「まったく。図書委員が本を粗末にしてもいいのかよ？」

床に落ちた本を拾い上げ、埃を払ってはカウンターに戻る。

「怪獣なんて言う出雲が悪いのよ。それに、図書委員たる者、本は武器よ」

キッパリと言い切ると、眼鏡越しに碓氷さんを見つめる奈月ねえ。その探るような視線から逃げるように、身動ぐ碓氷さんだ。

「それより、その娘は誰なの？ 見かけない顔してるけど」

「彼女は先月うちのクラスに転校してきた碓氷さん」

「姫川先輩ですね。碓氷茜です。宜しくお願いします」

碓氷さんの丁寧な挨拶に対し、

「奈月で良いよ、奈月で。あたしは茜ちゃんって呼ばせて貰うから」
奈月ねえはざつくばらんに応じた。

「ここには本でも借りに来たの？」

「あっ、この街の地図でもあったら見せて貰おうかと」

「地図？」

「明々後日で一学期も終わりますから、夏休みに入ったらこの街を探索してみようと思って」

「ふーん。地図ならこっちよ」

図書室には俺達以外に誰も居ないのを良いことに、カウンターを離れて案内する奈月ねえ。

「この棚が地図かな」

そこには世界地図や日本地図を始め、近場のタウンマップに抜けどのロードマップまで多種多様に揃っていた。

「相変わらず、この図書室の品揃えは常軌を逸してるな」

何げに、本と本の間に挟まるように置いてあった紙片を開ければ、江戸初期の古地図が出てきた。

探せば、宝の地図ぐらい発掘できるかも知れないな。

「北嶺学園図書委員は全ての『智』を収集することを存在意義としているからね。ことマニアックでコアな書籍に関しては国会図書館にだって負けない自負があるわ」

「はあ……凄いですね」

キツパリ言い切る奈月ねえに圧倒され、碓氷さんは顔を引きつった笑みを浮かべていた。

「奈月先輩。本は何冊まで借りられるんですか？」

「基本的に一人四冊までで二週間だけど……地図なら借りるんじゃないかってコピーしてく？」

奈月ねえは肩越しに突き立てた親指で司書室を指さしていた。

司書室の狭い部屋にコピー機の音が響く。

「ふーん。茜ちゃんってそんな山奥に住んでいたんだ」

「はい。一番近くのコンビニ行くのに山二つ越えるんですよ」

「うわぁ。それはまた大変そうね」

暇だな……

姦しいほどではないけど、女二人の会話に付いていけず、手持ちぶさた気味だ。

「じゃあ、俺、先にかえ——ぶげら!？」

飛んできた国語辞典が打ち当たり、俺の身体はそのまま司書室に積んであった未整理の本に突っ込んでいた。

「や、八坂君!？」

「ああ、大丈夫、大丈夫。出雲はこれくらいじゃ死なないから」

笑いながらアツケラカンと言い切る奈月ねえに、

「本だって、打ち所が悪かったら死ぬぞっ！」

俺は本の中から頭だけを出しては叫び返す。

「つたく、奈月ねえはがさつなんだから。いくら美人でもそんなだから恋人の一つもでき——どげっ!!」

再び飛んできた漢和辞典を顔面に受け、俺は沈黙した。

「あ、あのお、本当に大丈夫なんですか？」

「平気よ、平気。いつも鍛えてあげてるから。すぐに回復すると思うわ」

呆然と見つめる碓氷さんを余所に、コピー機が出した用紙を集める奈月ねえ。

まったく悪びれてもないようだ。

「八坂君、大丈夫？」

「大丈夫じゃないけど、何とか平気だ」

本の隙間から手だけを出して応じる。

何かにつけて本を投げつけられているのだ。奈月ねえの言葉じゃないが、さすがに慣れてきてる。

「これで一応全部だけど……この町のタウンガイドも合った方が良いわね」

俺達を無視するように図書室へと戻っていた奈月ねえだったが、すぐに戻ってきた。

「タウンガイド、貸し出し中だったみたいね」

そう言うのと、慣れた手付きで貸し出しカードを調べ始める奈月ねえ。

「ええっと、あったあった——って、借りてるのはあの人か」

その細い眉を顰めた。

「お知り合いなんですか？」

「姫川美奈。今年先生になったばかりの新人教師にして――あたしの敵よ」

「はぁ、敵なんですか？」

「美奈ねえ――美奈先生は奈月ねえのお姉さんだよ」

啞然としている碓氷さんに、本の下から俺が注釈を口にした。

「仲悪いんですか？」

「んにゃ。仲はいいと思うぞ。ただ、そりが合わないだけじゃないかな」

俺の言葉に対して、碓氷さんは不思議そうに小首を傾げた。

「そう言うことで、出雲。代わりに本を回収してきて。家では見かけなかったから、多分職員室の机の上にでも転がっていると思うから勝手に持ってきて良いわよ。どうせ、貸出期限切れてるんだし」
「嫌だよ！ 美奈ねえに捕まったら何を頼まれるか解ったモノじゃないからな」

半分出かかった身体を再び本の中へと逃げ込ませる。

「亀か、あんたは」

奈月ねえの嘆息混じりの呟きが聞こえた。

「じゃあ、本を取ってくるから二人はここで待っていて。あつ、出雲はその崩した本をちゃんと戻しておいてね」

『閉館』の札を片手に司書室から出ていく奈月ねえ。ついだとばかりに、まだ締めるには早い図書室の営業を勝手に終わらせていった。

「行ったか」

足音が遠ざかるのを確かめてから本の中から這い出す。そんな俺の姿を碓氷さんはおかしそうに笑った。

「クスッ。楽しそうですね」

「そうか？」

身体に付いた埃を叩きながら返す。

「私が以前居たところは殺伐としていましたからね。こんな——」

床に落ちてゐる辞書を二冊拾い上げる碓氷さん。それは先ほど奈月ねえに投げつけられ、俺に当たった辞書だ。

「当たり前さえ良ければ命を落とさない様なモノじゃなく、掠りでもしたらお終いなモノばかりが飛んで——」

不意に碓氷さんの身体が沈んだ。

パリン！

翻すように身体を返し、手にした辞書を顔の前にかざす。

トン、トン——

ガラスの割れる音に遅れて、鋭いモノが突き刺さる音が響く。

「え？」

「危ない八坂君、伏せてください」

反射的に伏せれば、碓氷さんは司書室の棚を手で突き、蹲る俺の上に大量の本を散らしてみせた。

トン、トン、トン、トン、トン——

風きり音と共に、俺の上に乗っかかる書籍に何かが突き刺さる音が聞こえた。

「もう、ばれたようですね」

焦りを含んだ声音を零す碓氷さん。

「碓氷さん？」

「八坂君はここでじっとしていて下さい」

そう言い残すと、司書室を飛び出していく。

遠ざかる足音が、屋上へと向かっていくのが解るんだけど……

「何なんだよ、一体？」

本の下から再び這い込めば、上辺に乗っていた本の幾つかに星形の薄っぺらな物体が刺さっていた。

「手裏剣？」

鉄色のそれは、忍者が使うそれそのものだった。

「どういふことなんだよ、これ？」

手裏剣が窓をぶち破って飛んできたのは解った。

でも、何故それが飛んできたのかが解らない。

「碓氷さんが狙われているって言うのか？」

自分に狙われる理由が無い以上、それしか思い当たらない。

「何故あいつが？」

幾ら考えようが答えの出ない疑問が過ぎったが、床に着いた転々とした赤い液体に思考が吹き飛ぶ。

「血？ 碓氷さんのヤツ、ケガでも負ったのか？」

床に転々と着く血の後にそれを考えるのは止めた。

血の後と本に刺さる手裏剣を見比べる。正直、何が何だか解らない。

でも、

意を決したように開け放たれたままの扉を振り向き、

「くそったれ！」

俺は碓氷さんの後を追うように駆けだした。

このまま行けば何かに巻き込まれる。

そんな漠然とした不安が浮かぶ。だからと言って、それで足を止め、見て見ぬ振りなんてする気も起きない。

それにより、

「あの惨状を見た奈月ねえに、何言われるか解ったモノじゃないかな」

幼なじみの少女の怒りを一人で向かえるのが恐かった。

血の跡が続く階段を駆け上り屋上への扉を開ければ、西に傾いた陽の輝きがその空間を緋色染め上げていた。

「どこだ？」

辺りを探すが人影らしいモノすら見えない。そこへ――

キーン！

甲高い金属音に振り返れば、斜陽をバックに影が飛び跳ねてるのが解る。

キーン、キーン！

二度三度と打ち合う金属音。眩しさに細めた俺の瞳が捉えたのは、黒装束の忍者と闘うセーラー服姿の同級生だった。

ポニーテールの髪を靡かせながら斬り合う碓氷さん。

「碓氷さん！」

思わず叫べば、

「八坂君!？」

俺の声に注意が逸れた碓氷さんに対し、隙ありとばかりに忍者の凶刃が襲ってきた。

「きゃあ！」

斬りつけられ、屋上へと失墜する碓氷さん。血を流す左脚を押さえながら立ち上がろうとするが、崩れるように膝が折れる。

「これは――毒!？」

「これまでね、碓氷茜。いくら貴女でも、痺れ毒を受けた状態では満足に戦えないはず」

「クッ！」

歯噛みし、きつく睨み付ける碓氷さん。状況は解らないが、力の均衡が崩れたぐらいは俺にも解った。

「里を抜けようとしても、あなたに頭領の血が流れる以上、それは敵わぬ夢と知りなさい」

目の前で展開される現状に、ハッキリ言って俺の頭は付いていない。

でも、自分が声を掛けたせいでこの危機を招いたことぐらいは解

る。

だからこそ――

「うわあああ!!」

そんな碓氷さんを助けようと、俺は形振りかまわず突っ込んでいった。

「無益なことを」

あまりに無謀な俺を一笑に伏し、

「忍法影縛り」

夕陽に伸びた俺の影にくないを一本突き立てれば、それまでの勢いが夢幻の如く、俺の身体が硬直し、その場に固まった。

「な、なんだよ、これ!？」

「部外者はそこで静かにしてて下さいまし」

口調こそはやんわりとしてるが、その殺気の籠もった眼力に押し黙るしかない。

「こうなっては抵抗も何もしませんね」

諦めたように大きく息を吐く碓氷さん。

「もう少し都会での女の子の生活を楽しまたかったですが……ひ
と思いに煮るなり焼くなりして下さい」

「覚悟が良いですね」

「ただし、八坂君。彼には手を出さないようにお願いします」

「元よりそのつもり。後でこの記憶は消しておきますわ」

目の前で複雑に指を組んでいく忍者。そんな存在はどうでもいい

かの様に、碓氷さんは横目で俺を見た。

その瞳は穏やかなまでに優しく、

「驚かせたみたいでゴメンね、八坂君。私、抜け忍でしたの。都会の生活に慣れて逃げてきたんですが、ダメでした」

寂しかった。

「では、喰らいなさい、忍法て——！！？」

「くそつたれ！」

忍者が忍術を放つ瞬間、俺の身体を縛っていた負荷が消え、軽くなった足がコンクリートの地面を蹴っていた。

それは天の悪戯か。夕陽に掛かる雲一つ分の影が俺の縛りをかき消したのだ。

碓氷さんを庇うように立ちふさがる。そんな後先考えずの行動によって、俺の身体は忍者から放たれた妖しげな光を思いつ切り喰らってしまうことになった。

「な、な、な、なんてコトしてくれました！！」

何も感じられない中、遠くで叫ぶ声が聞こえた。

「す、葦！ 普通の人を巻き込んで、どうしてくれるんですか！！
外の方にまで手を出したことがばれたら、私もあなたもどんなことになるか解っているんですよ！」

「だ、だって、茜。ま、まさかあのタイミングで飛び込んでくるとは思わなかったから……」

そんなあまりの騒がしさに、俺の意識が覚醒してきた。

「う……ん………」

「八坂君！」

目を覚ました俺に駆け寄ってくる碓氷さん。

「あっ、無事だったんだ、碓氷さん。良かった」

「良かったじゃありません！」

何故か鋭いまでの叱責を受ける。

「解ってるんですか！ あなたの行った行為がどういうモノか？」
「どういうモノ？」

「自分の身体を確かめてください」

「身体？」

言われるままに身を起こし下を見れば、

「え？」

まず目に入ったのは、シャツを突き上げる二つの膨らみ。触れてみれば確かな質感が伝わってくる。

どういふことかと目で問えば、更に下を確かめるように碓氷さんは無言で訴えてきた。

恐る恐る股間へと伸ばす手。

「あっ、無い」

本来あるべきモノにはかすりもしなかった。
しばしの沈黙。
そして響くは、

「何じゃこりゃ!？」

俺の絶叫だった。

1話（後書き）

P i x i v (h t t p : / / w w w . p i x i v . n e t / s
e r i e s . p h p ? i d = 6 5 4) と同時公開です。

2話

我が身に起こったあり得ない現象に頬を引きつらせながら碓氷さんを見れば、彼女の代わりに申し訳なさそうに応える忍者がいた。

「あなたに放った術は忍法転化の術。性転換を強制的に行う術なんです」

「え？」

「我が碓氷一族は女系の忍者——くノ一集団なんです。ただそれでは子孫が残せませんので、若い者の中で一番優秀な忍者を転化の術で男にし子を成すのです」

顔の下半分を覆う覆面を取る忍者。そこから出てきた顔は、碓氷さんと全く同じ顔立ちをしていた。

「申し遅れましたが、私は碓氷菫。茜の双子の妹です」

「双子の妹——じゃなくて！ 俺は元に戻るのか!？」
叫んでみて気付く。

その声もまた、すっかりと女性のモノに変じていたことに……

「そ、それが……何と言えいいのか……」

俺の問いに、言いにくそうに言葉を濁す忍者——菫さん。

そんな妹の代わりに碓氷さんが口を開いた。

「我が一族に伝わる転化の術は、その術が通じるのは人生で一度だけなんです。一度転化した性は、もう一度転化の術を掛けても、元に戻ることはありません」

死亡通告をも思わせる内容に固まる。

「それって、転化した女は一生女？　俺は一生女なのか………たっはっはっは」

「幸い八坂君は元々童顔の美形でしたので、かなりの美人になっていきますので気を落とさないでください」

「そんな慰めで立ち直れるか!!」

俺の叫びは虚しく夕焼け空に消えていった。

家族になんて——って親父もお袋も海外にいるからしばらくは誤魔化せるか。それよりも問題は——

「隣りに住むあいづらにばれたらどれだけ大笑いされるか」

「あっはっはっはっはっはっは♪」

「クスクスクス♪」

「そうそう、こんな感じに——って、おい！　いつからそこにいるんだよ、奈月ねえに美奈ねえ！」

扉の影から現れたのは奈月ねえと、その彼女によく似た顔立ちでありながら、どこかほのぼのとした雰囲気漂わせる女性——美奈ねえだった。

「いつからって、目映い閃光が見えた時からかな？」

「あらあら、ダメですよ出雲ちゃん。女の子なんだからそんな乱れた言葉遣いしてちゃ、奈月ちゃんみたいに男の子に恐れられる女の子になっちゃうわよ」

「姉さん！」

茶化す美奈ねえを窘める奈月ねえだった。

司書室に戻ってきた俺達四人。一番最年長で先生でもある美奈ねえの姿はそこにはなかった。

「しかし面白いことになったわね」

司書室の中央に俺を立たせ、面白そうに検分を始めだす奈月ねえ。隅の方では碓氷姉妹が恐縮そうに縮こまっていた。

「胸はだいたいBカップってトコか。身長は縮んでるし骨格も女の子になってるのね。肩幅は狭くなっていて、お尻の方は大きくなってるわね」

「うわぁ！？ いきなり尻を撫でるな、奈月ねえ！！」
触れられた尻を押さえて睨み返すが、奈月ねえは気にも止めていない様だ。

「しかし、縮んだ身長のお大半が上半身だなんて——足が長く見えて幸せね」

シャツはかなりだぶついているのに、ズボンの方は裾を曲げることなく履いていられた。もっとも、ウエストには透き間が空き、ヒップはパンパンに張っている。

「質量保存の法則じゃないけど……男の肉体と女の肉体での差分が髪の毛に代わるなんて面白いわね」

「いてって、いて！ 髪の毛引っ張るなよ」
尻近くまで伸びる俺の髪の毛を引っ張る奈月ねえ。

「ねえ、茜ちゃんに葦——ちゃんだっけ？」

奈月ねえに呼びかけられてビクツと肩を揺らす二人。

「何ですか、奈月先輩……」

「別にあたしは怒ってないんだから、そう縮こまらないでよ」

二人のあまりの脅えように苦笑しながらも、奈月ねえは会話を続けた。

「男から女になった場合、髪の毛に化けるのは解ったけど、もし逆の場合はどうなるの？」

「そ、それは……髪の毛の一部が分解され肉体の方に転じます……ただ、十分な長さがないと禿げてしまうことになりました……」

「茜の髪の毛長さでは禿は確定です」

「葦！」

「ふーん」

唐突に、茜を眺め眇め始める奈月ねえ。

「茜ちゃんは禿になるのが嫌で、その忍者の里から逃げ出したのね」
「う……」

言葉を詰まらせる碓氷さん。どうやら奈月ねえの推測は凶星だったようだ。

「だって、禿なんですよ、禿。術の副作用か、転化後の髪の毛の長さは転化した時の長さまでしか伸びないんです」

「それってどう言うことなの？」

「もし転化して禿だったら、一生髪は伸びることなくずっと禿なんです」

奈月ねえの問いに葦さんが答え、

「ですので、私は転化しても髪の毛が残るくらいまでに髪の毛を伸ばそうと、里を抜けたんです」

碓氷さんが続けた。

「ふーん。二人の事情は大体解ったけど、それで二人とも。戻す方法は無いの？」

「はい。先ほど八坂君にも言ったように、転化の術が通じるのは一生涯に一度のみ。一度転化した者には何度同じ術を掛けても通じることは無いと言われています」

「やっぱり、戻れないのか……」

男に戻れないと再認識させられ、俺の心は更に落ち込んだ。

「転化以外の方法は？ それに、その転化の術って最初に誰かが編み出したんでしょう？ その絡繰りを紐解き、新たな術に組み直すことは？」

「あいにくと、この術の本質を理解する者は今の里には居ません」

「伝わってるのは利用方法と効果だけってコト？」

「はい。ただ、里の文献を漁れば何か解るかも」

「里の文献ね。曖昧だけど、それに頼るしかないか……まあ、あたしはあたしでこの書物から戻る方法を探すかな」

「奈月ねえ！？」

「調べるだけ調べて、戻る方法が見つからなかった方が出雲も絶望して面白そうだからね」

付け足された意地悪な言葉に、俺の期待は一気に崩れ去った。

「でも、なぜ二人ともそんなに出雲が女性になったことを気に病むの？」

「それはその……許可無く外の人間に手を出してはいけない掟があるんです。もしそれがばれたら……その者は転化の術で男にされるんです。しかもその後、里の者とは子を成すことも禁じられ、一生一人で暮らさねばならないのです」

「……………禿頭で」

碓氷さんの言葉にポツリと続けた堇さんの呟きからは、ただならぬ悲壮感が伝わってきた。

「そんなに禿になることが嫌なのね……あなた達の一族は」

あまりの雰囲気、乾いた笑いで答えるしかなかった奈月ねえ。

俺も笑いたいよ……たっはっはっは……はあーあ。やるせない。

「必ずや戻る方法を探してみせますので、このことは内密にお願いできませんでしょうか？」

「お願いします」

「俺は元に戻るならそれでいいけど……」

「あたしは別に言わないわよ」

「では、私は繋ぎとしてこの場に残り――」

「早速、私が里で調べてきます」

姉妹同士で頷き合ったかと思うと、堇さんが窓へと向かう。

「あっ、そうそう、堇ちゃん」

堇さんが窓枠に足を掛けたところで奈月ねえが思い出したように声を掛けた。

「何です？」

「あなた達の一族って、優秀な子孫を残すために『男』――の子種が必要なのよね？」

「はい、そうです」

「なら、どうして外の血を混ぜたりはしないの？」

「外の者では優秀かどうかの見極めが難しいのです。下手に愚劣な血を混ぜたりしたら、今まで積み重ねてきた血の重みが消えてしまいます」

「血の重みね……そんだけ濃い血を混ぜたりしたら、先天性の遺伝子疾患とか出てこない？」

「……………」

答えられない堇さん。碓氷さんも顔を伏せている。

たぶん、奈月ねえの指摘通りに遺伝子疾患を引き起こしたり、出産率を落としているんだろうな。

「外の血の優劣が解らないのなら——はい、これ」

奈月ねえが、一冊の科学系雑誌を開けて堇さんに渡した。

「精子バンク？」

覗き込めば、精子バンクを扱った記事だ。

「優秀な精子を売買してる商売よ。日本人でも登録してる人がいるはずだから、転化の術なんて使わずに、そこで精子でも買ったら？血も適度に薄まって一族繁栄に繋がるわよ」

「え！？ あっ、はい！」

驚き、そして大きな返事を返す堇さん。かなり嬉しそうだ。

まあ、それを使えば、自分達が禿げる心配もないから、解らないでもないけど……

「それに、それを話題にしていれば、文献を調べ回っていても誰も

気にも止めないと思うわよ」

その言葉にハツとする双子。

言われてみれば、このまま戻って転化の術を調べ回れば、周りに勘繰られることは必然だ。

自らの失態を触れ回ると同意になる。

「ご助言感謝します。早速、里の長老会に掛け合いたいと思います」
そう言い残して堇さんは窓枠から外へと消え去った。
流石は忍者と言ったところか。

「あっ、貸し出しカード貰うの忘れていたわ」

「奈月ねえ、堇さんはこの学園の生徒じゃないぞ」

「それもそうね。じゃあ、茜ちゃんが代わりに借りたってことにしておくわね」

「はぁ……」

どう答えて良いのか解らず、曖昧な返事を返す碓氷さんだった。

「ただいま。持ってきたわよ」

扉を開けて入ってきたのは美奈ねえだった。その手には幾つかの紙袋がぶら下げられてる。

「お帰り姉さん。思ったより早かったわね」

「ちょー特急で行って来たからね」

走ってきたのか、呼吸を整えながら椅子に腰掛ける美奈ねえ。

「何して来たんだ？」

袋を覗き込んでいる奈月ねえを怪訝に思いながら俺は訊ねた。

「服を取ってきたのよ」

「服？ ま、まさか、俺が着るとか言うんじゃない？」

「ええ。そのままじゃさすがにまずいでしょ？」

「べ、べつにこのままでも俺は問題ないってば」

「ええー。でも、出雲ちゃん。そんな姿でクラスメートとかと遭遇したらどうするの？ キミの正体が八坂出雲ってバレたら、絶対変なことされるよ？」

「へ、変なコトだ！？」

「決まってるじゃない。胸触ってきたりあそこ見てきたり——下手すれば、処女をクラスメートの誰かに捧げることになるかもよ」

処女？

処女って、俺の処女！？

処女の一言に顔面から血の気が失せた。

「ど、どうしてそんなことが言えるんだよ！ 奈月ねえ！！」

「決まってるじゃない。男が女の子の胸を触ればチカンになるから誰もそんなリスクを犯してまで触ろうとは簡単にはしないでしょ。でも、それが元男の女の子ならどう？ それも、相手が知ってる男で、女になったばかりとあれば、何の気兼ね無く迫ってくるわね」

「うっ……」

嫌だ。それだけは嫌だ。

野郎に迫られるなんて、絶対に嫌だ。
思い浮かべただけで、鳥肌が立ってきた。

「そ、そんなのばれなければ良いだろ？」

「いくら美人に見えるからって言っても元々の顔の作りは同じなんだから、知り合いが見れば正体がばれる可能性もあるわ。それで、もしばれてみたらどうするのよ？ 胸触らせてくれとか言ってくるに決まってるわ」

バツサリと切り捨てる奈月ねえ。隣で美奈ねえもうんうんと同意していた。

確かに……言ってくるだろうな。俺も、友人が女性になれば言いそうだし。

「そう言うことでひとまず家に帰るまではこれに着替えなさい」
押し付けられたのは学校指定のセーラー服だった。

「マジに着替えるしかないのか？」

「大マジだよ」

キツパリと美奈ねえに言われ、渋々ながらもシャツを脱ごうとボタンに指を掛ける。

圧迫感から解き放たれた胸に、確かに自分の身体が女になっていることを痛感した。

「つまんない」

唐突な奈月ねえの言葉に手を止める。

「つまんない？」

「だって、今の脱ぎ方に恥じらいが無かったわ」

「恥じらいって言われても、別に人前で上半身裸になるなんて男なら普通だろ？」

身体が女になったとは言え、精神が男のままである以上、別段裸を見られて恥ずかしいとは思えない。

「それはそうだけど……恥じらいとかは後で仕込むとして——って、何いきなりセーラー服を着ようとするのよ」

「え？ 着ろって言ったのは奈月ねえ達じゃないか」

「奈月ちゃんは、ブラを着けなさいって言いたいのよ」

そう言って、美奈ねえは袋の奥から白いブラジャーを取り出した。

手渡されたブラジャーに身が竦む。

さすがにコレを身に着けるには抵抗があった。

「どうしても付けなければダメなのか？」

「当たり前でしょ。幾ら薄暗いとは言っても、ノーブラで歩いていたら誰かに気付かれるわよ？ もしチカンの目にでも止まったらどうするのよ」

「それなら、サラシでも巻けば良いじゃないか？」

「サラシなんてダメよ。サラシじゃ育たないし、せっかく形良い胸をしてるんだから、ちゃんとブラを付けなさい。ねえ、茜ちゃんもそう思うでしょ——茜ちゃん？」

奈月ねえにつられる形で視線を向ければ、自らの胸を押さえたまま固まっている碓氷さんがいた。

「サラシはダメ……サラシじゃ育たない……」

ぼそぼそとした呟きに、奈月ねえは彼女のセーラー服の裾の下から手をつ込んだ。

「きゃあ、何するんですか!？」

「忍者なんて古風なコトをやっているとせば、サラシを巻いていたわけ——ね♪」

引っこ抜いた奈月ねえの手には、どうやって解いたのか白く長い布がある。

「ちよ、ちよつと奈月先輩!？」

「しかしサラシだなんて、体育の着替えとかでは誰にかにつつまれないの?」

それもそうだ。

女子達の着替え状況は知らないけど、サラシ姿はさすがに浮いていると思える。

「着替えの時は幻術で皆さんには普通に見えてるようにしてしましたので……」

胸の膨らみを腕で隠しながら碓氷さんは応えた。

「ふーん、忍術も便利なモノね。あつ、姉さん、ブラって幾つか持つてきてるわよね?」

「ええ。店の方にあつたのを適当に持ってきたわよ」

ニッコリ笑って別の袋を差し出す美奈ねえ。

そこには、数着の下着が入っていた。

「じゃあ、茜ちゃんもブラジャー付けようね。サイズが合わなかったら後で合うヤツをウチの方で見繕ってあげるわ」

「ウチで見繕う?」

「奈月ねえ達は三姉妹で、長女の奈々さんが若い女性向けの雑貨店をやっているさ、外国製の女性物の服とかも扱ってるんだ。それで――」

自分の言葉に一瞬固まる。

「美奈ねえ。奈々さんにはこのコトは？」

「ちゃんと話しましたよ。それで売り物を貸してと言ったら喜んで提供してくれて、更には早く連れてきなさいって急かされちゃいました」

やんわりと告げられたソレに、俺はガックリと膝を付いた。

「どうかしたんですか？」

「その奈々さんってヒト、可愛い娘を見ると着飾りたくなる習性の持ち主なんだ。もっとも、奈月ねえも美奈ねえも同じ習性を持っているだけだな」

今の俺が奈々さんの前に立ったら何をされるか解ったモノじゃない。一人ファッションショーが始まるだろうな。

120%当たってると思われる自らの想像に、身震いした。

3話

「さあさあ、茜ちゃんも脱いじゃってブラ付けましょ」

樂しげに迫る奈月ねえに、碓氷さんは仕方なくセーラー服を脱いで上半身を裸にした。

プルンとした碓氷さんの胸を見て、慌てて視線をずらす。

「どうしたの？」

「いきなり女性の裸を見れば、誰だって慌てるだろ！」

「女性の裸と言っても、今のあんただって女性でしょう」

「俺の胸は俺のだから別に見ても何とも思わないんだよ」

「何とも思わないって、もしかしてまだ自分の胸だって理解してないんじゃない？」

「ひゃくい！？」

背後から胸を揉まれて飛び跳ねた。

「はいはい、睨んでいないでブラジャー付けなさい。早くしないと暗くなるわよ」

カーテン越しに感じる窓の外は、夕焼けから夕闇に移ろうとしていた。

仕方ない、着るか。

ブラジャーの肩ひもを確かめ両の腕を通すと、無造作に胸をカップへと入れ、背中に手を回す。

「あれ？」

どうやっても、背中のホックが上手く掛からない。
下手に無理矢理やろうとすれば、長すぎる髪の毛が絡まってしま
う。

「出雲は不器用ね」

「男がブラジャーをすんなり付けられるわけないだろ！」
あっさり付けられる方がどうかしている。

「はいはい、出雲ちゃん。こっちに背中を向けてね」
美奈ねえに言われるままに背を向ける。

「ブラの正しい付け方はね、まずカップの下の部分を持ってね」

「み、美奈ねえ！？」

いきなり背後から手が伸びてきて、俺の手を取りカップへと添え
てくる。

「出雲ちゃん、動かないの。ちゃんとした身につけ方を覚えないと
ね」

「べ、べつに、ちゃんとしたつけ方なんて知らなくてもいいよ」

「ええ、今の出雲ちゃん可愛いから、胸の形が崩れたりしたら魅
力半減よ」

形が崩れる？

俺の胸の形が！？

「カップの下を両手で持ったらそのまま前屈みになってカップに乳
房を収めるの。そしたら、前を中心に確かめて、ホックを止めると」

強引に背中を押されて前屈みになれば、今以上に感じる胸の存在。
ドギマギしてる俺を余所に、美奈ねえのブラジャー講座が進んでいく。

俺の腕を取ったまま背中へと回し、ホックのある先へと導いてくれる。

指先に当たったそれを確かめ何とか閉めれば、今まで前に垂れていた胸が後ろに引っ張られる気がした。

後ろに回したままの指先は、すべすべの肌理の細かい肌触りと一緒にブラジャーの繊維を感じ取る。

男の背中ではあり得ない違和感に、倒錯的な錯覚を覚えた。

「次に、ブラの下部分が水平になってるのを確かめたら、カップの中の胸の位置を調整――」

「!？」

暖かくも柔らかい感触。それが、揉まれているモノだと理解するのはすぐだった。

「な、なにするんだよ、美奈ねえ!？」

身を振って逃げようとするが、ブラの中に突っ込まれた美奈ねえの手は簡単に離れてくれない。

「何って、ブラの微調整だよ。本当は出雲ちゃん一人でやるべきなんだけど、初めてだから私の手の動きを覚えておいてね」

言って、手を離そうとはしない美奈ねえ。

「まずは、アンダーの部分を綺麗にカップに入れて」

「!」

美奈ねえの指先がカップの中で動き、胸を持ち上げる。

「うう……」

胸をまさぐられる感触は、かなり変な気分だ。

「お次は、サイドのお肉を集めてと」

されるがままに整えられていく俺の右胸。何の手も入れてない左胸と比べて、少しだけ大きく見えた。

「最後に乳首をカップのトップ部分に併せてね」

「————!?!」

思わず出そうになる言葉を飲み込む。

乳首を摘まれた途端、体中が震え、俺は尾てい骨の奥にむず痒さを感じた。

これが——

これが、女の感じるってヤツなのか——あん。

「はい、これで右胸はお終い——っと、もしかして出雲ちゃん、感じちゃってるとか?」

「なっ!？」

美奈ねえの囁きに、俺の火照っていた体は冷水を浴びたように熱が冷め、身体の芯から疼いていたモヤモヤは一気に消え去った。

「そ、そんなコト、あるわけ無いだろ!」

「クスッ。別に隠すことはないのよ」

「どうかしたの？」

「今ね、出雲ちゃんが――んう」

「べ、べつに何でもないさ」

慌てて美奈ねえの口を押さえ誤魔化す。

「ふーん。何があったか知らないけど、早く着替えなさいよ」

「解ってるさ!」

興味がないのかそれ以上の追求はせず、碓氷さんの方へと戻る奈月ねえ。

「今のことは無しな」

「はいはい。それは解ったから、左胸は自分で調整してね」

「え？」

その言葉に戸惑う。

俺がやるのか？

今、美奈ねえがやっていたことを。

頭の中で先ほどの行為を反復しては、背筋にぞわっとした感触が

走った。

「そうよ。自分でやらなければ身に付かないでしょ。それとも何？
下着を着ける度に誰かに頼むの？」

そこまで言われれば、やるしかなかった。

先ほどの美奈ねえの手の動きをトレースするように左胸のカップ
に手を入れ、乳房の肉を集める。

なるべく触覚を意識しないように手を動かし、何とか右胸と同じ
ように形を整えることに成功した。

「終わったのなら、肩ひもを調整してね」
かなり時間が掛かったような気がしたけど、壁の時計を見る限り
では数分しか経っていなかった。

「どう？ ブラジャーを身につけると、胸が落ち着くでしょ？」
確かに、先ほどまでと違って胸が固定されてる分、動きやすかつ
た。

「ブラが終わったのなら、次は下ね」
休む間もなく、そう言ってくる奈月ねえ。
碓氷さんの方も終わったようだ。

「へいへい」
ベルトを外しズボンを降ろすと、手に取ったスカートを履こうと
自棄気味に足を通す。

「ちょ、ちょっと、待ちなさい！ トランクスのまま履く気？ ス
カートの下から見えたらどうするのよ！？」

「トランクスのお尻を捲り上げればどうだ？」

「歩いている間にずり落ちるわよ」

疲れたように溜息をつく奈月ねえだ。

「だから、はい、ショーツよ」

手渡されたショーツにたじろぐ。

小さくて柔らかいそれは、とても履けそうには思えないけど、引っ張ってみれば結構伸びる。いつまでもこうしていても埒がわからないのは解ってるが、なかなか踏ん切りが付かない。

「遊んでいないで、早く履き替えなさい」

「わかったよ。履けばいいんだろ、履けば」

ショーツを握ったままトランクスに手を掛け――

「何、見てるんだよ！」

三対の目から放たれた視線に気付き、手を止める。

「別に見られても恥ずかしくないんでしょ？ 胸なんて平気で見せていたんだし」

「下半身は男でも隠すモノだろ！」

三人の視線から逃げるように本棚の陰に隠れて着替えることにした。

トランクスを脱いだことで晒された秘所に空気が触れ、男としてのアレが無いことを今以上に痛感する。

そんな股間をなるべく意識しないように、下を見ないままショーツに足を通す。

「どう？」

そう問われても、不思議としか答えようがなかった。

本来、男としての下着ではあり得ない胸の圧迫感に股間の消失感に、俺は自分の身体が女になってることを再認識させられた。

女物の下着にしたことで吹っ切れたわけでもないが、下着に着替える時以上の速さで女子の制服を着込んでいく。

スカートを腰で止め、セーラー服に首を通し、長すぎる髪を引っ張り出す。

首を振って流す前髪の一部が剥き出しの首筋に触れ、くすぐった掛かった。

「なあ、この髪の毛、少し切ってくれないか？」

「あっ、切ってはなりません！」

慌てて碓氷さんが止めに入ってきた。

「ダメって？」

「今のその髪の毛が合ってこそ本来の八坂君と同じ質量になってるんです。もし髪の毛を切った後、転化の術と同質の術で男性に戻る方法が見つかってそれを使ったら、禿になる可能性があります」

「そう言えばそうだったな」

「別の手段でしたら条件も変わってくると思いますが、なるべくなら髪の毛は切らない方がいいです」

がっくり項垂れる。

胸も邪魔だったが、それ以上に長い髪の毛も邪魔だ。

「でも、さすがにその長さは邪魔ね。ちょっとその椅子に座ってパイプ椅子に座れば、背後に回った奈月ねえが自分のブラシで俺

の髪の毛を梳き始めた。

「綺麗な髪してるわね」

「ですね。転化の術によって髪質が最適の状態で再構成されたみたいですよ」

「肌は綺麗だし、髪も艶やか。無駄な脂肪も無いし、転化の術って便利なモノね」

「禿にさえならなければ——ですけどね」
「クスッ」

「これだけ長いと編むのも大変だから、今日の所はポニーテールにしとくかな」

セーラー服のスカーフと同系色のリボンを取りだし、俺の髪を後ろで束ね上げる奈月ねえ。

「はい、お終いと」

髪の毛の重さで後方に引っ張られる様な気がするが、首筋が空気に晒されてる分軽やかだ。

「立ってみて」

言われるままに立ち上がると、三人がジロジロと俺の周りを回りながら検分を始めた。

「何か、足りない気がするのよね」

「そうね。私もそう思うわ」

「あのお……、もしかしてスカートの裾が長すぎるのでは？」
自分のスカート丈を見比べながら碓氷さんが、そう指摘してきた。

「あっ！」

「それね」

解るが早いのか、美奈ねえは俺の下半身に取り付き、スカートの裾を調整し始めた。

「茜ちゃん、よく解ったわね？」

「あっ、いえ。里を抜ける時に都会の女子校生の制服の着方を調べたんです。見た目が周りの女子校生と同じにしておけば、追っ手に見つかる可能性が減ると思ったんです……もつとも、董の目は欺けなかったんですけどね」

「こんなモノかな？」

美奈ねえの手によって調整されたスカート丈は、先ほどまでのと比べて5センチ以上は短くなっていた。

「うわあ、上半身が小さくなった分、足が長く見えるとは思ったけど……スカートにするとなおさら長く見えるわね」

スカートの裾から伸びる俺の足はすらりと細長かった。

「見事なまでにモデル体系だね。出雲ちゃん、モデルやってみる気ある？　あるなら、プロダクション紹介するけど……バイト料もいいわよ？」

「遠慮しとく」

美奈ねえの提案に慌てて首を横に振る。そこまで長く女性をやる気はない。

「しかし、スカートの裾が気になるな……」

少し動いただけで、風が尻まで舞い込めそうさ。

「ねえ、そんなに短いのが気になるの？　あんた、家ではよくトラ

ンクス姿で歩き回ってるんじゃない」

「そうは言うけど、こんな短い恰好で外を出歩く男は、あまりいないと思うぞ」

「それもそうだけど……まあ、気分を換えて、今の機会に女の子を堪能しなさい」

「堪能しろって言われてもな……」

頬に視線を感じ横を向けば、碓氷さんが呆然と俺を見つめていた。

「なんだ、どうかしたのか？」

「それがその……すっごい美人で驚いていたんです」

「美人、俺が？」

自分を指させば、奈月ねえも美奈ねえもうんうんと頷いて見せた。

「確かめたいなら、廊下の鏡でも見てくれば？ 外も暗くなってきたから帰宅した方がいいしね」

鏡か。

見てみるかな。

廊下に出ると、目当ての鏡はすぐそこにあった。

なるべく鏡を見ないように前に立ち、少しずつ視線を上げていく。

細長い足首。

すらりとした脹ら脛。

一点の汚れもない膝。

眩しいまでに白い太股。

沢山のひだを有した紺色のスカート。

夏服であるセーラー生地は薄く、腰のくびれを微かに見せ、ブラジャーのラインを透かし取っていた。

紺色の襟から覗く鎖骨は滑らかで、少し視線をずらせばブラジャーの肩ひもが見える。

滑らかな首筋の向こうには健やかに流れる黒髪。

小さくもシャープな顎。

ピンク色の唇。

そして、柔らかそうな頬。

整った鼻筋に円らで大きい瞳。

まつげは長く、眉毛は細く、伸びる髪は見事なまでに艶やかだった。

「これって俺なのか……」

鏡に写し出された自分の全身図に俺の意識は囚われていた。

「洒落にならないな……」

あまりの変わり様に冷や汗が頬を伝った。

触れた頬は男の時と違ってかなりきめ細かった。

舌を出してそっと唇を舐めれば、唾液に妖しく濡れる。

いつしか俺の視線は鏡の向こうの少女に吸い込まれていた。

トクン、トクン、トクン――

胸の奥で鳴り響く心音。

触れたい、抱きしめたい。キスしたい。

じれったくもどかしい感情が心の中でうねる。

「魅入ってますね」

「魅入ってるわね」

「魅入ってるね」

無意識に鏡に向かって伸びた手が、背後からの三人の言葉に止まった。

「な、な、な! ? 誰が魅入ってるって、誰が! ? そ、それより

早く帰ろうぜ」

逃げるように鏡から身を翻し、階段に向かう。

反射的に段数を抜かして駆け下りるが、スカートに舞い込む風に踊り場で足を止めた。

そんな俺の姿を見てはクスリと笑う奈月ねえ。

「出雲。スカートが慣れていないんだから、静かに歩いた方がいいわよ」

その忠告に、カーツと頬が熱くなった。

「あと、極力話さないようにした方がいいわね」

「何故？」

「今のままの口調で話していると、周りの注目を集めるから。誰かに突っ込まれたら答えようがないでしょ？」

下駄箱に向かえば、美奈ねえの手によって用意されていたローファ―に足を通す。

ここに来て始めて気付いたんだけど、足のサイズも一回り以上小さくなっていた。

今の自分じゃだぶついて履くことも出来ない愛用のスニーカーは、紙袋に入れて持って帰ることにした。

司書室ではそれなりに気丈に振る舞っていたが、さすがにスカートの丈の短さが気になって、身体の前に両手で学生カバンを提げ、裾から見える太股を隠そうとする。

「美奈先生、さようなら」

空もかなり暗くなり、周りには部活動を終えた生徒達が俺達と同じように下校を始めていた。

「はい、さようなら」

手を振ってやんわり応える美奈ねえ。

生徒に人気があるためか、遠くに行く生徒までもが美奈ねえに挨拶をしていく。

「そう言えば、茜ちゃんの住んでるトコってどこになるの？」

「二丁目のめぞん天の川と言うアパートの103号室です」

「じゃあ、そこ解約ね。手続きの方、姉さんよろしくね」

「はいな」

とんでもないことを口にする奈月ねえにそれをあっさり承諾する美奈ねえ。

「ちょ、ちよつと奈月先輩に美奈先生!？」
そんな二人に慌ててる確氷さん。

「部屋を解約って、私にどうしろと言うんですか? まさかやはり八坂君のことを女性にしたことを根に持って――」

「違う違う」
パタパタと手を振る奈月ねえ。

「茜ちゃんはこれから出雲の家に寄宿するのよ」
「俺ん家!？」

素っ頓狂な声を上げ、慌てて口を閉ざす。幸い、下校途中の生徒の誰にも聞かれていないようだ。

「どうして俺ん家なんだよ?」
声のボリュームを下げて、会話に混ざる。

「だって、みんなが固まっていた方がお互いフォローがしやすいでしょ。本当はウチでもいいんだけど、二人とも来る? 奈々姉さんなら喜んで招いてくれるわよ」

「け、けっこうだ」
首を横に振って全力で断る。確かにあの人は喜んでくれる。でも、その喜び過ぎなのが問題だ。

「八坂家なら人が一人二人増えようが問題ないでしょ?」
「そりゃまあ、あの家は今俺一人しか住んでないし、一人二人ぐらい増えようが――って、二人も増えるのか?」
「董ちゃんが来たら泊まる場所の一つも居るでしょ?」

「あ、あのお、いいんですか、八坂君？ 私なんかがご厄介になったりしても。それに、その姿になった元凶は私達ですし……」

「そりゃまあ、巻き込まれてこんな姿になったんだから恨み言の一つもあるけどさ」

俺の言葉に碓氷さんの小さな肩がビクッと奮えた。

「でも、俺は碓氷さんを守るために動いたんだ。だからこれは名誉の負傷ってヤツかな？ 碓氷さんが気に病む必要はないさ。それに、碓氷さんを守れたことは良かったと思ってるし」

「八坂君……」

俺を見ては、ぽっと頬を紅くする碓氷さん。心なしか瞳が潤んでいるようにも見える。

「出雲。セリフは格好いいけど、その姿で言うとき……妖しい関係にしか見えないわよ」

「ば、ばかやろ！？ 俺はただ純粹にそう思っただけで――」

「そ、そうですよ、奈月先輩！ わ、私達はまだそんな関係じゃありません！！」

「はいはい。騒いでないで早く帰るわよ」

軽く俺達をあしらうと、帰路へと促す奈月ねえだった。

4話

「ここが八坂君のお家なんですか？」

学校から歩くこと20分。

俺達は商店街の路地裏にある家にたどり着いた。

「あたし達はこっちだから。また後でね」

手を振って奈月ねえと美奈ねえは隣の家へと消えた。

姫川家の裏にはもう一軒建物があり、商店街に面したそれは、二人の姉である奈々さんが経営する雑貨店だ。

玄関までやってくると、インターホン脇にあるパネルを開け、そこにあるレンズを覗き込み数字を入力する。

「電子ロックとか言うモノですか？」

「解るんだ」

俺の感心したような雰囲気察したのか、むっと口を尖らす碓氷さん。

「いくら私達が隠れ里の田舎者とは言っても、それくらい解りますよ」

「悪い、悪い。電子ロックなんて珍しいからよく解ったなって思っただけ」

素直に謝る。

「うちの場合、両親が世界中を駆け巡る考古学者でさ。家に色々な発掘品を置いてあって、中には価値のあるモノとかも混じっている

らしく、泥棒対策だって設置したんだ」

ガッチャン――

カギの開く鈍い音が響いた。

「ほっ。性別が変わっても虹彩は同じだったか」
胸を撫で下ろす。

外的に今の自分を『八坂出雲』と証明する術が無い状況。もし通常の手段で鍵が開かなかったら、厄介な状態になっていたかも知れない。

これが指紋識別や静脈識別タイプのロックだったらやばかったかもな。

幾ら形は同じでも、サイズが少し縮んでいるからな……

「まあ、大したモノも無いけど、どうぞ」

「お、お世話になります」

深々と頭を下げて俺に続いて家に入ってくる確氷さんだった。

「あっ、確氷さんって、堇さんと双子なんだよな？ それって一卵性で良かったっけ？」

「はい、堇とは一卵性双生児ですが……私のことも茜と呼んでくれませんか？ 堇と混同されては困りますから」

「じゃ、茜さん。二人とも虹彩って同じなんだな」

「虹彩って瞳での識別に使うヤツですよ？ あいにくとそちらは見比べたことはいです。指紋でしたら良くは似ていましたけど」

「良く……か。双子でも全てが一致するモノじゃないって話だった

な。まあ、後で茜さんの分だけでも電子ロックに登録しておくかな。そうすれば、俺と一緒に居なくても家に入れるだろうしさ」

「そこまでしていいんですか？」

「大丈夫では？」

訊ねる茜さんに、俺は疑問系で返した。

「そんないい加減な――」

忍びとして厳粛に生きている茜さんには俺の言葉は軽く思えたかも知れない。

でもさ、

「美奈ねえが何も言わなかったからな」

それがいい加減な理由だった。

「美奈先生が？」

「美奈ねえはあれでも人を見る目があるからな。あの人が俺と茜さんの同居に付いて何も言ってこなかったってコトは、キミは信頼できる人物だってことになる。それに、俺もそう思ったから問題なし」
断言してみれば、返す言葉がないのか茜さんは押し黙った。

「こっちがキッチンにリビング。廊下の突き当たりがトイレでその手前の右が脱衣所に風呂。その部屋は両親の寝室で階段の下の地下室は二人の研究室兼発掘品の物置――なんだけど、最近は溢れてそこら中に置いてあるな」

部屋中に置かれた妖しげな調度品を避けながら、家の中を案内していく。

「で、俺の部屋は二階」

一階を簡単に説明すると、二階へと場所を移す。

「俺の部屋はここで、他の3つは空き部屋兼物置。どこでも好きな部屋を選んでくれ」

「じゃあ、八坂君の隣の部屋で」

「隣か——って!？」

開けたドアの向こうに広がる空間に俺は固まった。

「どうかしたんですか？」

怪訝に思い、茜さんがヒョッコリと覗き込んでくる。

「これって……私の部屋の？」

そんな茜さんも、俺と同じように啞然としていた。

空き部屋で何も無いはずのそこには、何故か家具が一式揃っている。

それも、誰かが使っていたような形跡を残して……

「これ、私の家具ですよ？」

部屋の中には、TVにミニコンポ、小さなテーブルにクッション。更に部屋の片隅に置かれた葛籠には忍び道具まで揃っていた。

たぶん、クローゼットの中には衣類が詰まっていると思うけど……

「どう言うことなんですか？」

忍び道具を手に取り、啞然と訊ねてくる茜さん。

「美奈ねえか奈々さんの仕業だと思うよ。俺達が帰ってくる前に荷物を運び入れたんじゃないかな？ 姫川家の人々には一部のセキュリティを解除できるようにしてあるからな」

独り暮らしをしてる俺のことを思ってたか、親父が姫川家の人達に

俺の世話を頼み、その為、入り口を開けられるように電子ロックに登録していた。

「まあ、揃っているならそのまま少し休んで。俺も1時間程休みたいから」

呆然と部屋を見渡してる茜さんを残し、俺は自室へと向かった。茜さんには悪いが、普通ではあり得ない状況に俺も心底疲れていた。

「ふう……」

自室に戻ると、バツタリとベッドに倒れ込む……が、身体の下で潰れた胸を感じて慌てて仰向けに寝直す。

「女の子……か」

みんなの前ではさして気にしないように振る舞っていたんだけど、俺も年頃の男だ。さすがに女の身体は気になって仕方ない。

そっと胸へと手を向けてみれば、制服越しに感じる確かな弾力。そして何より、揉まれていると言う相反した感触も脳へと伝わってくる。

「気持ち良いと言うよりは暖かいな」

少し揉んでみるが、くすぐったいだけだった。

美奈ねえにブラジャーの手ほどきを受けていた時はもう少し身体の芯から来る震えみたいなモノがあったんだけど、それが無い。

「何かないかな？」

見渡せばベッドの脇に雑誌を見つけた。

無造作に開けたページにはグラビアアイドルの写真が並んでいる。

「ええっと、膝を曲げて、手がこうで――」

何となくグラビア写真のポーズを真似てみる。

媚びるように胸を強調したポーズ。四つん這いになり背中をしならせ尻を突き上げてみては、捲れたスカートの裾に慌てて起きあがる。

「何やってるんだ……俺は」

雑誌を投げ捨てペタリと腰を下ろせば、M字型に足を曲げ広げて座っていた。そんな普通の男には無理な座り方に、骨格そのものが女性化してることを理解する。

「着替えるか」

クローゼットを開けては、項垂れた。

「そう言えば、洗濯してなかったな」

ここ数日、雨やら何やらで洗濯をサボっていたコートを思いだした。

「何か有ると良いんだけど」

クローゼットの中を漁り回ってみれば、新品のTシャツが見つかった。

それは、海外から帰ってきた両親が土産と称して置いていったビッグサイズのTシャツ。プリントされた文字は何故か漢字で『冬將軍』と描かれている。

こんなモノでも無いよりかはマシか。

「あれ？ 脱げない」

セーラー服を脱ごうと裾に手を掛け引っ張り上げようとするが、伸縮性のほとんど無いソレは上手く脱げなかった。

「あっ、そうか。横にファスナーがあつたな」

ファスナーを開けてから再度脱ぎにかかる。

途中、胸に服が引っ掛かったりしたが何とか脱ぐのに成功し、セーラー服から長すぎる髪の毛を引っ張り抜いた。

鏡に映るブラジャー姿の自分の姿にドギマギしながらも、美奈ねえの手によってたぐり上げられたスカートの腰の部分の折り返しを戻しホックを外すと、すんと下へ落ちた。

「うっ。尻がきつい」

いつも履いているジーンズに足を通してみれば、尻の部分がかなりきつかった。

それでも無理に履いてみれば、腰回りはかなり空いている。

「くびれているな……」

男の体系とは明らかに違う腰のくびれ。ベルトで締めようにも穴の都合で絞りがない。

「仕方ない。スウェットでも履くか」

ジーンズを脱ぐと、寝間着代わりのスウェットを履き、紐を今のウエストに併せて縛り直す。

その上で見つけたビッグサイズのTシャツを着てみれば――

「ブカブカだな」

それはあまりにも大きすぎた。
そして何より、

「可愛くない」

鏡に映ったその姿は滑稽で、ずばらな女の独り暮らしを連想させる。

いくら人目が無いとは言え、正直、その姿はあまりに酷すぎて納得できなかった。

「別の着替えを探すか」

再びクローゼットを漁り、見つけたのは長袖のYシャツだった。

Tシャツとスウェットを脱ぐと、Yシャツの袖に腕を通す。

腕の長さ自体は身長ほど短くはなっていなかったが、それでも袖口から指がギリギリ出るくらいだった。

ボタンを止めてみるが、腹の部分は難なく掛かるが、胸の部分はきつかった。

「胸のトコは外しといった方が良いか」

胸の部分のボタンを外し鏡の前に立てば――

「うっ」

――絶句。

鏡に映った姿を見ては、俺は声を失った。

マンガとかで彼氏のYシャツを裸で着込むヒロインの絵とかが有

るが、正に今の自分はソレだった。

袖口から伸びる微かな指先。はだけたシャツの下に見え隠れする胸の谷間と、膨らみ感じさせるシャツの皺。裾から伸びる白い生足は異様に色っぽく、扇情的だった。

——カッン。

「ッ！」

無意識に伸ばした手が鏡に当たって、正気を取り戻す。

「何やってるんだよ、俺は」

勢いよく頭を振るう。

「だいたい、自分の姿を見て欲情してどうするんだ」
鏡に背を向け必至に気を落ち着けさせる。

本当ならギンギンに固まっていそうな分身はどこにもなく、その変わり何とも言えないモヤモヤ感が体の中で渦巻き、落ち着かない。

「すーはー、すーはー………うっ」

心を落ち着けようと深く息をすれば、ブルツとした身体の震えと共に急激な尿意が襲ってきた。

「ト、トイレ……」

部屋を出ようとした足が止まる。

さすがに、この恰好で廊下に出て茜さんと出会うと困る。

慌てて制服のスカートを手に取るとそれを身に着けた。

男物のYシャツに裾丈が長いままのスカートと言う滑稽な姿になったが、Yシャツだけで出歩くよりはましと割り切る。

部屋を出る前に、鏡で姿を確かめようと思ったけど、尿意が限界に達しても我慢できそうになかった。

トイレに駆け込むと、便器の前に立ちスカートの裾を持ち上げシヨーツを降ろし――伸ばした右手が寂しく空を掴む。

「無いんだったな」

慌てて身体を反転させて便座に腰を下ろすと、しても良いという安心感が伝わったのか、意識するよりも早く股間からは尿が放たれていく。

視線を落とせば、胸の膨らみの向こうには男として有るべきはずのモノは無く、男の時よりも薄くなった陰毛のその下には微かな膨らみと――女としての割れ目が見えた。

男の時と違い尿道を通ってる感じがせず、いきなり膀胱から放出してる感じがして不思議な気分だ。

全てが流れ出たのを確かめ立ち上がろうとするが、雫が股間を伝うのを感じ慌てて腰掛け直す。

「これって、拭いたりするんだよね？」

さすがにこのままシヨーツを履いたら、染みが出来てしまう。

トイレットペーパーを千切りろうと視線を横に動かせば、ウォシユレットの操作パネルが俺の目に入った。

『ビデ』

男の俺には本来関係ない機能だ。
でも、

「今は女だから使っても良いんだよね？」

誰に聞くでもないのに呟きが口をついて出ていた。
それを使うことに対する背徳感を誰かに否定して貰いたかったの
かも知れない。

勢いよく飛び出す温水が股間の割れ目に当たる。
くすぐったくも適度な刺激は不思議な心地よさを感じさせた。

「……こんなトコか」

スイッチを切れば、水流は弱まり、そして途切れた。
トイレットペーパーを小さく折り畳み、股間にあてる。
水気を吸い取るように優しく拭う。

「あ……」

軽いタッチのはずが、ウォッシュレットの刺激により少しだけ意識
が向いていた秘所は、そんな微かな感触すらも敏感に感じ取って
いた。

今更ながら股間に何も無いことを今まで以上に認識させてくれた。
そんな男ではあり得ない感覚を意識した途端、身体が火照って
くのを感じる。

無意識に指が伸びていく――

コン、コン。

突然のノック音に、俺の丸まった背筋がビクンツと跳ね上がった。
「な、なにか、よ、よう、か？」

声を上擦らせながらも何とか言葉を返す。

「出雲？ 奈々姉さんが夕飯を作ったから二人もどうかってさ」
「解ったから、茜さんにも伝えてきてくれ」

「茜ちゃんは二階よね？」

「そうだよ」

パタパタパタと立ち去っていく気配に、ホッと胸を撫で下ろす。
そして、なるべく意識しないように、股間も拭く。

「あっ、出雲」

「なんだよ？ まだ何かあるのか？」

気を抜いたところへ再度掛けられた声に、思わず返事が荒くなる。

「んー、ちよっとね。トイレでし終えたら、後ろから前へと拭いたりしてない？」

「え？」

「女の子の場合、その逆じゃないと大事な部分が汚れるから気を付けてね」

言うことだけ言うと、奈月ねえの気配は二階へと消えていった。

今のって、トイレの使い方のアドバイスなんだよな？

内容を頭の中で反芻する。

確かに、大きい方をし終えたら、後ろから前に向かって拭いていたっけ。

ここで言われなかったら、男の時となんら変わらず拭いていただろう。

「女の身体って面倒臭いな」

さっきまでの痴態を棚上げし、そんな感想が口をついて出ていた。水を流して、トイレを後にする。

「私まで、お食事にお呼ばれて良いんですか？」

「問題ないわよ。勝手に引越しまでさせたんだから、食事を作る準備も無いでしょ」

二階の廊下からそんな話し声が聞こえてきた。

「それに――」

階段を上ってきた俺の方へと振り返る奈月ねえ。

「何だよ？」

眇める奈月ねえの視線に耐えきれず、思わず身構える。

「面白い恰好してるわね」

「適当な服が無かったんだよ」

無然と応える。

「そう言うことで、出雲の着替えがいるからその見積もりよ。あと――」

一度言葉を切り、

「これからの対策も考えないとね」
そう続けた。

「これからのこと？」

不思議そうに聞き返す俺に、奈月ねえは疲れたように息を吐く。

「あんたね。そんな身体で学校に行けると思ってるわけ？ 一日二日で戻れるとは思ってないでしょ？ 夏休みまではまだ3日はあるんだから、最低でもそれだけの期間を誤魔化す方法を決めないかね」
そうだった……

「そこら辺も含めての対策会議よ」

結局、あのままの姿では不味いと思い、セーラー服に着替え直してから、俺達は隣の姫川家へと向かった。

「うわ♪」

姫川家の玄関を開けて出迎えたのは、一際大きな歓喜の声だった。それは、20代半ばの女性——奈々さんのものだ。

「ちょっと姉さん。玄関で大きな声出さない——きやあ」

ドゴン！

実の妹を横の壁に押し退け、そのままの勢いで俺を抱きしめてきた奈々さん。

「すっかり見違えちゃったわね、出雲クン」

「こ、こんばんわ、奈々さん」

腕から逃げようとしてみるが、筋力の落ちた俺では日々戦い続ける奈々さん相手には敵わなかった。

「やぁん♪ こんな可愛くなっちゃって。お姉さん家の娘にならな

い？ 四姉妹って響きもいいしね♪」

「そ、それは……」

言葉に窮してると、遅れて茜さんが入ってきた。

「あ、あのお？」

「あなたが茜ちゃんね。私は美奈ちゃんと奈月ちゃんの姉の奈々よ」

「え、あ、はい。碓氷茜です」

「何でも忍者の隠れ里から逃げ出してきたそうで……ううう。もし助けが必要なら何でも言っ
てね。お姉さん、何処にいても助けてあげるから」

目に涙まで浮かべ抱きついてくる奈々さんに、困り果てる茜さん。

「ああ、うっさい！」

スッパアーン！

「姉さん、食事でしょ、食事！」

奈々さんの頭を殴ったスリッパを片手に睨む奈月ねえ。

「うう……奈月ちゃん、酷い」

「もっと酷いことされたくないければ、さっさと食事にしましょ。やらなくちゃならないことは山のように溜まってるんだから」

パンパンとスリッパをで手の平を叩きながら、奈月ねえは話を進めた。

「さあ、二人とも上がって」

「お邪魔します」

「奈々さんはいいんですか？」

玄関で奈月ねえに対する愚痴を零しながらおいおいと泣き崩れる奈々さんの姿が気になる茜さん。

「いいわよ。それくらいで堪えるような姉じゃないから」

「本当にいいの？」

「いつものことだよ」

応えて苦笑するしかなかった。

初めての茜さんには衝撃的かも知れないが、俺にとっては良くある近隣の風景なのだ。

5話

「ごちそうさまでした」

「お粗末様でした」

姫川家の夕食を味わった後、俺達はこれからの対策を話し始めた。

「問題はどうやって今の出雲を学校に通わせるかよね」

「後数日で夏休みなんだから、別に休んでも良いんじゃないか？」

皆勤こそ無いが、俺の出席率なら少しぐらい休んでも問題ないはずだ。

「こらこら、出雲ちゃん。仮に先生がいる前で堂々とずる休みを宣言しない」

一応教師である美奈ねえが窘めてきた。

「そう言われても、それが一番楽な方法だろ？」

「でも、学校に行かないと困るわよ」

「困るって何が困るんです？」

疑問を口にする茜さん。俺もそれに習って首を傾げる。

「あそこの図書室はこの都市で一番の『智』が集まってるのよ。董ちゃんがどれだけの情報を入手できるか解らない以上、こちらでも打てる手は打った方がいいでしょ？」

（八坂君。あそこの図書室ってそんなに凄いですか？）

（歴代の図書委員長が趣味で蔵書を増やしてるらしくて、妖しげな本も揃ってるって噂だな）

小声で問われ、小声で返す。

「建前上、出雲は海外にいる小父さん達の元に行ったことにするの
が一番ね。当初は夏休みからの予定だったけど、諸般の事情で前倒
しになったとでもすれば問題ないでしょう」

「それはいいけど、それで俺はどうするんだ？」

「従妹が遊びに来たとしても言えばどう？ 名前はそうね……『いず
も』の名前を読み方変えて『いずみ』でどう？」

「いずみちゃんね。可愛いし、私は賛成よ」

「私も良いと思うわね」

「良いと思いますよ。あまりに本名からかけ離れると、自分で認識
できないことにもなりますしね」

あっさりと同意する姉妹に、忍者らしい考えを口にする茜さん。

「じゃあ、決定ね」

どこから取りだしたのか、ホワイトボードに『命名 八坂いずみ』
と書き込む奈月ねえ。

「いずも——じゃなくて、いずみ。あんた、これから関西弁で話し
なさい」

「へ？」

あまりに唐突な命令に、脳味噌に浸透するまでに時間が掛かった。

「どうして関西弁なんだ？ それに、俺、まともな関西弁なんて知
らないぞ」

知っている関西弁なんて、テレビでお笑い芸人が使ってるのぐら
いだ。

「別にまともじゃなくて良いわ。似非でもなんでもいいし、なんな

ら関西弁じゃなくても方言なら何でもいいわよ。とにかく今の男言葉に誤魔化せるレベルの方言なら問題ないわ。それとも、それが嫌なら女言葉に変える？ い・ず・み・ちゃ・ん」

「解ったよ、方言を喋れば良いんだろ、喋れば！」

さすがに女言葉に変えるには抵抗があり、渋々ながらも奈月ねえの考えを受け入れるしかなかった。

「じゃあ次は、八坂いずみの設定作りね。関西弁って言ったけど、純粹な関西弁じゃないから日本中を転校しまくったってコトにしようと思うけどどうかな？」

ボードに、言葉遣いは特徴的に書き込む。

「ねえ、奈月ちゃん。それならいつそ帰国子女にしてみては？ 海外で見た日本のビデオで日本語を覚えたコトにすれば、妖しげな口調になったって理由も成り立つわよ」

「そうですね。日本にいないければ、普通の女子校生がしない様な行動を取っても不思議がられませんし」

「そうですね。それで行きましょう」

美奈ねえと茜さんの言葉に奈月ねえも同意したのか、言葉遣いを消して変わりに帰国子女と記している。

「ちょ、ちょっと待て！ そんな設定なら、口調が多少ぶっきらぼうでも良いだろ？ 海外では父親一人娘一人で彷徨っていたことにすれば、男口調になってもおかしくないと思うけど」

「あつ、それもそうね。でも、最低限一人称ぐらいは変えなさいね」「解ったよ」

一人称ぐらいは妥協するしかないか。

「学校には、急遽娘一人だけ日本に帰ることになり、通う学園を探

す為見学に来たってコトでどう？ 海外に旅だった出雲ちゃんの代わりに夏休みまでの残り期間をお試し登校とでもすれば問題無いわね」

「無いわねってね——美奈ねえ、そんな簡単なコトじゃないだろ？」
幾らなんでも、学校側が許してくれるとは思えない。

「んー、大丈夫よ——ねえ、奈々姉さん」

「理事長と校長の方に手を回しておけばいいのね」
妹に促され、さらりと凄いことをのたまう奈々さん。

「ちょっと待っていてね」

席を立つと別室にある電話へと向かっていったかと思うと、奈々さんは親指を立てて戻ってきた。

「交渉完了よ。それに、もし男の子に戻れなくても、そのまま八坂いずみちゃんで二学期からも通えるように話は付けておいたから」
それはそれで嬉しくもない気がする。

「な、何者なんですか！？ 私の荷物もあっさりと運び込んでしまったし……侮り難いですね、姫川家の方々は」

隣の茜さんの頬に冷や汗が伝っている。

自分の荷物を運び入れた手際の良さを思い出しては、戦慄を隠せない様だ。

「じゃ、次は茜ちゃんといずみの関係ね」

「わ、私と八坂君の関係ですか！？」

「そう、茜ちゃんとの関係よ」

ボードに『茜ちゃん』の文字が書き加えられた。

「八坂家に住むんだから、それなりの理由を決めといった方がいいでしょ？ あっ、そうそう。『八坂君』は無しね。これからは茜ちゃんも『いずみ』って呼ぶように」

「いずみさん……ですか」

「出海といずみの関係を誤魔化す為よ。そう言うことで、いずみも『茜さん』じゃなくて名前で呼ぶようにね。その方が親しい関係に見えるでしょ」

「解ったよ、奈月ねえ」

投げやりに応じる。ここまでくると、もうどうでも良い気分だ。

「あら、その『ねえ』も無しね」

口を挟んできたのは美奈ねえだった。

「いずみちゃんが帰国子女になりきるなら、同年代の人には敬称無しと呼び捨ての方がらしさがでると思うの」
言われてみれば、確かにそうかも知れない。

「私や奈々姉さんぐらいならさん付けでもいいけど、生徒に関しては先輩後輩関係なく呼び捨てね。もちろん茜ちゃんにもね」

「よ、呼び捨て！？ 俺が奈月ねえを？」

今まで以上に狼狽する。

「ぶぶー。『俺』はダメよ」

「わ、わ、わた、わたしに――な、奈月」

胸の前で×を作る奈々さんに対し、俺は頬を引きつらせながらも何とか言い直した。

「はい、良くできました」

花まるでもくれそうな美奈ねえ――美奈さんの笑み。

一人称の変更もそうだが、『姉』として慣れ親しんだ奈月ねえ――奈月を呼び捨てにするのに、かなりの抵抗があった。

「それで二人の関係なんだけど、茜ちゃんの故郷にたまたま小父さん達が考古学の調査で立ち寄って知り合ったって話でどう？」

どう――と言われても応えられないのか、言葉に困っている茜さ――茜。

「始めは独り暮らしをしようとアパートを借りたんだけど、叔父さん達がそばに住んでいることを知り、話したら八坂家に住めばいいって話になって急遽引っ越したってトコでどうかな？」

「もし親父達が帰ってきたらどうするんだ？」

設定自体はおかしいけど、親父達が帰ってくればあっさりと破綻してしまう。

「あら、八坂の小父さん達との口裏合わせは終わってるわよ」

「奈々さん!？」

いつの間に連絡したんだ!？

そんなそぶりは全く見てないぞ！

「連絡はさっき電話を使った時に一緒にしておいたわ」

「うちの親たちは他に何か言ってたなかった？」

「親たちじゃなくて、叔父さんたちね。今のいずみちゃんは八坂家の遠縁の娘だから」

そう言われても、まだ作りたての設定に付いていけない。

後で紙にでもメモっておくかな。

「色々とお世話を頼まれたわね。ちゃんとした一人前の女の子にな

れるようにって」

「げ……」

「そう言うことだから、お店の方に行きましょ。制服姿でずっとはいられないでしょ」

俺の返事を待たずして、背中を押して部屋を出ていこうとする奈々さんだった。

シャッターを下ろしているためか圧迫感を感じさせる店内には、多種多様な物が並び、奥にはTシャツからドレス、はては民族衣装に扮装用のコスプレ衣装といった衣類が揃っている。

「こちらは？」

瞳を爛々に輝かせ、茜は辺りを見渡していた。

忍者とは言え、年頃の女の子。こう言うのも好きなようだ。

「私が経営してる女の子向けの雑貨店『姫』よ」

「へえ、そうなんですか」

「小物とかインテリアが多いけど、服とかも扱ってるし個人輸入している外国の下着もあるから、着替えを幾つか見繕いましょね」

「あっ、茜ちゃんも何か欲しい服が合ったら言ってね。一組ぐらいなら奢るわよ」

「いいんですか？」

「いいでしょ、奈々姉さん？」

「いいわよ」

「ありがとうございます」

大きく頭を下げると、店内を駆け回り出す茜だった。

「ねえ、いずみちゃんはどうな服装が良いの？」

「どんなつて、ジーンズとTシャツ辺りで」

レディースジーンズへと目を向けながら、なるべくラフで抵抗のない服装を希望する。

無駄だと思うけど……

「ダメよ」

「どうしてダメなんだ？」

何となく止められるとは思ったけど、理由ぐらいは知りたい。

「だって、いくら口裏を合わせたとしても、男の『出雲』が消えた後、そっくりな顔立ちをした女の『いずみ』が現れるんだから、疑いだす人も出てくるじゃない」

「じゃあ、どうするんだ？」

「着飾るなら女の子をアピールした服装ね——ってコトで、まずはコレね」

棚から無造作に取り出した物を押し付けてくる奈月。そいつを指先で摘んで広げて見ては言葉を失った。

それは今着ている制服のスカート以上に丈の短いスカートだった。

「も、もっと普通の丈のは無いのか？」
せめてもの抵抗を口にする。

「そう言うのは今度」
「今度？」

「だって、まずはいずみの股間におちんちんが付いてないことを周
り解らせる様にしないとね」

「ぼっ！？ そんな——」

いつもの『奈月ねえ』からは決して耳に出来ない様な言葉に、顔
が熱くなる。

「女の子に幻想持っているなら捨てた方が良いわよ」

俺の慌てぶりに対し、奈月は冷ややかな笑みを浮かべてみせた。

「男の見てない前では、女なんてみんなこんなモノよ」

「そうね。私も学生時代は仲のいい娘たちとで猥談なんかしたもの
ね」

奈々さんにまで言われて、俺の中の女性に対する幻想が音を発て
て崩れていく気がした。

「で、でも、ミニスカートだけは——」

「仕方がないわね。下はコレで上はこのTシャツに——着替えてみて」
反論言う間もなく、角の一角に備え付けられている試着室へと押
し込まれた。

狭い試着室の中で押し付けられた服を確かめてみれば、それはデ
ニム地のミニボトムだった。

ただ、

「このズボン……さっきのスカートよりも小さいような……」

まあ、それでも下が開いているスカートよりはマシか。

意を決して、俺はそれに着替えることにした。

制服を脱ぎ、ズボンへと足を通す。

部屋で履いたジーンズと違い、ピッタリとしながらも問題なく尻は収まり、ウエスト周りもちょうど良かった。

さらにTシャツも着込んでみるが、それはサイズがきつめに思えた。

「こんなモノかな——!?」

状態を確かめようと鏡へと顔を向ければ、そこにはすらりとした美脚を惜しげもなく伸ばし、胸を強調するような姿の女性がいた。

「これが俺——私なのか？」

本日何度目になるか解らない疑問符を浮かべる。

決して大きいわけでもないが、形の整った胸。腰のくびれを感じさせる身体のライン。スカートの時以上に長く見える足に、きゅんっと突きだしたヒップ。

街でこんな女性に出会ったら、自分の視線は釘付けになっていただろう。

「さすがにこれで外を歩くのは無理だな」

カーテンの方を向き、顔だけ出して奈月に呼びかける。

「奈月……もう少し、だぼっとしたヤツないかな？ 膝上のスカート

でもでもいいから、もう少しだけ落ち着いたヤツを」

「そんなのダメよ」

懇願する新人少女である俺——私を、奈月はあっさり切り捨てた。

「ある程度周りに、今のいずみが女の子だって認識が浸透したのならロングスカートでもジーンズでもいいわよ。でもね、今から数日はそう言う恰好——ね」

「うわ!？」

いきなりカーテンを開けられ、思わず顔を隠してしまう。
見られることが恥ずかしかった。

「ほえ……綺麗ね」

「いずみさん、格好いいです」

「スタイルがいいとは思っていたけど……ここまでとはね」

奈月は、自分で着せておきながら笑みを引きつらせていた。そんな彼女の肩をとんとんと叩き、奈々さんが店内の一点を指さした。つられて指の間から窺えば、そこには身体のラインがハッキリ解るタイトな白いミニのワンピースを着込んだマネキンが立っている。

これで何かのロゴが印刷されていれば、どこかの企業イベントでのキャンペンガールだけど……

まさか、俺にアレを着させる気が!？

「いずみちゃんのスタイルなら、こう言うのも似合うんじゃない？」

「奈々姉さん。それなら、下着もTバックにしないと見えるわよ」

「あっ、そうね。でもそうなるブラジャーの方も換えないと」

俺の心配をよそに、事態は雪だるま式に悪化していた。

ワンピースと一緒に、俺——私の手の上にはTバックのショーツがあった。

ゴクリと生唾を飲み込む。

美しい女がコレを身に着けてるのなら、是非とも見てみたい。

でも、

自分が着るとなれば話は別だ。

「こ、これを着るのか？」

「まだまだ衣装はあるからね。じゃんじゃん着替えましょ」

楽しげに笑う奈々さん。このままだと、売り物の全てを着せるつもりなのかも……

ある種の戦慄を覚えながらも、姫川家の三人には抵抗するだけ無駄なのを骨の髄から理解してる自分には、従うしかなかった。

渋々ながら手渡されたワンピースに着替え始める。

その後もファッションショーは続き、そのどれもが『女』を強調した服装ばかりであり、どんどんどんどん自分の中の何かが犯されていく気がした。

「ふぉわぁ〜」

十数着目か、それとも数十着目か解らない、黒のノースリーブに同系色のミニスカートを着終えた私の口からは、唐突に欠伸が出た。

「眠いの？ まだ九時よ？」

「なんか、急激に眠くなってきたんだよ……」

しばしばする眼を擦れば、涙も浮かんでいた。

「たぶん、術による肉体変化の影響だと思います。強制的に肉体を変質させましたから、その疲れが出てきたかと」

「今日の所はこれでお開きにした方がいいわね。はい、これと——今着てるのもそのまま着替えに使って良いわよ」

奈々さんの言葉でお祭りは終わりを向かえた。

着せ替えられた服と下着の中から幾つかを紙袋に入れて渡される。十数着分は有りそうだけど……全部着ることが無いのを祈りたい。

「あっ、いずみちゃん」

家に帰ろうと裏口に向かうところを奈々さんに呼び止められた

「なんでふか、ななふあん？」

返事と同時に欠伸が出て言葉が崩れる。

「制服のスカートの丈直して置いたから。いちいち捲り上げなくて
もいいわよ」

「はぁ……」

ありがとうございます」

よく解らないけど、礼を口にする。

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみい」

「またね」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

挨拶をして隣の自宅へと戻ると、慣れた手付きで電子ロックを解除する。

そのまま二階へと上がり、

「茜……悪いけど俺——じゃなかった、私は寝るから。お風呂とか
勝手に使ってくれ」

部屋の扉を開けながら、それだけを口にする。

「あ、はい。おやすみなさい、いずみさん」

「おやすみ」

貰った服の入った袋を壁際に置き、着ていた服も無造作に脱ぐと、一度家に帰ってきた時に試しに着た大きめのTシャツをすっぽりと被る。

「ねるか」

眠気に麻痺した思考のまま、電気を消して布団へと潜り込む。余程眠たかったのか、すぐに私の意識は闇へと落ちていった。

【OFF—SIDE】

「ねえ二人とも」

二人を見送った後の姫川家に響いたのは、冷たさを含む奈々の声だった。

先ほどまでのニコニコ顔は一転し、神妙な顔つきで二人の妹を見つめる。

「どうしていずみちゃん——出雲クンを元に戻してあげなかったの？ 二人なら出雲クンが気付く前に戻せたでしょ？」

「それは美奈姉さんがあたしの邪魔をして！」

きつい睨みを向ける三女に対し、のほほんといつももの優しさを翳らせない次女。

「だって、この方が面白いと思ったの。それに、『女の子』を体験しておけば、元に戻った後でも色々気遣ってくれると思うのよ——ねえ、奈月ちゃん」

「そう言うことなのね」

眇めた美奈の視線に何らかの意図を察し、溜息をつく奈々。

「それなら私からは何も言わないわ。二人でちゃんと最後まで面倒を見なさいよね」

「わかってるわよ！」

荒れ気味に叫ぶと奈月は自室へと戻っていった。美奈もまた軽く苦笑し、自分の部屋へと消えていく。

独り残された奈々は、

「しかし忍者とはね」

壁越しに見えない八坂家を見据えながら呟いた。

「隣りに私達が住んでいるだけでも大事なのに……さすがは『特異点』とでも言ったトコかしら……これからが大変よ『出雲』くん」

6話

パタン。

パタツ、パタツ、パタツ――

「う……………ん……………」

慌ただしい音に目を覚ました。

「朝か――うわぁ!？」

体を起こそうとしては長すぎる髪を踏んでしまい、思うように立ち上がれない。

「戻ってないか」

寝ぼけ眼で自分の身体を見下ろしては、肩を落とす。

夢であったことを期待したが、胸の膨らみはそこに合ったままだ。扉を開け階段を降りると、ご飯の炊けた匂いが漂ってきた。覗いたキッチンでは、制服の上にエプロンを付けた茜が忙しく動いている。

「あっ、おはようございます、いずみさん」

「おはよ」

身体の変体に伴っての影響か、かなりの低血圧気味な様で身体が重い。

「シャワーあびてくる」

それだけ告げると、俺は気怠さを引きずりながらバスルームへと

向かった。

脱衣所に立つと、着ていたTシャツを無造作に剥ぐと付けたままだったブラジャーを外しショーツも脱ぎ、バスルームへと入る。

少し冷ための温度に調整すると頭から水飛沫を浴びれば、寝ぼけた身体に浸透してくる冷たさは、頭を少しずつ覚醒させていく。

伝う雫の一つ一つが身体の輪郭を感じさ、心を体へと向かわせる。

「女の身体か」

視線を落とし見つめる膨らみには、ブラジャーの跡が微かに残っていた。

着けたまま男の時の感覚で寝返りしまくった影響だと思う。

今度寝る時は外しておいた方が良いかな。

漠然とそんなコトを考えながら、シャワーを浴びながらそっと胸をさすれば、柔らかさが伝わってきた。

女の快感——か。

昨夜のトイレでの出来事を思い出しては、生唾を飲み込む。

自分が何をしていたがっているのかは解っている。

そして、それを止めているのは理性でも何でもなく、ただの背徳感だった。

男の俺がソレを感じるのは世の中の摂理に反し、感じて良い代物じゃないのは解っている。

でも、

女の身体になったことが奇跡なら、いつその奇跡が終わるのかも

解らない。

茜が、堇が、奈月が――

みんなが戻す方法を探してくれているけど、戻れない可能性も高い。

だからこそ、

逆に言えば、唐突に戻る事柄もあり得た。

今、この瞬間に元の男としての身体に戻るかも知れない。

「俺の身体だから、別に何してもいいんだよな」

いつしか俺の思考は、好奇を満たすことに対する言い訳を必至に探し出していた。

だけどそれは仕方のないことだ。

男の心を持つ者として、女の身体は神秘そのものであり、興味を刺激してくれる。

まして、神秘が今の自分の身体と来れば、鼻先にニンジンをおぶら下げられた馬と同じだ。

刺激された俺の心は、耐えれば耐えるほど飢えていく。

このまま貯めに貯めて、いつかどこかで爆発するとも限らない。他人の目をはばかりことなく、街角で胸を揉みだしてしまいかねない。

一度ガス抜きをしておくべきだ。

僅かに残る理性がそう結論を出す。

背後の曇りガラスの扉へと振り返ると、ドアノブへと手を伸ばす。

カチャ――

これでカギは掛かった。

脱衣場に茜がやって来ても、いきなり扉を開けることは出来ないはずだ。

そして、シャワーの温度を上げ水量を増やす。

立ち上る湯気がバスルームに充満し中の様子を分かり難くし、こだまする水音によって、少しくらい大きな声を上げても、キッチンにいる茜までには届かないだろう。

出来る限りの万全の対策を施してから、俺は降り注ぐシャワーの下で胸へと手を伸ばした。

やんわりと、その形を確かめるように両サイドから乳房を持ち上げてみる。

手の平の上に感じる確かな重量。

そして、昨日までの俺では決して感じることの無かった、胸を持ち上げられていると言う感覚。

軽く握ってみれば、プルンとした膨らみが簡単に変形する。

「はぁぁ……………あ……………ん……………気持ちいい……………」

胸を揉まれるというのは、ただひたすらにそれは心地よかった。

優しく、時には荒々しく。

飽くなき刺激を求め、手が勝手に動きだす。

「——すみさん。いずみさん」

突然の声に丸まった背筋が跳ね上がった。

「な、なにか、よ、よう、か？」

声を上擦らせながら振り返れば、曇りガラスの扉の向こうに人影らしいモノが窺えた。

「おみそ汁を作ろうと思ったんですが、味噌の方が白味噌と赤味噌あって、いずみさんはどちらを」

「す、すきな方を使ってくれ。どっちのみそ汁でも合わせでも、の、飲める、から」

「解りました。赤味噌のみそ汁って飲んだことがないのでそちらで作ってみますね」

パタパタパタと立ち去っていく気配にホッと胸を撫で下ろす。

先ほどの行為はばれてはいないみたいだ。

さすがに興も醒めたのか若干復活した理性を最大限駆使し、強引に冷水を浴びることで身体の火照りを黙らせた。

その後、比較的身体を意識しないようにしつつ身体を洗い終え、シャンプーを取って髪に付ける。

長すぎる髪に幾度となくシャンプーを追加し、四苦八苦しながらもそれを洗い終わると、これまた大量にリンスを付けた。

「これは早く戻らないと、シャンプーとリンスが高くつくなくだらしないことを考えながらバスルームを後にする。」

バスタオルで身体を拭き下着を——と、伸ばした手が止まる。

「着替えを持ってきていなかったんだ」

半分寝ぼけてここまで直行したため、昨夜渡された換えの下着は部屋に置いたままだ。

「仕方ないな」

腰にタオルを巻き脱衣所を出る。

「あっ、いずみさん。朝ご飯の準備が終わーいずみさん!？」
ヒョッコリ顔をだした茜が慌てて駆け寄ってきた。

「どうしたんだ、茜？ そんな慌てた顔をして」

「む、胸、胸を隠してください！ いくら私達しか居ないとはいえ、そう言うところをちゃんとしてないと、人前でも同じ行動に出てしまいますよ」

叱られて始めて、無意識に自分が男の時の行動をなぞっていたの
かを知る。

腰に巻いていたタオルを外し、身体全体を隠すように巻き直した。

「これでいいのか？」

「はい、いいですが……」

私の背後をしきりに気にする茜。

そんな彼女につられて振り返れば、脱衣所からここまで転々とした
雫の跡がそこにはあった。

どうやら、長すぎる髪の毛に残った水気が垂れてるようだ。

「着替えの前に先に髪の毛を乾かしましょう。そんなに水気を含んだ
髪の毛じゃ、着替えてる間に服が濡れますよ」

茜の指示でダイニングの椅子に腰掛けると、彼女は洗面台から持

ってきたドライヤーを私の髪の毛にかけ始めた。

暖かい風を感じながら、今更ながらに思う。

「長髪って面倒臭いな」

切ることが出来ないとは言え、かなり不便だ。

「ここまで長いと、一度濡らしたりすると乾かすのが大変ですからね」

ブラシで整えながらドライヤーを操る茜。

「茜ってドライヤーとか使えるんだ」

「いずみさん。いくら私の里が田舎の隠れ里だって言っても、文明開化はしてますよ」

少し拗ねたように言う茜に苦笑するしかなかった。

「ありがと。軽くなった」

首を左右に振れば、長すぎる髪の毛はサラリと靡く。

好い感じだ♪

「んじゃ、着替えてくるから、少し待っていてくれ」

「はい」

茜を残して自室に戻る。

昨晚渡された下着類の中から限りなく白に近い薄青色のブラジャーと横縞模様のショーツといった、おとなし目なのを選びだす。

さすがにTバックや紐パンを履く気にはなれないんだけど……

「どうして、豪華な装飾が施された黒のブラジャーやショーツにお揃いのガーターベルトまであるんだ？」

奈々さんの見立てなんだろうけど……

明らかに年頃の少女が身に着けるには不似合いな下着——俗に言う勝負下着まであった。

ショーツに足を通し、美奈さんに言われた手順で形を整えながら身に着けるブラジャー。

途中、カップの中に突っ込んだ手に反応し、乳首が尖り出したが、慌てて頭を振って雑念を消した。

「そう言えば奈々さんが最後に何か言っていたような……」
スカートを手に取りながら昨夜言われたことを思い出す。

『あっ、いずみちゃん』

家に帰ろうと裏口に向かうところを奈々さんに呼び止められた

『なんでふか、ななふあん？』

返事と同時に欠伸が出て言葉が崩れる。

眠気が限界で、自分が何を言ってるのかも解らない。

『制服のスカートの丈直しておいたから。いちいち捲り上げなくてもいいわよ』

『はぁ……、ありがとうございます』

よく解らないけど、礼を口にする。

——って、

「丈を短くしたのか」

いざ履いてみれば確かに短くなっていた。それでも、昨日のファッションショーと比べれば丈が長いので抵抗感は薄れていた。

「うん。腰回りがスッキリしてこの方がいいな」

正直、腰での捲り上げてでの調整は見苦しいと感じていた。

もし、始めから女なら、見えないところはもうだっていい——ぐら
いに思っていたのかも知れないんだろうけど……

若い男としては、まだまだ女に幻想を抱きたいものだ。

見えないところだってスマートにいきたいし、いって欲しい。

セーラー服を身に纏い、鏡の前で微調整をする。

「こんなもんでいいとして……この髪の毛どうしようかな？」

艶やかな黒髪が気になる。

普通にしている分には気にならないが、学校のような場所では邪魔に
なりそうだ。

「茜に相談するか」

一人で考えていても埒があかず、ダイニングに向かうことにした。

「いただきます」

これぞ和食って感じの朝食へと箸を伸ばそうとした私だったが、
茜の言葉に慌てて手を併せる。

「いただきます」

焼き鮭をほぐし、ご飯にのせて口へと放り込む。

適度な塩加減が効いて、一緒に頬張るご飯までもが美味しく感じ
る。

「どうですか？」

おずおずと訊ねる様は、小動物のようだ。

「うまい」

素直に感想に茜の顔が華やぐ。

独り暮らしと言うこともあり、普段はトーストなどの簡単なモノで済ませていた私にとって、これは一種のカルチャーショックだった。

これぞ朝飯！

日本の朝食だと断言できる。

「よく鮭とかあったな」

「それは、早朝ジョギングに出掛けた際に市場の方で仕入れたモノですよ♪」

声を弾ませて応える茜。褒められたことが相当嬉しいようだ。

「市場って魚市場？ 一番近くても二つ隣の街まで行かないと無いんじゃないか!？」

直線距離にしても数十キロは離れている。

「クスッ」

驚く私に対して、茜は楽しげに微笑んだ。

「私は忍者ですよ。忍者たる者、たかだか数十キロ走ったくらいではばてませんよ」

「忍者って凄いんだ」
感心する。

オリンピックに出れば、メダル総獲りできるんじゃないか？
微妙にドーピングとかで肉体改造していそうな気もするけど。

「しかし早朝ジョギングだなんて、茜は何時に起きたんだ？」

「確か……朝の4時ですね」

壁の時計へと目を向けて応える茜。

「4時って……あれ？」

疑問が過ぎった。

「まだセキュリティに茜の情報を登録してないはずだけど、どうやって帰ってきたんだ？」

昨夜の内にする予定が疲れて寝てしまったので、茜の登録するのを忘れていた。

「それは……そのお」

言いにくいのか横を向きながらポリポリと頬を掻き出す。

「まさか、ロックせずに出掛けたとか？」

「あっ、いえ、そうでは無く、天窓の鍵を開けておきましたので帰りはそちらから——あっ、私以外の第三者の進入は出来ないように罫は仕掛けておきましたから安心です」

「天窓に罫……か」

あまりの内容に、笑うしかなかった。

「しかし、朝飯を準備させちゃって悪かったな」

「いえいえ。住まわせて貰っているのですそれくらいは当たり前です。これから家事の方は私がしますね」

「そう言って貰えると助かるかな」

いくら身体が女になったからとは言え、それで家事がこなせるわけでもない。

これだけ美味しい料理が食えるなら、逆に有り難いくらいだ。

「ごちそうさまでした」

「おそまつさまです」

綺麗に平らげた食器を流しに持っていく。

「あっ、私が洗いますよ」

「いいよ、いいよ。コレくらいなら私にもできるし」

「でも、飛び跳ねた水で制服が汚れますよ？」

その一言で場所を譲る羽目に。

さすがにエプロン装備の茜には敵わなかった。

後で、エプロンをもう一つ探しておくかな。

洗い物をしてる茜の背中を見つめながら、そんなことを考える。

「そう言えば、なぜ味噌は二種類あるんですか？」

「お袋が愛知の方の出身だからな。あっちって赤出汁だろ？ それで、日本に帰ってくると赤味噌が飲みたくなるって買ったんだよ」

「そうなんですか。作っていて、茶色の液体が出来上がるから、驚きましたよ」

クスッと笑う茜。

そんなたわいのない会話をしている内に洗い物は全て綺麗になっていった。

手を拭き、エプロンを畳む茜。

手が空いたなら、髪の毛のことを頼んでみるか。

「茜。ちょっと髪の毛をどうにかするのを手伝ってくれないか？
こう長いと邪魔でさ」

「髪ですか。お団子を作るには長すぎて大きくなりますから……三
つ編みにでもしますか？」

「一人じゃ編めそうにないからもっと簡単な方法はないか？」

私の言葉に茜は小首を傾げた。

いつまで女でいるか解らないけど、なるべくなら独りで出来るも
のがいい。

「では、リボンでまとめてみますか」

「リボンで？」

頭に浮かんだのは女の子が着飾る蝶々結びのリボンだった。

「少女趣味は無いんだけどな……」

「あっ、いえ。そう言う風にリボンを使うんじゃないくて——」

茜がやってくれたのは、束ねた髪の毛をぐるぐるに巻くだけのも
のだった。

それは、肩胛骨の辺りから先端5センチ手前まで巻いていく。き
つちりと巻くのではなく、斜めに隙間が空くような雑な巻き方。そ
れでいて、しっかりと髪の毛を束ねていた。

「どうですか？」

「うん。まとまってる分、かなりましかな」

身体を動かしてみるが、長すぎる髪の毛が広がらない分動かしや
すかった。

ピンポーン——

チャイムが鳴ったかと思うと、どやどやと勝手に玄関を開けて奈月と美奈さんが入ってきた。

「おはよ。準備は終わってる？」

「おはよう、いずみちゃんに茜ちゃん。学校に行くわよ」

リビングに顔を出した奈月が、私の髪の毛をジロジロと見てくる。

「何だよ？」

「ふーん。面白い髪型してるわね」

「悪いか？」

値踏みするような奈月の視線に対し、何を言ってくるのかと身構える。

「んー、可愛いわよ」

返ってきた言葉はあっさりとした賛辞で、思わず拍子が抜けた。

「そうね。ラブリーよ、いずみちゃん」

美奈さんが抱きついてきた。

「ちょ、ちょっと、美奈さん!？」

「いいの、いいの」

何が良いのか解らないまま、私は美奈さんの抱擁を受け続けた。

「って、胸に頬を押し付けてくるな——」

あん♪

朝の余韻が残っていたのか、少しだけ感じてしまった。

7話

「おはようございます、美奈先生」

「はーい、おはよ」

学園に近付くにつれて生徒達が美奈さんに挨拶をしていく。その都度、隣りに控える私を見ては、怪訝な顔をしていた。

うう……恥ずかしい。

昨日は夕方の薄暗かったこともあってかそれなりに平気だったけど、白昼堂々セーラー服で出歩くのがここまできついとは……

セーラー服の襟元や裾の下から舞い込む空気が身体を擦り、歩く度に当たるスカートのヒダの角がくすぐったく、変な感じた。

何より、周りからの突き刺すような視線が異様に気になる。

「おはよ、美奈せんせー」

「はーい、おはよ」

「そちらの娘は？ 見かけないんですけど」

「この娘は私の知り合いで、転校先を探すために学園に体験入学をしてきたいずみちゃんよ」

通りすがりの生徒達からの質問に、やんわりと応えつつ私を紹介していく美奈さん。

それが返って周りの注目を私に集めることになった。

そんな生徒達の視線から逃げるように、奈月の背後に回り込む。

「ほらほら、いずみ。シャンとしなさいよ、シャンと」

「そう言われてもさ……結構恥ずかしいんだよ。どこもおかしな所はないか？」

「ちゃんとしてますよ、いずみさん」

茜に励まされるけど、どうにもこうにも自分が無事に女として世界に溶け込んでいるかどうかが気になってしかたがなかった。

「おはよ、奈月」

「おはよ」

「おはよう、確氷さん」

「あっ、おはようございます」

正門をくぐると、私達一行に声を掛けてくる人の数が増えてくる。そして、私を見つめる視線も……

「ねえ、あの娘って誰なのかな？」

「美奈先生の関係者らしいよ」

「無茶苦茶、スタイル良いな……」

「ああ、足なんてすらりと長いし、腰も高いな」

「髪の毛ながー。手入れ大変そうだね」

「でも、綺麗な髪の毛してるわね」

周りから、ヒソヒソとした囁き声が届いてくる。

本当にちゃんとしているのか？

実はバカにしか見えない服でも着て裸で歩いているのを、指さして笑っているんじゃないのか！？

って、考えていたら余計恥ずかしくなってきた。

被害妄想なんだろうけど……不安心が止まない。
本当に私——俺、やっていけるんだろうか。

「大丈夫よ、いずみ。あたし達がちゃんとフォローしてあげるから
え？」

「心を読まれた!？」

「クスッ。いずみさんは表情に出やすいですから」

あうう……

顔に出ていたのか。

「あっ、いずみちゃん」

「何？」

「今日はこっちから校舎に入ってね。奈月ちゃん、茜ちゃん、ばい
ばい」

生徒用の玄関に向かう二人から離れ、私は奈々さんに引きつられ
来賓用の玄関から校舎へと向かった。

「ええっと、彼女が2—Cの八坂出雲君の——」

「はい、『従妹』にあたる八坂いずみさんです」

学園長室で学園長に私を会わせる美奈さん。

「しかし見事なまでの変わり様ですな」

まるで値踏みするような視線は、酷く心にざらついた。

そんな私を守るように美奈さんが一歩前に出た。

「学園長。この娘に手を出したらどうなるかは分かっていますね？」
不遜な笑みで静かに囁く美奈さん。

「わ、わ、わ、解っているとも、姫川先生。他の先生方にも決して手出しはさせないから、あのことは内密に頼みますぞ！！ 電話でも言っているが八坂いずみ君のことは君に一任している。好きにやってくれたまえ」

慌てる学園長。ガクガクと震えだした。

もしかして、弱みでも握られているのかな？

「では、失礼します」

学園長の狼狽ぶりに訳も解らずいる私の背を押して、部屋を後にする美奈さん。

「それじゃあ、教室に行きますか」

「え？」

美奈さんの言葉に戸惑う。

普通、こう言う場合は担任にも話をしないとならないはずだから、直接教室に行かれても困る。

「職員室じゃないのか？」

「うっふっふ。2-Cの担任の能見先生と副担の井沢先生なら今日から風邪でお休みよ。結構酷そうだから終業式までは出て来られないんじゃないかしら」

クスッと含みを込めた笑みに、何故か私は薄ら寒さを感じ取った。

今、確かに今日『から』って言ったよな？

それに、学園に来てから一度も職員室に顔を出していないのに、どうして美奈さんにはそれが解ったんだ！？

ま、まさか……

わざと風邪でもひかせたと言うんじゃないだろうな……

「そう言うことだから、一学期中は私が2－Cを担当するようになってるの――あつ、外で待っていてね」

教室の前まで来ると、私を残して美奈さんは部屋へと消えていった。

予鈴で集まっていた生徒達のざわめきが一瞬消え、入ってきた先生の顔を見ては、至る所からの囁き声が廊下まで響き渡る。

ガラッ――

「え？ 美奈先生？」

「今日ってHRだよな？ 能見はどうしたんだ？」
美奈の登場に、教室中がどよめいた。

「はい、はい。皆さん、席に着いてね。着かないと、先生泣いちゃうんだから」

泣き真似する美奈に、慌てて生徒達が席に着く。

「先生、能見先生はどうしたんです？」

「んー、そのことも含めて、皆さんにお知らせが3つあります」
教壇に立つと、生徒達を見渡す。

「2－Cの担任だった能見先生と副担任の井沢先生が揃って風邪で休まりましたので、私が今日のHRを受け持つことになりました。それがまず第一のお知らせです。続いて第二のお知らせですが――」
チラリと窓際の一番後ろの空いている一つの席を見た。そこは出雲の席であり隣には茜が座っている。

「八坂出雲君が家庭の事情で急遽外国のご両親の元へ行くこととなり、これからお休みとなります」

「外国って転校ですか？」

「いえ。本当は夏休みになってから向かう予定だったのですが、急遽家庭の事情で早まったとのことで、転校すると言った類の連絡は受けていません」

あらかじめ決めておいた設定を口にする。

「そして最後のお知らせですが――八坂さん、入ってきてください」
教室から廊下へ、私を呼ぶ声が届いてきた。

ガラッ――

ドアを開け一歩足を踏み入れた瞬間、どよめきが起こる。

クラスメートの注目を一身に浴び、身を縮め、俯き加減に私は美奈さんの元へと歩み寄った。

「ちゃんと顔上げてね」

私の丸まり掛けた背中を軽く叩き伸ばされた。

うっ。

興味津々とした目の輝きを目の当たりにして、思わず身が退ける。

「彼女の名前は八坂いずみ。八坂出雲君の従妹に当たり、幼い頃から海外を点在していたんですがこの度日本の学園に通うことになり、今現在八坂家にご厄介になりながら転校先を探してるそうです」

俯いたまま黙って紹介が終わるのを待つ。
正直、顔を上げるのが怖い。

「事情を知った学園長の特別な配慮により、八坂君の代わりに授業を受ける許可を得たので、夏休みまでの三日と言う残り短い日数ですが体験入学として通うことになりました」

「すごい美人ね。スタイルも良いわね」

「従妹だけあって八坂に似てるな」

「八坂君も女装したらああなるのかしら？」

「どうだろうな。さすがに男と女じゃ身体付きが違うからな。足なんて全然違うぞ」

「でも、顔は似てるから、少し化粧を施せばあなったりしてね」

いずみと出雲を比較にされた会話に、内心焦る。

努めて冷静を装ってみるが、ばれたら——と言う恐怖で背中が汗ばんできていた。

「あれだけの娘なら二学期の文化祭でウチのクラスの目玉に出来るのに……体験入学だなんて惜しいわね」

「そうね——あっ、先生」

「何ですか？」

「体験入学ってコトは、もしかしたらここに本格的に通う可能性もあるんですか？」

「ええ。二学期からの受け入れ先を探しているのよね？」

「あっ、はい」

促されては頷くしかなかった。

八坂いずみとして通う気なんて毛頭無いし、あってはならないつもりだ。

「なお、八坂さんは海外生活が長いので、言葉遣いから日本文化に至るまでおかしいかも知れませんが、皆さんで正しいことを教えて上げてね」

「「はい」」

「あつ、でも、変なことを教えたりしたら世界史の内申点が下がると思っただけ。出雲君の方からいずみさんのお世話を姫川家が頼まれているの」

2-Cの世界史担当教諭の冗談とも本気とも取れる付け足しに、教室中から失笑が漏れた。

「では、いずみさん。自己紹介を」

「ええっと、八坂いずみです。世界各国を巡っていたんだけど、この度日本に来ることになりました。短い間ですけどよろしく」

「はい、はい、八坂さん」

生徒の一人が勢いよく手を上げてきた。

簡単に挨拶を済ませて終えようと思っただけ、そうはいかないようだ。

「世界各国って何処ですか？」

「アメリカやイギリス、フランスといった欧米各地に、アフリカや南米、中近東に東南アジアの方にも行ってるかな」

それらは、かつて両親の元へと遊びに行った国々だ。

遊びにとは言え、長いところで二週間は滞在していたので、誤魔化しには使える。

「色んな所へ行ってますね」

「親父――父が冒険写真家としてその撮影の旅に同行していたんです。日本には受験のために帰ってきました」

居るはずもない架空の父親像を説明し、日本に來た理由を話す。

「家族で回っていたんですか？」

「家族は家族ですが、母親は幼い頃に他界しました」

伏し目がちに翳りを落とせば、それ以上の突っ込んだ質問は無かった。

ここら辺は、昨夜八坂いずみの設定を考える際に奈月に教えられていた、誤魔化しの手口だ。

『いいこと、いずみ。周りには踏み込んではない部分を感じさせるのよ』

『踏み込んではない？』

『身内の死などといった不幸ネタは、安易に他人が踏み込める領域じゃないからね。仕草なんかで、それをアピールするの』

『仕草って言われても……』

『難しく考えることは無いわ。伏し目がちにするなり言葉を尻すばみにするなりすれば、後は相手が勝手に想像してくれるわ』

「では、八坂さんには八坂君の席を使って貰いますね。窓際が一番奥の席に」

指示されるままに生徒達の間を進む。その一挙一動を見つめられては、みんなの視線に映る自分が女装してるだけじゃないのかと思えてくる。

私は女だ、私は女だ、私は女だ、私は女だ、私は女だ、私は女だ、

私は女だ……

心の中で強く言い聞かせつつも冷静な立ち振る舞いで席に着いた。

「いずみさん、大丈夫ですか？」

「何とかね」

心配げな茜に対し口数少な目に応えた。周りが聞き耳を立てているのを気配で察し、必要以上の会話は危険と感じたのだ。

「では、このまま授業を始めますね。教科書を出して――」

私が席に着くのを待って、自分の受け持ちの授業を始める美奈さんだった。

キーン、コーン、カーン、コーン――

終わりのチャイムで一時間目の授業が終わった。

「さてと」

少しでも戻る方法を調べようと、僅か10分の休み時間に図書室へと向かおうかと考えていたんだけど、そこへ大量の女子が集まってきた。

何だ、何だ？

「八坂さん！」

「はい！？」

勢いよく声を掛けられ、思わず身構える。

「海外から帰ってきたって言ってたけど、海外生活が長いの？」

「あっ、うん。人生の大半は日本以外かな。日本には帰ってきたって言うよりも訪れたってイメージが強いな」

「海外生活が長いんだ……外国の流行とかって詳しいの？」

「そっちはダメ。私の行っていた国は大都市じゃない方が多いからな。ジャングルとか砂漠の荒野とかじゃ流行も何も無いだろ」

「じゃあ、じゃあ、外国語はペラペラなの？」

「んー、英語なら。日常会話レベルならもう少し喋れるけどー行っていた国の現地語になるから、日本では知られていない外国語ばかりになるーん？」

女子達の自分を見つめる視線の変化に気付き、言葉を止め首を傾げる。

「どうかしたのか？」

「八坂さんの言葉遣いが随分男っぽくなって思ってた」

「ああ、これか」

想定内の質問に、内心ホッと一息つく。

「身近な日本人は親父一人だったからな。親父の言葉遣いをそのまま日本語として覚えたんだ。挨拶の時みたいに意識すれば多少は丁寧にするコトもできるが、同年代のお前らにはこれで構わないだろ？」

「ええっとー良いと思います」

応えながら何故か目を反らす少女。頬がぼわんっと赤らんでるのが気になった。

「悪いな、汚い言葉遣いで。直そうとは思っているんだが、しばらくは我慢してくれ」

「い、いえ！ 問題ないです」
ぶんぶんと力強く首を振る。

「そ、そうか」

「それより、恋人とかはいるんですか？」

「それだけ美しければ、恋人の一人や二人いるわね」

「いや、もしかして世界中に恋人がいるとかじゃないの？」

「きゃっ♪」

勝手に自己完結しては黄色い声を上げる少女達。

恋人の話題が上った場合は、アレだったな。

「いや、恋人と呼べる異性はいないよ」

「おお……」

遠くから聞こえる男共の歓声に冷や汗を流しながら、昨夜決めた設定の一つを口にする。

「ただ、フィアンセはいるって親父から聞いているな」

「フィアンセ!？」

「許嫁がいるの？」

どよめきと共に伝わってくる男達からの落胆の気配を無視しながら、話を続けた。

あいつら、俺に何を期待していたんだ？

疑問を浮かべながら、言葉を続ける。

「らしいな。私も良くは知らないけど、親父の知り合いの子供らしい」

「そんな会ったことのない人との結婚なんて抵抗無いの？」

「無いと言えば嘘にはなるが、こんな生活じゃロマンスの一つも無くてさ。こう言う関係も有りとは思ってる。もっとも、あまりに変

なヤツなら叩きつぶすだけさ」

クスツとほくそ笑んでみせれば、何故か周りにいる女子達の顔が一斉に赤くなった。

「あ、あのお……お姉さまって呼んでいいですか？」

「い、いや、いずみでいいよ」

あまりのお願いに、頬を引きつらせながら慌てて断る。助けを求めるように隣の茜の方を見れば、がち合った視線を彼女はすぐにずらした。そっぽを向くその横顔は何故か唇が尖り気味なのが気になる。

そんな孤立無援の質問責めは二時限目が始まるまで続いていた。

二時限目、三時限目ともなれば、生徒達の興味も薄れたのか、いつもの学校風景が展開されていく。

午前中の授業が終わり昼休みとなった教室。その場で弁当を食べる者もいれば、弁当箱を持って教室を出ていく者。そして、学食へと向かう者もいた。

「茜。悪いんだけど、図書室に案内してくれない？」

「ええ、いいですよ」

弁当の入った巾着をカバンから出し、私を先導して教室を出ていく茜。

表向きは道を訪ねた転校生とそれを案内する在校生の姿だが、実際は学校に来る前に決めていた決まり事の一つだ。

「遅い！」

出迎えたのは司書室で弁当を広げていた奈月だった。

「仕方ないだろ、奈月」

誰の聞き耳もないことを確かめながら応える。

「教室ではみんなが私の行動を見張ってるんだからさ。下手なそぶりが出来ないんだよ」

「そうですね、奈月先輩。いずみさん、女の子達に熱い眼差しを向けられていたんですから」

どこか拗ねた含みが感じられたのは気のせいだろうか？

「転校生ってああも興味を持たれるもんかな？ 茜が転校してきた時はHRでの質問だけで休み時間にまで大挙してくることなんて無かったのにさ」

隣の席だからよく覚えているが、茜が転校してきた日は、休み時間毎に幾つかの女子のグループが入れ替わりで訪れただけで、今日みたいにクラス全員が大挙してくるようなことはなかった。

「私の時は、忍術で皆さんの関心をずらしていましたので」

「ふーん。そんなことも出来るのね。忍術も結構便利なのね」

たわいない会話を続けながら弁当を平らげていく。

昼休みを30分近く残した時点で私達は全てを胃に収めた。

「さてと。食後の運動に調べモノを始めますか」

んーっと伸びをしながら立ち上がる奈月。習って私と茜も立つ。

「調べるってどこを調べるんです？」

「一応目星は付けてあるわ」

司書室から隣の図書室へと向かう。そこには、昼休みを利用して訪れた生徒達もいた。

私の存在に気付き見つめる視線を感じるが、敢えて気にしないよ

うに立ち振る舞う。

「ええっと、こっちよ」

書棚の間をどんと進んでいく奈月。やってきたのは、最深部にあるコーナーだった。

窓からの斜光も届きにくいのかそこは薄暗く、何故か生徒達の気配が無い。

「ここは？」

「洋の東西問わず存在する魔法や仙道などの摩訶不思議な事象を記した本達よ」

「ここって、埃とインクの匂いが強いのか、いつ来ても空気が悪いな」

「匂いよりも本達から出る雰囲気、用のない人を寄せ付けないだけよ。本当の『智』を求める人ならさほど抵抗はないはずだわ」

「『智』ね……全く読めないんだけど」

開いてみた重厚そうな本には、アルファベットっぽい文字が連なっていた。

ヨーロッパの言語なら多少は読めるので微妙に読めそうな気がするが……いまいち意味が解らない。

「それは古典ラテン語だから、いくらいずみでも解読は簡単にはいかないわ」

「じゃあ、どうしろってんだよ」

魔導書を漁りに来た意味がない。

「期待してるのはいずみじゃないわ」

奈月の細めた眼差しが本を見つめている茜に向いた。

「私ですか？」

視線に気付いたのか、顔を上げる茜。

「忍者だって言うなら、古文書ぐらいは解析出るんでしょ？」

「一応、暗号でもなければ大抵の古文書は読めますが……」

「じゃあ、茜はそっちの棚の本から探してみて」

指さした棚には、和紙を紐で綴じた古い本が連なっていた。

「西洋の奇書は私と姉さん達で読むから、いずみはその他の地区の書籍解読ね」

「私が？」

ラテン語も古書も解読できない私が、それ以上に難解そうな文字を読めるはずもなかった。

「八坂家なら世界中の古代文字を解読する資料ぐらいいあるでしょ？」

「そりゃま、有るとは思うけど……これ全部解読するのか？」

「あつたりまえじゃない。あんたの戻れる方法を探すんだから、いずみが一番苦労しないとね」

「げっ」

担当を命じられた棚は一番少ないが、その変わり全ての本が異なる言語で記されており、一冊一冊解読していったら、かなりの年月が必要とされるのは明白だった。

見上げた本棚は高くそびえ立ち自分を圧迫してくる。

「大丈夫ですよ、いずみさん。堇がちゃんと調べてきてくれますから」

「堇ね……ほんとに頼むよ、堇」

この場にはいなくノ一の少女に願いを託す。

結局昼休み中には満足に調べることも出来ず、午後の授業へと戻っていった。

8話

5時間目が終わるとクラスメイト達がまばらに教室を出ていく。そんなクラスメイト達に倣うように私と茜も廊下へと向かった。

「今日の美術って何だったっけ？」

「今日は確か、デッサンだって言っていましたよ」

デッサンか。

息抜きするには丁度いいか。

「しかし、肩が凝るな……」

廊下を歩きながら、コキコキと首を曲げては肩をほぐす。

巨乳と言うほどでかくない胸だけど、男の身体ではあり得ない部分にぶら下がる確かな重量は、首にきていた。

それに、ブラジャーの肩ひもは擦れるし、そのブラジャー自体の圧迫感も結構気になる。

女ってよくもまあ、こんなの身に着けて普通でいられるよな。

「——みさん」

スカートはスカートで足がぬっと出ていて気になるし、セーラー服の裾も腰を曲げれば肌が見えそうだし、鎖骨までもが顕わになっている襟元も心許ない。

胸当ての無いタイプのセーラー服があるけど、気にならないのかな……

「――すみさん」

何て言うか、この格好って所々で無防備で不安感が増すよな。

「いずみさん！」

「！？　な、なに？」

「美術室、上ですよ」

真っ直ぐ行こうとしていた私を、茜は隣の階段を指さして呼び止めた。

「あつと、悪い。考え事していた」

慌てて階段を上る。

上の階に移るとそのまま校舎の奥にある美術室へと足を踏み入れた。

「モデルをやりたい生徒はいる？」

小柄で童顔の美術教諭である酒見美樹先生の言葉に、誰も手を上げようとはしない。

授業時間中ずっと同じポーズをしているのも結構辛いんだよな。

「誰もいないの？」

「はい、はい、美樹ちゃんがセクシーポーズとって下さい」

誰かの一言に、失笑が上がる。

下手すれば中学生に見えそうな、童顔を気にしている大学出たば

かりの美樹先生にはそれは禁句だった。

あれで美奈さんと同期なんだよな……

美奈&美樹とコンビを組めそうなら二人は仲が良いけど、二人が並んでいる姿は先生と教え子にしか見えないのは秘密だ。

「私がやったら誰があなた達を監督するの。そんなことを言うなら、徳田君。あなたがやってみる？　今なら特別にすごいポーズにしてあげるわよ？　天上から逆さ釣りなんて前衛芸術よね。先生、張り切っちゃうわ」

荒縄片手に浮かべる美樹先生の健やかな邪笑に、徳田の顔色がみるみる青くなっていく。

美樹先生はやると言ったら、やる人だから……
前にも同じネタでからかった別のクラスのヤツが、ボディペイントのキャンバスにされたって言うし。

「す、す、すいませんでした！」
今にも敬礼しそうな直立姿勢で謝る徳田。

「フン。次は無いと思いなさい」
興味は失せたばかりに徳田からクラス全員へと視線を移す美樹先生。

「それで、誰かやりたい人はいないの？　今なら普通の座ってるだけで許すわよ」

今ならって、誰も上げないとポーズが酷くなるのか？

「おい、お前やれよ」

「やだよ。クラス全員に見られているなんて恥ずかしすぎるぞ」
「もう、誰でも良いからやってよ」

「言い出しっぺがやれば？」

「徳田。やっぱりお前がやれって」

「無茶言うなよ。俺がやったら、絶対に逆さ釣りする気だぞ」

美樹先生の恐怖に飲まれたクラスメイト達が一斉にざわめく。

「いずみさん、どうします？」

「どうしますって言われてもな……」

誰もやりたがらないのか、擦り付け合いをしていく。

「立候補が無いなら、推薦で良いわよ。誰か描いてみたい人はいるの？」

バツ――

「え!？」

一斉にクラス中の視線が私に集まった。

「もしかして……私？」

自分を指させば、全員同時にコクリと頷いた。

「ええっと、見かけない顔だけど……美奈先生の言っていた娘ね」
クラス名簿と私の顔を見比べる美樹先生。

「確か……八坂君の従妹だっけ？」

「あつ、はい。八坂いずみです」

「ふーん。いずみさんね。いいわ。モデルとしては申し分ないわね」
「ちょ、ちょっと、私はやるとは――」

ギンツ――

美樹先生のひと睨みに言葉を飲み込む。

「今なら椅子に座ってるだけで済みますけど、ごねるなら、ヌードデッサンだっていいのよ」

ゴクツ。

周りの男共の唾を飲み込む音が聞こえた。

「解ったよ。やればいいんだろ、やれば！」

渋々ながら教室の中央に置かれた椅子に腰を下ろす。

膝を揃え真っ直ぐに、対面にいる茜の顔を見つめる。

男子の方を見るのは嫌だし、他の女子を見るよりは茜を見ている方が落ち着く。

そんな私の視線を受けて、茜が頬を赤らめているのが少しだけ気になるけど……

「これでいいのか、先生」

無然と訊ねる。

何で私が……

ブツブツと心の中で愚痴る。

「表情が固いけど、まあいいわ。ポーズもそのまま、準備はいいわね？」

「ああ」

膝の上の拳をギュッと握りしめる。

「じゃあ、みんな。デッサンを開始して」

美樹先生の号令を合図に、カリカリカリと鉛筆を走らせる音が美術室に響き始めた。

トクン――

鉛筆の音に混じり、自分の心音が聞こえてくる。

見られている。

ぐらりと取り囲むクラスメイト達の視線を感じる。

尖った顎のラインを撫でるように。

襟元から覗く鎖骨をくすぐり、服の布越しに視線が身体のラインをなぞっていく。

トクン、トクン――

身体の芯からの心音が鳴り止まない。

本来感じるはずの無い服にまで、神経が通ってるかのように周りの視線の動きが感じられた。

見ている。

私の着ている女子の制服を。

トクン、トクン、トクン――

クラスメイト達の視線はセーラー服の襟の形を捉え、その下から見えるスカートの先まで追い、下腹部と太股を覆うスカートのヒダの一本一本に走る。

そんな視線達は、縫製のラインまで感じさせてくれた。

違う。

男子の制服とは明らかに違う形。

何故？

何故、俺はこんな服を着ているんだ？

俺は男なのに。

何故、女子の制服を着ているんだ？

大きな襟をしたセーラー服を。

幾つもの折り目のあるスカートを。

ゾクツ――

視線の片隅に見えるガラスに映り込む私の姿に、俺の背筋に痺れが走った。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

いつしか鼻息は荒くなり、肩と胸の動きが大きくなる。

身体は火照り、頬が紅潮していくのがわかる。
ぎゅっと握りしめた拳の中が汗ばんでいく。

視姦。

まさに視姦だ。

視線が私を犯していく。

「八坂さんって、本当に足が長いわね。細いし……足首なんて簡単に折れそうよ」

「そうね。全体的にスレンダーなのに出る所はちゃんと出てるし」

「それも嫌味のない程度の大きさだなんて、羨ましいわ」

「小顔で顎のラインもシャープだし、目も大きいし、美人ね」

「そうそう。それに、髪もストレートで綺麗ね」

「八坂さんの髪の毛って、枝毛が無かったわよ」

「ホント？ あそこまで伸ばしていたら手入れも大変なのに、凄いわ」

女子達のヒソヒソ声と感嘆の溜息が聞こえる。

「あんな恋人欲しいな」

「止めとけ、止めとけ。お前じゃ彼女は似合わないぞ」

「やっぱ、そうだよな。でも、一回で良いから抱いてみたいな」

「ああ言う澄ましたヤツほど、ベットじゃ乱れるって言うな」

「どこの知識だよ、それ」

「でも、乱してみたいよな。あの胸なんて吸い付きてー」

「綺麗な脚だよな。あの太股を触ってみたいな」

ゾクッ。

男子達の欲に満ちた言葉に、身体震える。

見て感じている。

私の身体を見て、ヤツらは感じている。

オカズ——にされるのかな？

私の身体をオカズにして、ヤツらは自分のを慰めるのかな？

ヤツらの頭の中では、私の着ている制服からスカーフが解かれ、横のファスナーが上げられる。

キュン。

胸の奥が痺れる。

捲られる裾。顕わになる腹。男子達の指先が肌を撫でる。襟元から突っ込まれた手はブラジャーに包まれた私の胸を揉み始める。

嫌だ、嫌だと叫んで懇願してもあいつらの手は止まらず、私の体中を蹂躪していくんだ。

暴走していく妄想が止められない。

「いずみさん」

はっ!？

美樹先生に肩を叩かれ、私は正気に戻ってきた。
ピンク色の悪夢を振り払うように頭を振る。

「ご苦労様。授業は終わりよ」

周りでは後片付けを始めているクラスメイト達がいた。

私は一体何を……

制服の下では全身が汗ばんでいた。
火照り、芯から熱かったのだ。

「いずみさん？」

「あっ、いや。ずっと同じ格好をしていたから身体が痛いだけだ」

心配げに声を掛けてきた茜に軽く応える。

「戻ろうか？」

「はい」

茜と一緒に他のクラスメイトに混じって教室へと向かう。

「あっ、スケッチブック見て良いかな？」

「いいですよ」

廊下を歩く中、茜のスケッチブックを借り受ける。

「どれど——!？」

手渡されたスケッチブックを開いては、目が点になった。

「ええっと、茜」

「なんです？ 上手に描けたと思うんですけど、どうです？」

どうですって……

あのお、茜さん。ここに描かれている絵は私の目には、チュパカブラに見えるんですけど。

チュパカブラ。

山羊の血を吸うものと言う意味の言葉で、メキシコで目撃されるUMA。一説には宇宙人とも、軍の実験による遺伝子改造生物とも言われる。

「ええっと……忍者って絵とか描いたりするの？」

「はい。修業の中に見たものを正確に捉える訓練とかもあります」

正確につて……私Ⅱチュパカブラ!?

茜の目には、私は謎の吸血動物として映っているのか？

「先ほどから何を驚いているんで——あら？」

私が見ていたスケッチブックに茜が横から覗き込んできた。

「あっ、それは違いますよ。私達の隠れ里にいる妖怪をスケッチしたものです。いずみさんはこっちですよ」

パラパラパラとページを捲ると、そこには見事なまでに忠実に再現された『八坂いずみ』の座った姿が描かれていた——んだけど、今さっき、茜のヤツが何か不穏な言葉を口走ったような……

「どうです？」

「あっ、上手いよ——って言うか、凄い描写だな。服の皺の一つ一つまで——」

ゾクッ——

絵に描かれた服の形を意識した途端、さっきの妄想からの煙りが身体の中で甦り始めた。

「ごめん、茜。トイレ行ってくるから、先に戻ってくれるか？」

「はい。あつ、ちゃんと女子トイレに入ってくださいよ」

あつ。

危うく男子トイレに入るところだった。

「了解」

茜から離れ、その足でトイレに向かった。

うゝん。

いざ入り口にまで来てみたんだけど……女子トイレに入ることになんて少しだけ抵抗を感じるな。

つと、入るか。

周りの奇異なる視線を感じ、慌てて中へと入る。

そのまま個室に向かうでもなく、入ってすぐの手洗い場で鏡を覗き込んだ。

うわあ……

鏡に映り込む顔は、どこか艶っぱさを感じる。

フェロモン出しまくりの一歩手前って感じだ。

パシヤパシヤと水で顔を洗えば、身体の中で燻っていたものが霧散していく。

「ふう……やばかったな」

ハンカチで濡れた顔を拭えば、元のシャンとした顔に戻っている。

あのままあんな顔で校舎を歩いていたら、男を誘っていると思われかねない。

心が完全に落ち着くのを待って、教室へと戻っていった。

今日最後の授業が終わり、クラスメイト達が去っていく。

美術モデルで感じたことと休み時間に時折会話に来る娘を除けば、『八坂いずみ』の女子校生の初日は概ね平穏な風景に溶け込んでいたとも言える。

もつとも、モデルで感じすぎたのが問題なんだけど……なるべく注目を集めないようにした方が良いな。

「さてと、図書室に行くかな」

「あっ、先生に呼ばれているので私は後で行きますわ」茜と別れて独りで図書室を目指す。

ん？

後をついてくるように聞こえる足音が一つ。

誰だ？

首を傾げるように振り返れば、見覚えのある男子生徒がいた。八坂出雲よりも少しだけ高い身長をした筋肉質の細身の男。

「八坂さんか。キミも別練に行くのかい？」

そいつは、クラスメートの鈴瀬隼人だ。

小学時代からの付き合いで、一応、『俺』の親友とも呼べるカテゴリーに属するヤツになる。

「図書室に用があつて——ええっと？」

「僕は鈴瀬隼人。クラスメートだよ」

「隼人ね。覚えた」

初顔合わせの様に、わざと振る舞う。

知り合い——特に男の知人には今の状態を知られたくはない。

チカンもレイプも嫌だからな。

せめて男に戻れるのが確実なら、一夜の世迷い言として誰かと寝るのもありかも知れないけど……戻れるかどうか解らない状況じゃ、興味本位で処女を失う気はない。

「図書室？ 昼休みにも向かっていたみたいだけど、何か調べモノでもあるのかい？」

「そんなトコ」

曖昧に応える。

下手なことを言つてボロを出すより、この方がいいと奈月から教えられていた。

口数は少なく。それでいて曖昧に——ってな。

「そう言えば、八坂——出雲のヤツはいつ頃日本に戻ってくるか解るかな？」

「出雲の帰国か……ちよつと解らない」

八坂出雲の現在の情報は極力知らない設定にしてある。

「泊まる場所も未定だからな。あっちから連絡がない限り、こっちからは取りようがないし——あつ、私は上だから。チャオ、隼人」
渡り廊下を渡って別棟に入ると、逃げるように階段を指す。
長時間話していて、気付かれたらまずいからな。

「あ、そうそう、八坂。昨日は掃除当番をさぼってしまって悪かった。恩に着るよ」

「いいさ。文化祭の運営委員の仕事が忙しかったんだろ？　しかたない——」

！？

言ってから自分の受け応えた内容に気付く。

恐る恐る振り返れば、したり顔の隼人がいた。

ばれたか！

隼人の手を取ると、スカートの裾が捲れ上がることに構いなく、ヤツを連れて屋上へと続く階段を駆け上った。

誰も居ない屋上に出ると、隼人相手に少し距離を取る。抜ける風に靡くスカートを押さえながらヤツの目を睨み付けた。

「やっぱり、八坂だったんだ」

「な、なぜ……気付いたんだ？」

見据えてくる隼人の視線に対し、睨み返す。

「『気』だよ」

「気……？」

「僕が古武術を嗜んでるのは知ってるだろ？」

「ああ」

ばれた以上、八坂出雲の知識を隠す必要はなく、素直に頷いた。

鈴瀬隼人。それなりに卓越した頭脳に何でも器用にこなす運動能力。実直な物腰に女子の人気を集めファンクラブまで作られている男子生徒。そして、優しい顔つきとは裏腹に、実家の神社に伝わる怪しげな古武術を継承する猛者でもあった。

「それでさ、『八坂出雲』と全く同じ気をキミから感じたんだ。始めは血縁故の似た気かと思っていたけど、あまりにも似すぎだったんで、少しカマを掛けさせて貰ったよ」

気が同じだって!？

さすがにそんな確認方法は想定外だ。

「しかし、いくら気が同じだからって、身長から体つきまで違う相手を見て、よく同一人物と考えられたな？」

「僕のようなタイプの人間は見た目よりも、相手の内から感じるモノで人柄を判断するからさ。外見は幾らでも誤魔化しが効いても、内面は誤魔化しようがないからね」

クッ……

「でも、なんで女の子になってるんだ？」

「誰にも言うなよ」

そう口止めをしておいてから、昨日の出来事を語る。

「ふーん。碓氷さんは忍者の末裔だったんだ。息づかいや足運びが達人のソレとは思っていたけど……一度手合わせ願いたいね」

「そう言うことで、今茜の双子の妹が里で文献を漁り、私達は奈月

の指示で図書室の資料を調べることになってるんだ」

「ふむ、姫川先輩が中心になって探しているなら、僕が出しゃばる必要はないかな。あつ、でも、何かあったらうちの神社に来るといい。ウチの姉さんなら少しくらいの神通力は使えるから」

「考えておくよ」

話半分に聞き流す。

「もっとも、先輩は不可能を口にはしない人だからな。あの人が戻す方法を探すと言うのなら、見つけたすだろうけど——それより」

爪先から頭の天辺まで縦に動かす隼人の視線に身構える。

友人に見つめられ、今までとは違う気恥ずかしさが全身を駆け巡っていた。

「……ジロジロ見るなよ」

「いや、よく平然としていられると思ってさ。言葉遣いのぞんざいさを改めれば、他の女子達にひっけを取らない今時の女子校生に見えるけど……セーラー服姿とかに恥ずかしいって思わないのかい？」

「思うに決まってるだろ！」

今だって、恥ずかしさで火が出そうだ。

「でも、女の身体である以上こう言う姿におどおどしていたら、隼人みたいに見破るヤツがでてき兼ねないからな。女であることに堂々としてろって言われてる。もっとも、周りの視線を集めるのは勘弁してもらいたいけどな」

肩を竦めて苦笑した。

「それで、このことは秘密にしておいてくれよ」

「ああ、それはいいんだけど……一つ頼みがあるんだけど聞いてく

れるかな？」

その一言に、私の背中には冷たいモノが走った。

「ま、まさか、抱かせるとかそう言うんじゃないだろうな？」

それは最も危惧している事態だ。非力な自分が武術の達人相手に襲われたら、自分の『女』を守りきれ自信は微塵も無かった。

だからと言って、男に抱かれるつもりはない。

「女の身体に興味が無いとはいいきれないけど、親友を襲ってまで己の欲を満たそうとは考えてない」

「簡単に信じられるか。少なくとも逆の立場なら、『俺』は悪戯半分に『女のお前』の胸を触ろうとするぞ」

その言い分をキツパリ切り捨てる。

生来の女相手なら犯罪行為でも、元男相手なら犯罪意識も薄くなる。そんな不思議な状況下にもし『俺』が置かれたとしたら、自分を保てる自信はなかった。

「はあ……」

力無く溜息を吐く隼人。

「僕はそこまで女に飢えてないから安心して良いよ」

「飢えてないのか？」

「『八坂出雲』と違ってちゃんとした恋人がいるからね」

「恋人って……春休みに紹介された緑山さんのコトか」

以前紹介して貰った、隼人の実家の神社の分社に当たる神社の娘で、許嫁兼恋人である緑山瑠璃の姿が浮かんた。

長期休みぐらいにしかまともに会うことがないと言う程の遠距離

恋愛を実行しており、紹介して貰った時の熱々なバカップルぶりに辟易したっけ。

「まだ関係は続いてるんだ」

「一族総意の許嫁だから簡単には終わらないし、卒業したら結婚が決められているよ。それに、浮気なんてしたら後が怖い」

何かを思いだしたのか身震いする隼人。そんなヤツの姿に少しだけ警戒を解いた。

「頼みは何なんだ？」

「ああ、頼みって言うのはその瑠璃のこと。休みになったらあいつが来ることになっていて、プレゼントでも贈ろうと考えてるんだけど、その買い物に付き合っただけだよ」

「それくらいなら構わないけど、いつ行くんだ？」

「夏休みになればすぐ来ると思うから、終業式の日午後からでいいかな？」

「おっけい。予定を空けておく。それで今話したことは秘密な」

「解ってるよ」

話し合いは終わったとばかりに校舎内へと戻ろうと扉の方に向かう。

「――でも」

ん？

隼人の呟きが聞こえ振り返った瞬間――

「僕の胸を触ろうとするなら、一度くらいは触っても良いだろう――」いきなり背後から伸びてきた手が私の両胸を鷲掴みに揉んできた。

その手が隼人の手と気付くまでに掛かるしばしの時間。
その一瞬の内に数度揉まれていた。

「♂☆◇¢#@×∞♀!？」

私は言葉にならない悲鳴を上げては、隼人の拘束から逃げるようにしゃがみ込み、胸を押さえる。

「じゃあ買い物件頼んだよ、『八坂さん』」
屋上から楽しげに去っていく隼人。

「ば、ばかやろ！」

後に残るは、虚しく響く俺の怒声だけだった。

今度瑠璃にあったら、ちくってやる。
胸に残った余韻に耐えながら、ふつつつと復讐心を燃やしていた。

9話

ガラッ――

思いつ切り扉を開けると、肩をいからせながら図書室を進む。

「いずみさん、何処かに行っていたんですか？」

図書室には既に、遅れてくるはずだった茜が来ていた。彼女の隣の椅子を引くと、のしつと座る。

「何かあったんです？」

私の雰囲気には圧倒されてか、おずおずと訊ねてくる茜。

「バカに襲われかけていただけだ」

「バカ……ですか？ 誰ですか？」

「鈴瀬隼人だ。あのバカ、私の胸を揉んできたんだ」

今も胸にはワキワキとしたヤツの手の感触が残っている。

「鈴瀬君が？」

私の言葉に驚く茜。無理もない。

どちらかと言うと優等生タイプの隼人だ。まさか痴漢行為を行うなんて誰も思わないだろう。

「あいつにばれたんだよ」

「え？ ばれたって――まさか!？」

私の言葉に、茜はハッとして息を飲む。

「鈴瀬――隼人のヤツは古武術の達人なんだ」

「古武術の？　言われてみれば、時折見せる体捌きは見事ですし、動きに隙がありませんね」

「実家の鈴生り神社に伝わっている武術の免許皆伝だ」
「凄いんですね」

「茜ともいずれ手合わせしてみたいって言っていたぞ」
「手合わせですか。良いですね。私も里の者とばかりとの訓練ばかりでしたから、自分がどれくらいの強さか知りたかったんですよ」

拳を握っては閉じてと、闘うことを考え始める茜。
決闘するなら、こてんぱんにやっつけて貰いたいけど……

「つと、それでさ、あいつは気で人の識別が出来るらしいんだ」
脱線しかけた会話を直す。

「気ですか」
「解るか？」

「忍術の幾つかにも気を用いる術はありますからね。それに、私もある程度は気で人を判断することができますよ」

「ふーん。使えない私には解らない世界だけど……それで、あいつは私と出雲の気が同一なことに気付いてさ、カマを掛けられたんだ」
引っ掛かった自分も悪いけど、昨日の今日でそれを求めるのは無理があると思う。

「それで、仕方なく話したんだ。悪いけど、茜達のこと話させて貰った」

「それは構いませんけど……大丈夫なんですか？」

「あいつは口は堅いからその点は大丈夫だ」
まあ、気で私と俺の違いに気付くようなヤツでもない限り、話したところで信じてはくれないだろうけどさ。

「それがどうして、胸を揉むことに繋がるんですか？」

「あいつも男だったってことだ」

それ以上のことをしてこなかっただけマシだけど……

やっぱり、このままじゃ許せないな。

絶対に仕返ししてやる。

「関心、関心」

「ん？」

いつの間にか、奈月が図書室にやってきていた。

「ちゃんと放課後も残って調べるんだから、関心じゃない」

「私の身に関することだからな。少しでも無駄には出来ない」

「ふーん。あたしは司書の仕事があるから、今日は手伝えないからね」

「あっ、奈月」

貸し出しカウンターへと向かおうとする奈月を呼び止める。

「なに？」

「茜にも今話したんだけど、鈴瀬隼人にばれた」

耳を近付かせさせ、小声で話す。

「鈴瀬君に？ 彼なら仕方ないか。出雲の一番の親友だし、あそこ
に伝わる武術って気功を操る怪しげな格闘術だからね」

ばれたことは気にしてないようだ。

まあ、ばれて一番困るのは私だけなだけどさ。

「知ってる？ あそこの武術って、元々は魑魅魍魎を退治するために作られた武術なんだよ」

「マジ？」

「咲さんから聞いたから、確かよ。それに、あそこに伝わる文献とかも読んだことあるけど、結構霊験灼かな神社よ。もし、戻る手段が見つからなかったら、神頼みでもしてみたら？」

何処までが本当なのか解らない軽口を叩きながら、奈月はカウンターへと去っていった。

神頼みでどうこうできるなら、御百度参りだってしてやるよ。

「頑張るか？」

「はい」

静寂に包まれた放課後の図書室で、私達は個々に本を読み始めた。

……………。

って、辞書や資料がなければ、解読なんて出来ないんだよな。見たこともない言語で書かれた本を目の前にして頭を悩ます。

「ええっと、お爺さんは山へ向かい、お婆さんは——」

隣では、茜がくねくねとした文字と格闘している。

私と違って何とか解読は出来ているようだ。

「川へ洗濯へ。上流から桃？　っぽいものが流れてきて、お婆さん

とお爺さんがソレを食べる？　続きは――若返るって桃を食べたら若返ったのかしら？」

……………。

「茜さん」

「はい？」

キョトンとした顔を上げてくる。

「その古文書、桃太郎じゃない？」

「桃太郎……ですか？　確かに桃を拾うまでは同じですけど、食べてますよ？」

「昔の桃太郎は、そういう話なんだよ。流れてきた桃から生まれるんじゃないくて、桃を食べて若返ったお爺さんとお婆さんが……」
説明しかけた言葉が詰まる。

「どうかしたんですか？」

茜は興味津々といった眼差しを向けてきた。

「何て言うか……若返った二人はしてね」

「して……………！」

私の濁した言葉の意味に気付き、顔を真っ赤にする茜。

「それで生まれたのが桃太郎なんだよ。だから、多分、その本は関係ないと思う」

「べ、別のにしています」

顔を真っ赤にして書棚の奥へと逃げていく茜だった。

「はあ……、こんなんでも無事に調べられるのかな」
かなり不安になってくる。

最悪、女性として生きるしかない可能性を考えるべきなのかな……
まだまだ陽の高い外を見ては、しみじみそう思い始めていた。

「そろそろ図書室を締めるから、お開きね」

奈月にそう言われ、周りを見渡せば既に私達以外の生徒の姿が無かった。

「どう？ 少しは何か解りそう？」

「辞書も無いから、私は挿し絵を見ていただけだ」

怪しげな本なだけあってか、挿し絵として描かれてる図柄も風変わりなモノが多かった。

どう見ても宇宙人にしか見えないような絵から、魔法陣のように見える図。中にはロケットっぽい絵とかもあったし、古い世界地図のようなモノもあった。

「茜ちゃんの方は？」

「私は……」

ちらっとこちらを見てくる。

「家の方で調べる本を仕分けていただけです。全く関係の無い古文書じゃ時間の無駄ですからね」

「何かあったの？」

「最初に解読していた古文書が、実は桃太郎だったんだよ」

「桃太郎ね……昔の桃太郎だと結構生々しいでしょ」

クスッとほくそ笑む奈月に、茜は顔を真っ赤にした。

「まあいいわ。帰りましょ」

射し込む斜陽の陽射しに赤く染まった校舎を進む。

外に出れば、まだまだ運動部が部活をしている。夏休みに入れば色々な大会が始まるから、最後の正念場とでも言ったところか。

「あっ！」

「何？」

正門をくぐったところで茜が突然声を発した。

「食材を買っておかないと、料理が出来ないんですけど」

「食材か……スーパーでも行くかな」

「スーパーよりも商店街で買えば？ 無駄なく買うならあっちの方がお得だし、商店街の関係者としては商店街の発展の為にもね」

「でも、スーパーだと、タイムサービスがあるからな」

「あら？ 今の二人なら商店街の方が安く揃うわよ？」

奈月の言っていることがよく解らず、私と茜はキョトンとしたお互いの顔を見合わせた。

「いらっしやい、いらっしやい、キュウリ安いよーっと、奈月ちゃんじゃないか。買い物かい？」

「こんばんは。買い物はこっちの二人よ」

商店街にある八百屋の主人に、私と茜を紹介する奈月。

「出雲の所で厄介になっていて、食材の調達よ」

「ほう、八坂さん所かい。二人とも美人だから色々とおまけするか

ら、何でも買っていつてくれや」

主人の言葉に、奈月は『ね♪』つと言いたげにウィンクした。

俺が買い物に来ててもまけてもくれないのに……なんか、ずるいな。
複雑な感情を浮かべている私を余所に、茜は次々と野菜を物色していく。

「では、そのキュウリとトマト、あと茄子にピーマンとー」

「おう。全部で700円だけど、大まけにまけて500円だ」

「はい、500円です」

「毎度あり」

かなり多めに買ってるのに……確かに安いな。

その後も魚屋、肉屋と巡って食材を買っていけば、私や茜の色香に惑わされたのかスーパーで買うよりも圧倒的に安い値段で食材が揃っていった。

「何て言うか……理不尽だ」

安く買えるのはいいけど、男の時と女の時でこうも違うのは納得できない。

「商店街の男性陣はみんな、女性には甘いからね」

「あれは甘過ぎだと思うけど……」

数日分の食材がスーパーで揃える時の半額で済んでいた。

後で、おかみさん達にどやされなければいいんだけど……

つつい、他人の家計まで気にしてしまった。

「ちなみに、姉さん達ならあそこから更に値引き交渉に持ち込むわよ」

「……………」

呆れすぎて、モノが言えなかった。

牛乳なんかはスーパーで買うとして、茜がウチに居る間は彼女に商店街で食材を仕入れて貰った方が良さそうだな。

「じゃあ、あたしはこれで。後に覗きに行くと思うけど頑張りなさいよ」

「はい」

「解ってる」

隣り合った姫川家と八坂家の門をくぐって、奈月とは別れた。

家に入ると、お互い自室へと向かう。

「よっと」

制服を脱ぎ、スカートを落とすと、衣装の中からミニボトムを選んで穿く。

丈が短いけど、スカートよりはマシ——だと思いたい。

上はTシャツでいいかな。

小さめのTシャツは身体にフィットしボデイラインを顕わにしてくれるが、なるべく気にしないようにする。

「夕飯まではまだ時間があるし、少しは調べてみるかな」
カバンから借りてきた本を出す。

「書庫に翻訳に使えるような資料が有ればいいんだけど……」
考古学の書物が置いてある書庫に行こうと扉に向かう。

っと、その前に脱いだ制服は掛けておかないと皺になるか。
ハンガーにスカートを洗濯ばさみで挟み、その上からセーラー服
を被せ壁に掛けた。

「何だか、変な感じだな」

男の部屋にその存在そのものが浮き、何とも言えない気分を抱き
つつ部屋を出た。

「よつと。さすがに重いな」

世界各地の古代文字の資料やら辞書やらを山のように抱えて戻っ
てきた。

ベットの上にそれらを置くと、借りてきた本を一冊手に取り隣り
に転がる。

「うっ」

身体の下でひしゃげる胸の存在を感じて顔を顰める。

そんな胸の下にクッションを置いて、少しでも胸の感触を誤魔化
す。こうでもしないと、変な気分になってしまい、何をし始めるか
解ったモノじゃないからな。

極力胸の存在を気にしないようにしながら、本を開ける。

「うわぁ……どこの文字だよ？」

開けたページには見たことも無い文字が並んでいる。

「この文字を扱ってる資料があればいいんだけど……」

用意した辞書の中から似たような文字がないか探し始める。
んだけど――

「ダメだ、全く解らない！」
ものの数分で投げ出す。

翻訳するにはあまりにも難易度が高かった。

コン、コンッ——

「いずみさん、晩ご飯が出来ましたよ」

「あっ、解った」

ベットから降りると部屋を出た。

「これは、見事な夕食だな」

食卓に並んでいるのは、手作りハンバーグとサラダだった。

手作りハンバーグなんて、独り暮らし中には家で食べることの無いメニューだ。

食べると思ったらファミレスか、姫川家の食事にご相伴に上がる時くらいになる。

「味は保証できませんけどね」

「そう？ 匂いは美味そうだから、美味しいと思うよ」

それに、朝食も美味かったから、不味いなんてことは無いだろう。
ご飯を盛られたお椀を受け取り、箸を延ばす。

じい——

目の前で私の一挙一動を見守る茜。

「うん。美味いよ」

私の賛辞に、茜はほっと胸を撫で下ろした。

「料理が美味いなんて、良い嫁さんになれるよ。これなら、もし私が戻れてもずっと作って貰いたいぐらいだよ」

「えっ。あっ、ありがとうございます」

私の言葉に、茜は顔を真っ赤にした。

にしても、照れすぎだよな。

って、嫁さんにずっと作ってって、まるでプロポーズじゃないか！？

あ……

意識した途端、こっちまで顔が熱くなってきた。

カタ、カタツ――

しばらくは食事を進める音だけが響いた。

「ごちそうさん。美味しかったよ」

「お粗末様です」

湯飲みに注がれた麦茶を飲む。

「それで、本の方は訳せそうですか？」

「無理」

奇怪な文字を頭に浮かべつつ、答えた。

「訳そうにも、まずはどの言語なのか調べないとならないんだけど、

それが解らないんだ」

「無理なんですか？」

「古代文字って、結構な数あるからな。うちの図書室って何処からあれだけの書物を手に入れてくるんだか……」

「確かに、凄い蔵書でしたね」

図書室を思いだしたのか、茜も感心するもどこか呆れ気味だ。

「さてと、続きをやるかな」
すつくと立ち上がる。

これが自分の身に起こったことじゃなければとっくに投げ出しているだろうけど……やるしかないんだよな。

先ほどと同じようにクッションを胸の下にして本を眺める。

「ええっと、この文字ってこの資料と同じなのかな？」
いくつかの資料を漁ってるうちに、それらしき文字が見つかった。

本にある文字をノートに真似て描き、資料にあった対訳っぽい文字をその下を書く。更にその文字を別の辞書で別の言語に訳して――最終的に英語にまで持って……

「Fool（馬鹿）」

……………。

二時間。

資料や辞書を片手に二時間掛けて訳した結果がコレなんて――

「やってられるか！」
辞書を投げ捨てた。

「もう嫌だ。何で、こんな目に遭うんだよ」

コン、コンッ――

「いずみさん、お茶にしませんか？」

「あっ、うん」

ベットから降り、お盆片手に入ってきた茜を出迎える。

「どうです？」

「全然ダメ」

唯一判別できた単語が『馬鹿』では、氣力が失せた。

ガラステーブルの上に置かれたオレンジジュースをストローでかき回せば、グラスの中で氷がカランと音を發てる。

「訳そうにも直接日本語訳が載ってるわけじゃないからさ、完全にお手上げ状態」

いくら資料や辞書が合っても、その資料は日本語は元より英語ですらない見知らぬ国の言語のため、一つの文字を訳すだけで辞書が数冊必要な羽目となる。

そして、間に挟む辞書の数だけ文法が存在し、どこかで解釈を間違えれば意味が反転してしまう。そんな難解なパズルに、私の頭はオーバーヒート寸前だ。

まだ、一万で行う伝言ゲームの方が、正解に近い内容になるんじゃないのか？

馬鹿——なんて概念が古代にあるとは思えないし、さっきの訳は絶対に間違ってると思う。

って言うか、思いたい。

あー、もう。考えるだけで頭が痛くなってきたよ。

啜ったオレンジジュースの程良い酸味が、そんなへたり気味の脳を少しでもスッキリさせてくれる。

「そっちはどう？」

「私の方は順調に訳せてますが、今のいずみさんに使えそうな方法は見つかりませんわ」

申し訳なさそうに茜は首を横に振った。

「いくつか面白そうな呪術とかはあったんですけどね……」

「そっか」

天井を仰ぎ見ては、大きく息を吐く。

「奈月達と堇が頼りか」

「ですね」

茶請けのクッキーを頬張りながら頷く茜。

適応力が良いのか、僅か一日で八坂家の風景の一つに化してるな

……

「こうなってくると、魔法使いでも探した方が早い気がしてくるな」
性転換の秘術を使う忍者がいたんだ、それくらい探せば見つかるかも知れない。

バンツ！

「やつほ。みならい少女いずみちゃん。解読は順調に進んでい——！？」

勢いよくドアを開けた入ってきた奈月だったが、首筋に突き付けられた茜のクナイに、言葉を止めた。

「奈月先輩でしたか、失礼しました」
慌ててクナイを持った手を降ろす。

「気配を感じなかったので、つい反射的に動いてしまいました」
「茜、謝る必要はないよ。ノックしない奈月が悪いんだから」
そう言う俺も、さすがに今の出来事には驚いていた。

「次からはノックするようにするわ……命は惜しいから」
「その方が良いと思うよ」

私としても、我が家で殺傷事件は勘弁して欲しい。

「それで、何しに来たんだ？ 様子見か？」

「それもあるけど、これを届けに来たのよ」

奈月は持っていた袋を俺に投げつけ、テーブルの空いてる面に腰を下ろした。

「なんだよ、これ？」

「明日の授業でいるんでしょ？」

そう言いながらクッキーを摘む奈月。渡された袋を開けてみれば、中から出てきたのは紺色の物体だった。

「こ、これって！？」

「一回切りの授業でわざわざ買うのもなんだから、あたしのを貸してあげよと思って持ってきたの。どうせ三年は、もう水泳の授業が無いからね」

それはスクール水着。しかも女性用の。

「どうして水着なんだ!?!」

「明日あんた達のクラス、体育があるんでしょ？ 姉さんが言っていたわよ」

「確かにあるけど、明日はグラウンドでサッカーをやるはずじゃ」
授業内容の予定を思い浮かべる。

「いずみさん、それって男子の授業内容です。女子は水泳になりますよ」

「へ!?!」

横からの指摘に水着を持ったまま固まる。

「私がこれを着るのか?」

「当たり前でしょ。まさか学校の授業でビキニを着ていくわけにもいかないし」

「び、びきにだと!?!」

思わず声が引きつる。

んなの、着られるわけがない。

ビキニなんてものを着込んで隼人達に見られるなんて、考えただけぞっとする。

「あんな姿で人前に出るか!」

「まあ、夏休みに入れば泳ぎに行くこともあるとは思うけど……今はまずソレね」

困ったように視線を水着に落とすが……

私はおもむろに水着を袋に戻し、奈月に押し返した。

「要らないの？」

「明日の水泳は、水着までは用意してないと言って見学でもさせて貰うさ」

よくよく考えれば、学校に通っているのは図書室に行くのが目的で、水泳にまで出る必要はない。

サボろうと思えばサボれるんだ。

「むっ、面白くないわね」

「奈月を楽しませるために私は女になったんじゃないんだから！」

「でも、いいわ。休みに入ったら無理矢理にでもプールか海水浴に連れ出してあげるから」

奈月の中では私に水着を着せることは確定していたようだった。

「誰が簡単に連れ出されるものかよ！ さっさと男に戻ってやるさ、なあ、茜」

「あっ、はあ……」

歯切れが悪いな。

「手伝ってくれないのか？」

「あっ、いえ。私、頑張ります！」

にっこり微笑んでくれた茜の手を取り、私は絶対に男に戻ってやることを心に誓ってみせた。

10話

「う……ん……………」

寝返りを打つ度に感じる胸の違和感に目が覚めた。

「今何時だ？」

眠い目を擦って時計の針を見れば、時刻は午前三時を回っている。

身を起こせば、微かに感じる胸への重力。

まだまだ若く瑞々しいそれは張りと弾力があり、ブラジャーを外しているのに垂れることも無く綺麗な形を留まらせていた。

「胸……か」

そつと触れれば寝間着代わりのTシャツ越しに、手の平に柔らかい感触が伝わってくる。

程良い大きさのそれは、触っていても心地好い。

「乳首が解る」

布地を乳房に張り付けるようにして引っ張ってみれば、ちょこんとした乳首の形が浮き上がる。

トクン、トクン、トクン――

乳房越しに心音が伝わってきた。

触っているだけなのに、身体の芯が熱くなり口からは吐息が零れだす。

キヨロ、キヨロ……

薄暗い部屋の中、誰も部屋には居ないのを解っているながらも、辺りを見渡す。

「寝て……いるよな？」

壁に耳を当てて隣の部屋の様子を窺ってみる。

もっとも、部屋が面している壁にはお互いのクローゼットが有るため、大きなびきでもかいてなければ、何も聞こえることはない。それでも、これからしようとしていることを考えると、茜の様子が気になった。

「大丈夫……だよな」

物音一つ感じられないのを確かめ、俺は再び胸へと注意を向ける。

ムニユ。

軽く手を動かせば、指に併せて潰れる二つの胸。

本来男には無いそれは、揉んでるだけで不思議な気分になる。

「あっ……」

・ ・ ・

チュン、チュン――

「ん……ふおわぁ………もう朝か」
髪の毛を掻きむしりながら起きる。

「まだ眠いな……」
寝ぼけて暴れていたのか、酷く疲れてる気がする。

重く気怠い身体を起こし姿見の前に立てば、長すぎる髪の毛が凄いことになっていた。

机の上に転がっているブラシを手に取り、髪の毛を梳く。
寝癖は付いていないのか、長い黒髪はあっさりとまでに綺麗に整った。

「着替えの前にトイレと顔を洗うか」

ガチャ――

「あっ、いずみさん。おふぁようございます」

「おはよう――って、茜？」

廊下には、同じように部屋から出てきた茜と鉢合わせたんだけど……

「どうしたんだよ？ 目の下に隈なんて作って」

その顔にはくつきりとした隈が見てとれた。

「あっ、いえ。ちょっと寝て無くて」
てへっと精彩の欠いた笑みを浮かべ、

「朝食の方はすぐに作りますから、少し待っていて下さいね」
朝食を作り、キッチンへと向かっていった。

茜と別れた私はトイレを済ませるとその足で洗顔をし、再び部屋に戻っては手早く制服に着替えることに。

「何度着ても落ち着かないな……」
スカートの乱れを直し、姿見でおかしな部分がないのかを確かめる。

「よしーっ」と
カバンを手に部屋を後にした。

「すいません、今日は起きるのが遅かったので――」
恐縮そうに謝る茜の前には、ベーコンエッグとトーストにコーンスープが湯気を立てて並んでいた。

「いや、十分すぎると思うけど」
出雲だった頃の私なら、トーストはトーストでもチーズトーストだし、付け合わせは無い上に飲み物としてミルクがあるくらいだ。それと比べれば、十二分に豪勢と言える。

「いただきます」
「いただきます」
お互い手を併せてトーストを食べる。

かりかりのベーコンは丁度いい焼き加減で美味かった。

「？」

「どうかしましたか？　もしかして不味かったですか？」

トーストを食べながら小首を傾げた私に、不安そうな顔して茜が訊ねてきた。

「いや。美味しいんだけどさ……すぐに腹が一杯になるなって思っ
て」

「お腹が？　あつ、もしかして胃袋とかも小さくなってるかも知れませんね」

「あー、そうか」

いつもならトーストは2枚食べるのが普通なのに、1枚で腹は十分膨れている。

「ごちそうさま」

「おそまつさまです」

食事を終えると、私達は家を出た。

「奈月先輩と美奈先生はいないみたいですね」

「いつも一緒ってわけじゃないからな」

と言うよりも、いつもギリギリに出ているから、奈月達と一緒に
なることの方が希だ。

奈月はあれで結構多忙だったりするんだよな……何しているのか
知らないけど。

「茜達ってさ、女性だけの里に住んでるんだよな？　学校とかって
どうなってるんだ？」

「中学までは山奥の分校で、先生も里の出身の方なので女性ばかり
ですね。そこから先は、進学したい人は里の息の掛かっている女子

校の方に」

「ずっと女性ばかりなんだ」

良いなと思う反面、少し冷や汗も浮かぶ。

「共学だと、一族以外の血を混ぜようとする者が出てきますから、長老会の方で禁止されてるんです。それでも過去には何人か里から抜けて共学に通った者もいるみたいですけどね……私みたいに」
クスツと笑う茜の顔はどこか苦笑じみていた。

「おかげで、ただでさえ少ない人口がより少なくなってるんですよ」
その原因の一人が目の前にいる訳か。

「知ってます？ 私の同世代の人って10人もいないんですよ。同じ歳なのは輩だけで、上は奈々さんぐらいの人が3人ぐらいで、下はまだ小学生の子が2人だけだったかな」

結束力がある分、山間の過疎村よりは多そうだけど……少ないな。

「里の人口って何人ぐらいなんだ？」

「人口ですか？ 確か200人ぐらいだったと思います」

「200人！？ 2000人じゃなくて？」

「はい。200人です」

「それって、村として成り立つのか！？」

人口200人の村って想像がつかないぞ。

「普通でしたら成り立ちませんが、我が一族は古来より色んな所に多くの貸しを作ってますから、多少の無茶はできるんですよ」
貸しってどんな貸しを作れば、そんなコトが可能なんだ？

カツン――

「危ない」

足を取られて転び掛ける茜を支える。

「大丈夫？」

「少し、集中力が欠けてました」
てへっと笑う茜の顔は精彩が欠いていた。

「授業中にでも少しずつ仮眠を取れば、すぐに治りますから」
と言いながら、茜は大きな欠伸を試みせた。

相当眠そうだな。
って、こっちも眠くなってきたかも。

「ふおわあ……」

私の口からもついついつられて欠伸が漏れた。

「あっはっは」

「クスッ——」

お互い見合わせては苦笑する。

「八坂さんに碓氷さん、おはよう」

「チャオ」

「おはようございます」
教室に入ると、数人の女子達が声を掛けてきた。

女って、群れたがるのかな……
鬱陶しいけど無碍に扱うのも不味いしな。

「八坂さん、学園には慣れた？」

「まだ二日目だから、何とも言えないよ」

「日本の方にはどうなの？ 海外暮らしをずっとしていたんだよね」

「そっちは結構慣れたよ。言葉も普通に通じるからな」
適当に答える。

「碓氷さん、どうかしたの？ 目の下に隈なんて作って」

「夜更かしをして、ちょっと寝不足なんです」

茜は茜で、体調不良をクラスメイト達に心配されていた。

キーン、コーン、カーン、コーン――

「チャイムだ」

「席に着かないと、石川先生うるさいからね」

「バイバイ、八坂さん、碓氷さん」

チャイムの音で集まってきていた女子達が離れていった。

「ふう。姦しいな」

「やっと眠れます」

騒がしさに辟易している私の隣では、茜が一時間目の準備と同時に眠る準備を始めていた。

「眠いですう……」

昼前の廊下を、ふらつく足取りで茜が歩いていく。

ぶつかりそうでぶつからないのは忍者足る所以かも知れないけど……
……見ているこっちの心臓が悪い足取りだな。

朝はそれなりにゆとりがあったみたいだけど、茜のヤツ、授業の

度に当てられていたからな。

それに、休み時間は私の元に集まっていた少女達の姦しさと眠れなかったようだし……

「大丈夫か？」

「平気ですよ……水に入れば眠気も消えますし。こーみえても、わたしは忍者なんですから。どんっとこいですわ」

その妖しげな言動が余計心配にさせる。

茜を気にしながらもプール脇の更衣室にたどり着いた私は、何も考えずに左側の更衣室へと向かう。

「八坂さん！ そっちは男子更衣室。女子は右のこっちよ、こっち」
女子生徒に呼び止められて慌てて隣の更衣室に入った。
更衣室の違いをすっかり忘れていた。

「あっ、みーちゃん、胸が大きくなってない？」

「ふっふふん♪ この間計ったら2センチもバストが増えていたわよ」

「ついでにウエストもね」

「こら、小雪！ それは言わないのが友情でしょ！！」

コンクリート剥き出しの無骨な空間には、女子生徒達の黄色い声が響き渡る。

宮本のヤツ、胸が大きくなっているのか。

氷坂のヤツ、良い体つきしてるな……今の私には劣るけど。
頭の中に展開した自分のボディーラインと見比べる。

「いてっ!?!」

胡乱な目つきで睨みながら、茜が私の肘を抓ってきた。

「何だよ、茜」

「いずみさん、にやけすぎです」

ぷくつと茜の頬が若干膨れてる気がする。

「一昨日の図書室では私の胸から視線をずらしていたのに、今日はジロジロと見渡すんですね？」

小声で話しかけてくる茜の言葉には刺があった。

「さすがに二日も経つと女の身体に慣れてきたからな。健全な『俺』としては、同年代の女の子の裸にも興味がでてきたってことだ」

先日、茜の胸を見た時はいきなりすぎて狼狽したけど、さすがに前もって解っていれば冷静に対処できる。

そうなると、桃源郷を目の前にして男としての『俺』がやることはただ一つ。

女子生徒達の生着替えを目に焼き付けんばかりに見渡すだけだ！
幸い帰国子女ってこともあってか、こんな私の行為を誰も咎めようとはしなかった——事情を知っている茜以外は。

ゴキッ！

凄い音が私の首から響いた。

「何するんだよ」

無理矢理向きを変えさせた茜を睨む。

「そーいう不埒な考えなら、皆さんの着替えが終わるまでこつちを向いていてください」

骨の鳴った首筋をさする私の前で、茜は制服に手を掛けた。

衣擦れの音を発てて剥がれていく制服。白のシンプルな下着が包み込むのは、無駄なく、それでいて少女らしさを保つ鍛えられた肢体。

ゴックン――

私は完全に魅入ってしまい、着替えが終わるまで視線は茜に釘付けだった。

水泳の授業が始まると、制服姿の私はプールサイドのベンチに腰掛けた。

隣には、どこかぼや／＼とした雰囲気醸し出しているクラスメイトが一人、同じように見学している。

「ふう……」

「八坂さん、どうかしたの？」

「あついや。ちょっと暑気を喰らっただけだ」

誤魔化すように、ベンチの上をすこし移動しては影の下に逃げる。まさか、茜の着替えの刺激が残っていたとは言えない。

いわゆる、眼福ってヤツだな。

忍者なんてやってるのに、綺麗な身体をしてるんだよな、茜って。

「八坂さんは泳げるの？」

「んー、泳げるとは思うけど……飛び込みは苦手かな？」

曖昧に応える。

泳ぐこと自体は問題ないと思うけど、筋力の違いは元より肉付きも違い、重心も違う身体でまともな飛び込みが出来る自信は無い。

それに、腹打ちならぬ胸打ちでもしたら、男である我が心ではどんな痛みがあるのか想像だに出来なかった。

「八坂さんってば色んな所に行ってるんだよね？ 食事とかは大丈夫なの？」

「好き嫌いは無いから、大抵のモノは食べられるかな。日本みたいな飽食の国ならまだしも、貧しい国でもてなしを受けるとき、残すのは悪いからな」

特に周りで子供とかが見てるとな……

「何か変わったモノは食べたことがあるの？」

「変わったモノ？」

少し考えてみれば、怪しげなモノが色々と浮かぶ。

「日本じゃゲテモノに属する様なモノも色々と食べているよ。国によればご馳走になったりするからな」

虫を食べる国って結構多いんだよな。日本でも蜂の子やイナゴにザザムシを食べるけど……芋虫とか昆虫とか……思い出しただけで胸がムカムカしてきた。

爬虫類の肉とかならまだ幸せだったな。トカゲなんて鳥肉と大差ないし。

「例えばどんなのを食べたの？」

「世の中には知らない方が幸せなことがあると思わないか？」

少なくとも、この後に昼休みを控えている今語る内容じゃないな。

「なんかよく解らないけど……凄そうなんだね」

遠い眼差しをする私に何かを察したのか、少し退くクラスメイト。見学中やることも無く、暇つぶしとばかりに終始話しかけてこれ、さすがに無碍にあしらうことも出来ず適度に会話に乗っていた。

「きゃっ！ 確氷さん！？」

「え？」

いきなり隣の少女が立ち上がる。

彼女の視線の先ではプールの折り返し地点に気付かず頭を思いっ切りぶつけてる女子――茜の姿があった。

パニックになったのか、ばしゃばしゃと水面を叩き藻掻きながら溺れていく。

遅れて皆も気付くが、生徒も先生もプールを挟んでの逆サイドに
いるため、救援が間に合わない。

「ちっ！」

それは無我夢中の行動だった。

気が付いた時には勢いよくプールサイドを蹴り、飛び込んでいた。
制服が水を含み重くなるがお構いなく泳ぎ、水を飲んで沈んでい
く茜を掴み上げると、一気にその場から離脱した。

プールサイドに横たえ口元に耳を近づける。

「息をしてない！？」

顎を上げ気道を確保すると、鼻を押さえその唇に自分の口を当て
た。

二度、三度と酸素を送る。

「けっほ――っほ」

水を吐き出しながら意識を取り戻す。それに安堵したのか私は腰を付いてへたり込んだ。

「私は……?」

みんなが心配そうに見守る中、茜は意識を取り戻した。

「碓氷さん、大丈夫?」

「溺れていたのよ! それで八坂さんが助けに飛び込んだの」
自分の方を向く茜に軽く手を振ってみせる。

「一体何があったの?」

体育教師が訊ねた。

「寝てました」

返ってきたのはあまりにあり得ない理由だった。

「「「え?」」」

その場に居合わせた全ての人々の間の抜けた言葉が一つに合わさる。

「泳いでいる途中、気持ちよくなってふっと意識を無くしたんです。その後は息継ぎもなく惰性で泳いでいて、そして壁に当たり……その衝撃で僅かに残っていた空気を吐き出し、そのまま沈んでいったんです」

「寝てたって……碓氷さん」

呆れて言葉を失う体育教師。無事だったこともあってか、周りからはどっとした笑いが響く。

「これからは泳いでる最中に寝ないようにね」

「はい……」

笑いのものにされ、恐縮そうに縮こまる茜。

「ええっと、八坂さん？ 見事な人命救助でしたね」

「ん、ああ、昨年の夏にプールの監視員のバイトをしていて、人工呼吸のやり方を講習で習ったんだよ」

講習で仕込まれはしたけど、実践で行ったのはコレが始めた。

そんなことよりも、身体にまとわりつく濡れた制服の方が気になる。

下を向けば、透けたセーラー服の向こうにブラジャーがハッキリと見て取れ、腕で胸を隠す。

ピッタリとまとわりつく濡れた服はけして心地良いものではなく、身体全体を締め付けるそれは女の身体としてのラインを今まで以上に私に感じさせてくれた。

普通の状態での女装には少しは慣れたが、こう言う異様な事態は想定外で、一度意識してしまうと心が酷く落ち着かない。

「今着替えを用意するから更衣室で待っていて」

ずぶ濡れの私にタオルを掛けると、体育教師は少し早い授業の終わりを告げ、着替えを取りに校舎の方へと走っていった。

更衣室に戻ると、水着から制服に着替える女子達と同じように、私は濡れた制服を脱ごうと手を掛ける。

「うう……びちょびちょでぬちよぬちよだ……」

水気を含みべつとりとまとわりつくセーラー服は、ただでさえ無

かった伸縮性が全く存在しないように、思うように脱げない。

周りにいた生徒の手を借りて何とか身体から引っ張り剥がす。

「ぷっはぁ……」

何とか脱げ、一息付く。

スカートは太股にまとわりついてはいたけど、ホック外しファスナーを下れば何とかずり下ろせた。

「下着まで完全に濡れているな」

べちよべちよのブラジャーとショーツも剥ぐ。

みんなの前で裸になることには抵抗はあったが、濡れた服を着続ける不快感が勝った。

「うわぁ、八坂さんってスタイル良いわね」

「胸は大きくもなく小さくも無いし、形も良いわ」

「八坂さんって、やっぱり女性だったんだ」

「もしかして、小雪も八坂さんが八坂君の女装だと思っていたとか？」

「明奈も思っていたの？」

「だって、顔の作りがよく似てるし……転校してきたタイミングが余りにも出来すぎだからね」

ええっと……

もしかして、ばれる寸前だったとか？

周りの女子達の会話に、内心冷や汗が伝う。

「胸なんかは詰め物でもいいし、シリコンの作り物でも誤魔化せるけど……あそこだけはどうにもならないからね」

周りにいた連中の視線が私の股間に集まっているのに気付き、慌ててタオルで身体を隠す。

今は女同士なんだから恥ずかしがる必要性も無いんだけど、彼女たちの視線がくすぐったく、見られてることを意識した途端羞恥心が増した。

タオルを身体に巻き付け、逃げるように更衣室の片隅に引込む。

祭りは終わったとばかりに、自分達の着替えを始める女子達を後目に、私は体育教師が着替えを持ってくるのを待っていた。

「着替えて、何を持ってくるんだろ？」

「着替えですか？ 予備のジャージとかじゃないですか？」
隣で着替えている茜が小首を傾げた。

やっぱ、ジャージになるのかな……

真夏にジャージって熱いんだけどな。

想像しては、溜息が零れた。

「八坂さん、着替えを持ってきたわ。昼からの授業は悪いんだけどコレで出てね。濡れた服の方は私が乾かしておくから」

体育教師が持ってきたのは、予想通りに体操服一式だった。

「あっ、それと下着なんだけど」

持ってきた紙袋を漁りだす体育教師。彼女の手握られていたのは白いシンプルなショーツだった。

「ブラの方は無かったんだけど、ショーツはそれを使ってくれればいいわ」

「はぁ……」

ブラジャーは無いのか。

渡されたショーツを穿き、体操服を着込んでからジャージのズボンを穿く。

「うっ……乳首が」

ノーブラのため、体操服に少し形が浮き出ている。

目立つ——という訳ではないが、十分に周りにはノーブラなのが解る。

「これで校舎に行ったら、目立つよな……」

「では、私の下着を貸しましょうか？」

「借りられるか!!」

ピッコン!

真顔で言う茜の頭をデコピンで叩くのだった。

「痛いです……」

「くだらないことを言う茜が悪いのよ。人の使ってる下着なんて借りられるわけ無いだろ。それにサイズが合うのか？」

「いずみさんのいけず」

自分の胸を押さええては顔を真っ赤にする茜。

「はいはい」

くだらないとばかりに投げやり気味に返すと、一緒に渡されたジャージの上を着込むことにした。

「熱いな……」

一見してはノーブラなのが解らなくなっただけど……真夏にジ

ヤージは暑かった。

「脱ぐか」

極力胸の前には物を置くなり腕を組むなりしていれば問題ないだろう。

10話（後書き）

投稿に際して色々削ってるので、おかしい部分が出てきてる気がしないでもなかったりして（汗

11話

「やつほ、いずみちゃん」

水泳後の昼休み。司書室の扉を開けた私と茜を出迎えたのは、一人昼食を摂っていた美奈さんだった。

「今日はパンなの？」

「二人とも寝過ぎしたから、弁当まで用意する時間が無かったんだよ」

カツサンドにカレーパン、焼きそばパンと、購買で買ってきたパンを机に並べる。

「茜ちゃんまで寝過ぎしたの？ 昨日は早朝からジョギングをしていたみたいだけど、やっぱり環境が変わると寝付きが悪いのかしらね」

「そ、それはその……」

「まだウチに慣れていないんだろ。それより、奈月は？」
言いにくそうな茜を助けるように話題を変える。

キョロキョロと周りを見渡すが何処にも奈月の姿は無さそうだ。

「奈月ちゃんなら、四時間目の授業で文化祭の出し物を決めていて、そのまま昼休みまで延長してるんだってメールが来てたわよ。それで私に二人の見張りを頼まれたの。そんなことより——」

私の姿を見ては楽しげに微笑む美奈さん。

「聞いたわ、いずみちゃんの武勇伝♪」

「え？」

「何でも、溺れた茜ちゃんを助けたんだってね」

「もう知っているの？」

「全学年で話題中の美人の転校生が行った颯爽とした救出劇よ。噂にならないはずはないわね」

授業が終わって5分足らず。異様なまでの情報伝達速度だ。

「全学年で話題って、もしかして凄く目立っているとか？」

「私の受け持ちのクラス——どの学年でもいずみちゃんのコトを話しているから、知らない人はいないんじゃないかしら？ 今回の出来事もあってか、今以上にみんなの注目を浴びることになると思うわよ」

箸を閉じたり開けたりする美奈さんは、どこか楽しげだ。

「このまま二学期もいずみちゃんを通ったら、ファンクラブくらいすぐ出来るかも知れないわね」

その悪戯っぽい笑みに項垂れるしかなかった。

「あっ、それで一つ聞きたかったんだけど——茜ちゃん」

「何ですか、美奈先生？」

いきなり矛先を向けられキョトンとする茜。

「茜ちゃんって忍者よね？ それがなんで溺れたりするの？」

原因まで伝わっていないのか、美奈さんはそんな疑問を抱いていた。

「それがその……寝ていたんです」

言いにくいのか困ったように囁く。

「寝ていたって水中で？」

「はい。碓氷の忍者は泳ぎながら寝る術を身につけています……ただ」

「ただ？」

続けた言葉に首を傾げる。

「夢を見たんです」

「夢だって？」

それは聞いてない。

「幼い頃に水遁の術の修業で溺れたことを夢に見てしまい、そのまま夢と現実が同調し、溺れてしまったんです」

「ええっと……」

引きつらせた頬を汗が伝う。暑さのためか、それとも冷や汗か……

「んー、そうなるあまり無理はさせない方がいいわね。奈月ちゃんには私から言っておくから、しばらくは休憩しなさい」

「で、でも、それじゃいずみさんが……」

「え、え、え？」

どう言うことだよ、それ？

「あら、解ってないのね」

「何が？」

「茜ちゃんが寝不足になるほど起きていたのは、徹夜で古文書の解析をしていたからじゃないの」

茜を見れば、私の視線から逃げるようにそっぽを向く。

美奈さんの言ってるのは当たってるみたいだけど……

「どうして、そんな無茶をするんだよ。一步間違っていれば死んでいたんだぞ？」

人の命を身代わりにしてまで戻りたいとは思わない。

「で、ですが、私に出来ることなんてコレくらいしかなく――」

ギュッ――

黙らせるように茜を抱きしめる。

「いいんだ。いいんだよ。明後日には夏休み入るんだし、のんびりやればさ」

「でも」

「無理して茜に倒れられたら私も困るからな」

「解りました……」

渋々ながらも折れてくれた。

そんな茜に、ほっと胸を撫で下ろす。

「それに、本命は堇の情報待ちなんだから」

「本命は堇――」

いきなり、すっと立ち上がる茜。

両の手は握り拳を作っている。

「やっぱり私、頑張ります！」

食べかけのクリームパンそっちのけで、茜は図書室へと消えていった。

突然行動に、何が何だか解らない。

「頑張るのは有り難いけど……どう言うことだ？」

「うっふっふ、身体が女になっても、いずみちゃんが女心を理解するにはまだまだ掛かりそうね」

苦みと笑いの混雑した眼差しを私に向けながら、置いていった茜のパンの残りを物色する美奈さんだった。

よく解らないけど、こっちもさっさと食べて少しは調べるかな。

「うっ……」

机の上のパンを取ろうと手を伸ばした形で固まる。

「どうしたの？」

「乳首が擦れて……」

ブラジャーを着けていないため、カップで守られていた乳首が無謀に擦れてくすぐったい。

「そう言えばノーブラなのね。これで貼っておく？」
差し出されたのはバンソコだった。

「せめてもう少し……」

貼ってる姿を想像してみてもは啞然とする。

さすがにそれを貼るのはマニアックすぎだ。

「仕方ないわ。ちょっと待っていて」

司書室から出ていく美奈さん。

待つこと数分。

「はい、これ」

「何です？」

戻ってきた美奈さんから渡されたのは、肌色をした薄っぺらな物体だ。片方の面がネバネバしている。

「ニップレスよ」

「どうしてこんな物があるんだよ!？」

「んゝっと」

口元に人差し指を添えて小首を傾げる美奈さん。

「いわゆる、紳士淑女の嗜み？」

何が言いたいのかよく解らなかった。

バンソコと大差ない気がしつつも、借り受けたそれを乳首に張り付けた。

体操服の上からは乳首は見えないし、動いても擦れないのは有りがたかった。

あのまま動く度に擦れていた、感じてしまいそうだったんだよな

……

「ふう、やっと終わったわ——って、その格好は何？」

昼休みも残り10分を切ったところで奈月は司書室に現れた。

「奈月ちゃんはいずみちゃんの武勇伝を聞いてないの？」

「ああ、あれね」

あっさりと通じたところからして、三年にも噂は流れているのか。

「おかげで制服はぶ濡れで、借りた体操服を着てるんだよ」

「ふーん」

感心なさげな返事をして、持っていた弁当箱を広げる奈月。

「あっ、午後から気を付けた方がいいわよ」

ご飯をぱくつきながら、箸で指してきた。

「気を付けるって？」

「あたしの所に流れてきた噂の中に、二年の転校生がノーブラでいるってのがあったからね。この後は、何かにつけてジロジロと見てくる連中が出てくると思うわ」

「げっ」

そう言えば、購買にパンを買いに行った時、やたらと男共の視線が胸に集まっていたな……

今頃噂は全校生徒に伝わってるだろうし……考えるだけで気分が鬱になってきた。

「それで、助けられた方は？」

「茜ちゃんなら、新しい古文書を探しに行ってるわよ」

「ふーん、よく解らないけど、やる気を出したのなら関心、関心」

図書室の方を向いて満足げに頷く奈月。

「まさか文化祭の催し物を決めるのに休み時間までずれ込むとは思わなかったわ。おかげでお昼を食べる時間がほとんど無いじゃない」

それなら、わざわざ図書室までこなくても教室で食べばいいのに……

口にはせず心で突っ込む。

「奈月ちゃんのクラスは何をやるの？」

「休憩所」

美奈さんの質問に、簡潔な返事が返ってきた。
残り時間も僅かなため、奈月は箸を止めることない。

「休憩所？」

「そっ。休憩所」

「喫茶店ってことか？」

「ううん。単純に休憩だけをする場所。教室一つ使って椅子と体育で使うマットで作ったベツトを置くだけ。あとはリラクゼーション用のCDでも流しておくの」

そんなモノを決めるのに休み時間までずれ込んだのか？

「一応受験生だから、誰も夏休みにまで準備に来たくなってね。如何に楽に出来るモノは何かってコトでもめたの——あつ、いずみ達のクラスは何やるの？」

「演劇だったかな」

少し前に決めたことを思い出す。

「始めは喫茶店でまとまり掛けていたんだけど、クラスメイトの一人が流行りのメイド喫茶にしようって言い出したら、女子達がこぞって反対してさ」

中には興味を持った女子もいたみたいだけど、多勢は反対派を占めていたからな……

「話している間に、いつの間にか男子も女装してメイドさんになれって話になって、喫茶店のアイデアは流れたんだよ」

「文化祭で女装って一種の定番なのよね。あたしが一年時に、女装コスプレ喫茶をやっていたクラスがあったけど……文化祭後も道を踏み外した男子が出たって聞くわね」

奈月の話に、嫌な汗が背中中に吹き出た。

もし——

もし、このまま女性で居続けたりしたら、男に戻った後も道を踏み外したりしないだろうか？

思い浮かべた危惧に身体が震えた。

「それで、演劇って何やるの？」

「確かシンデレラだったな。ただ、脚本を担当するヤツが面白おかしく喜劇風の現代劇にアレンジするって言っていた」

「ふーん。それで、いずみは何の担当？」

「担当は今日の6時間目をLHRにして、そこで決める手はずになってるから未定。劇には出たくないから、裏方でもやろうと思ってる」

気楽な私に奈月は哀れみの眼差しを向けてきた。

なんだ？

「それはご愁傷様」

「え？」

「だって、休学中の『八坂出雲』の担当は出席してる人達が勝手に決めるんですよ。誰もがやりたがらない役柄に抜擢されることは確定したようなモノね。シンデレラにでも抜擢されないように祈りなさい」

「うっ……」

スピーカーから聞こえる予鈴を片耳に、奈月の指摘に言葉が詰まる私だった。

そうだよな。少なくとも私——俺なら、休んだヤツを是幸いと無理難題を押し付けるよな。

はぁ……鬱になってくるよ。

「ではこれより、文化祭の役割を決めます」

5時間目が始まると、文化祭運営委員の隼人と女子の委員の草部夕子が壇上に立ち、役決めを開始した。

病欠の担任副担任の替わりにやってきた美奈さんは、窓際の席に腰掛けてその様子を面白そうに見守っている。

「まずはスタッフから選ぶので、専門的スキルのある人は——」

「鈴瀬、一つ良いか？」

一人の男子が進行を止めた。

「なんだい、徳田？」

「彼女は参加するのかどうかと思ってな」
指さされるのは自分であった。

「私？」

「そう、八坂さんだ。転校してくるかどうか未定だけど、実際転校してくれば2-Cに入る可能性が高いだろ？　そしたら、あれだけの美人だし話題性もある」

話題性か……

確かに今一番旬な話題なんだろうな。

廊下を歩く度に感じる至る所からの視線と、教室での男子からの

悶々とした雰囲気からして。

多分、今の学園で私のことを知らない人はいないんじゃないか？
そんな気さえしてくるよ……まったく。

「これだけの逸材を文化祭に使わない手はないと思うんだが」

「確かにいずみさんを使えば受けも良いわね」
うんうんとクラス全員の頷きが聞こえる。

「あつ、八坂さんを使うなら一つ良いアイデアがあるんだけど、
いかな？」

発言したのは既に決まっていた脚本担当の少女達の一人だ。

「八坂君と八坂さんってよく似てるじゃない」

「似てるけどそれがどうしたんだ？」

「だから、その似てるのを使うのよ。例えば、シンデレラはボロボロの服を魔法使いによってドレスにもらったじゃない。それを、ドレスだけじゃなくて、男を魔法で美少女にした——とか」

「それなら、演劇よりも映画の方がいいんじゃないか？ あつちな
らCG処理で色々と効果を施せるからさ」

「じゃあ、出し物は映画に替える？」

「夕子。まだ出し物を替えるのは大丈夫だね？」

「ええ。終業式までなら変更は利くわよ」

って、どんどん話が暴走していく！？

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっとまった！」

私は慌ててストップを掛けた。

シーンと水を打ったように静まり返る教室。皆の注目を一身に浴びて少し退ける。

「私は夏中この街にいるとは限らないんだぞ？　それに、出雲のヤツが夏休み中に帰って来るとも限らないだろ？」

「それもそうか」

「確かに二人がいるかどうかで変わってくるな」

「じゃあ、八坂さん達を使う以外の物語の脚本も幾つか用意すればいいんじゃない？」

納得する生徒もいれば、せっかくのアイデアを捨てきれない人達もいた。

「それで8月の登校日まで待って、いずみさんが参加するのかしなののか、八坂君が帰ってきているのかいないのかで、どれをやるか決めればいいと思うんだけど」

「登校日じゃ遅くないか？　映画にするならスタッフは事前に決めておかないと、衣装とか小道具とかが用意できないぞ？」

「うーん、それもそうね。じゃあ、来週に一度学校に集合でどう？　あたし達も可能な限り幾つかの脚本を用意しておくわよ？　なんだったら――」

私を見ては、不遜な笑みを浮かべた。

「例えいずみさんが参加できなくても、八坂君に女装させて撮ればいいじゃない」

「おお！」

「それもそうね。八坂君にやらせれば良いだけじゃない」

そのアイデアに周りから歓声が上がる。そんなクラスメート達に反し、私の顔面からは血の気が失せていった。

勝手に決まっていくな現実に対し、止めようもなくガックリと肩を落とす。

そんな私の様子に茜はオロオロし、蚊帳の外にいた美奈さんは楽しげに微笑む。そしてもう一人――事情を知る壇上の隼人は、ご愁傷様とでも言いたげな苦笑を浮かべていた。

放課後の図書室で、私は一人窓枠に肘を掛けながら愁いていた。

「どうかしたの？」

遅れてやってきた奈月が茜に訊ねている。

「文化祭の役割分担で少し――」

「ふーん。予想通りの展開だった訳ね」

先ほどのLHRでの内容を教えて貰い、奈月は冷ややかに笑った。

そんな二人の会話を無視するように窓の向こうを見つめながら溜息をつく。

「はぁ……」

夏だけあって陽はまだ高く、夕焼けじゃないのが残念だ。

「ほら、黄昏てないで行動する」

「どわぶ!？」

後頭部に衝撃を受け、あり得ない擬音を吐いて倒れ込む。

「奈月先輩!？」

「何するんだよ！」

後頭部を押さえて頭を上げる。隣には、投げつけられたと思われる分厚い辞典が転がっていた。

「身体の耐久性が違うんだから、ケガしたらどうしてくれるんだよ」

「あら、角で殴ってないから大丈夫よ」

悪びれもせず言い切ると、奈月は床に落ちた辞書の埃を叩いて本棚に戻した。

「そんなコトより、早く戻る方法でも探しなさい。主演女優として自主映画にでたいって言うなら別だけど」

ビクツと身体が震えた。

よろよろとおもむろに立ち上がり、妖しげな本を一冊手に取っては――

「解るかッ!!」

投げ捨てていた。

その本には、見たことも聞いたことも無い文字がのたくっていたのだ。

「こうなったらいつそ夏の間中行方をくらますか」

この街から逃げ出してしまえば問題ない。文化祭の準備をサボるから非難は来るだろうけど、二学期始めから文化祭開始までの期間及び当日のスタッフをかって出れば大丈夫だろう。

「あんたがしたいなら止めはしないけど、二学期からも『いずみ』で通いたい訳？ 行方をくらました人間が図書室に来るコトなんて出来ないんだから……董ちゃんの方で方法が見つからなかったら、

ずっとそのままよ？」

「うっ——くそったれ！」

やけくそ気味に叫ぶと、私は投げ捨てた本を拾い上げページを開いた。そしてすぐ閉じ、本棚に戻しては新しい本を取り出す。

難解な本を読むよりも先に少しでも意味が解りそうな本から始めた方がいい。

「これは無理、あれも無理、それも無理……どれも無理」
片っ端から本を物色していく。

「そう言えば、いずみ」
「ん？」

物色する手を止めずに応える。

「どうして体操服姿のままなの？ 制服なら乾いたんでしょ？」

「ああ、それか」

濡れた制服は体育教師の手で午後の時間中干され、6時限目後に返して貰っている。

「更衣室に行くのが面倒臭かったから着替えてない」

もっとも、野郎共の視線が鬱陶しかったから、ブラジャーだけはトイレで身に着けている。

借りたニップレスを剥がした際、溜まっていた汗が流れたのは驚きだった。シリコン性だから通気が悪いようだ。

何故制服には着替えていないかと言うと、ジャージとは言え久々のズボンで午後からの授業を過ごしてみても、やはりこっちの方が落ち着くのを実感したからだ。

ただ、これを口にすると奈月に何を言われるか解ったモノじゃないので黙っておく。

「帰りもそのまま？」

「まあな。ついだから制服は帰りにクリーニングに出すつもり」

「別に洗濯機で良いんじゃないの？」

「いや、一応借り物だろ。ちゃんとしておかないと思ってさ」

「ふーん。姉さんなら戻った後も記念にくれると思うけど……殊勝な心がけね」

別段邪魔することもないと思ったのか、奈月はそれ以上は何も言っただけだった。

「ん？」

本を物色していた手が、一冊の本で止まった。

表紙には文字は一切無く、試しに開いてみたページには見たことのない文字がびっしりと埋まっていた。

読める訳ない。

なのにその本から目が離せない。

何なんだ、この本は？

棚に戻そうかとも思うが、何故かその行為がはばかりれる。

本棚にもたれながら漠然とページを捲る。

「……………」

どれだけ考えても見たことのない文字が続く。

「……………み」

挿し絵は元より、何の図式も記号らしき物すら載っていない。いや、載っているのは実は文字ではなく記号の羅列なのかも知れない。

「……………ずみ」

理解不能な本。でも、本に向けられた意識が外せない。それ以上に吸い込まれそうな錯覚さえ覚え始めていた。

「いずみ！」

「はい！！」

突然耳元で叫ばれ飛び跳ねる。

「集中するのはいいけど、もう帰るわよ」
時計を見れば、既に6時を回っていた。

「あっ、うん」

持っていた本と棚を見比べる。そこには、一冊分の空きスペースが有るはずなのに、何故か綺麗に埋まっていた。

「奈月。この本借りたいんだけど」

棚に戻せないこともあり、結局借りることにした。

「貸し出し？ いいけど——って、何この本？ 見たこともない文字ね。解読できるの？」

「解読できないから家に資料がないか調べてみたいんだよ」

「ふーん。借りるのはこの一冊だけで良いの？」

「ああ、しばらくはそいつの解読に挑戦してみたい」

貸し出し処理をし校舎から出ると、既に空は朱の世界に移っていた。

「んじゃ、帰りますか」

「はい」

「あっ、奈月。悪いけど商店街に寄って行きたいんだけどさ」
帰ろうとする二人を止める。

「商店街？ 何か買い物？」

「さっき言っただろ。こいつのクリーニング」

二人に紙袋を指し示した。その中身は、それは昼前の水泳で濡れた制服だ。

「おや、姫川さんトコの奈月ちゃんじゃないか」

商店街の一角にあるクリーニング屋を出たところを奈月の名が呼ばれた。

振り返れば、大量の紙の束を持った初老の男性がいる。

「こんばんは」

「あっ、組合長さん。こんばんは」

「どなたですか？」

誰か解らない茜は小首を傾げる。

「この柳町通り商店街の組合長さんよ。こっちの娘達は後輩で今八

坂家にご厄介になつてゐる碓氷茜ちゃんと八坂いずみ」

「こんばんわ。碓氷茜です」

「こんばんわ。八坂いずみです」

茜に習つて素直に頭を下げておく。

「ああ、こんばんわ。茜ちゃんにいずみちゃん？ あれ？ 八坂つてことは……」

「八坂出雲の従妹よ」

「出雲君の従妹か。確かによく似てる」
感心したように頷く組合長。

本人だから似てゐるのは当たり前だけどな。

「それに美人だ——あつ、奈月ちゃんも茜ちゃんもちろん美人だよ」

フォローする辺り、年の功を感じる。

「コンテストに応募して欲しいくらいだ」

「コンテストって？」

組合長は持っていた紙の束から一枚取りだして広げてみせた。

そこには、『第24回 柳町通り商店街納涼祭り』とあり、下の方に『ミス浴衣美人コンテスト開催 応募者募集（飛び入り歓迎！）』と記されている。

「どうだい、出てみないかい？ 三人なら良いとこまで行けると思うよ。賞品もでるしね」

商店街主催のイベントだけ合つてか、賞品の大半は商店街の各店が出し合つた品々や商店街で使える金券であつたが、優勝賞品はホテルのディナーのペア招待券だつた。

「いずみ、出してみる？」

「わ、私は別にそんなモノには――」

「茜ちゃんは？」

「美人コンテストに出られるほどの美人じゃありませんから」

「そう？ 茜ちゃんなら十分上位を狙えると思うけど……こんな感じだから、三人共参加で」

「奈月先輩!？」

「奈月!!」

私たちの叫びを耳元で受け、顔を顰める奈月。

「冗談よ、冗談。こんなだから、遠慮しておきます」

「そっか。でも、まだまだ期限はあるから気が向いたら参加を考えてよ。なんなら飛び入りも受け付けているからさ」

組合長はそれだけ付け足すと、商店街の中へと消えていった。

「納涼祭りなんてやるんですね」

「地域活性化の一環よ。鈴生り神社のお祭りと花火大会も同時期にやるから、結構賑やかになるんじゃないの？」

「『姫』でも何かやったりするんですか？」

「どうかしらね？ やってもせいぜい割り引きぐらいだと思うけど……後は、各種コンテストに景品提供するぐらいじゃないかな？」
ポリポリポリと頭を書きながら答える奈月。

納涼祭りのメインは期間中に色々開催されるコンテストと商店街に並ぶ屋台だからな。奈々さん一人じゃ『姫』を切り盛りするのがやっとうだろうな。

おっと、考えている間に、件の輸入雑貨店『姫』の前にまで来ていた。

カラン♪

「いら——あら、おかえりなさい」

カウベルの付いた扉を開けて入ってきた妹と隣人の姿に、挨拶を変える奈々さん。

「ただいま」

「お邪魔します」

「こんばんわ」

体操服姿の私を見ては、奈々さんは小首を傾げた。

「店の方からどうかしたの？」

「いづみがクリーニング屋に用があってね、通らせて貰うわ」

商店街をぐりと回り込んで玄関の面した裏通りに入るよりも、最短で帰れるからと姉の店を抜け道にする奈月だった。

「クリーニング屋ね……ん？」

店内を通り過ぎる私たちを見送っていた奈々さんの顔つきが険しくなった。

「いづみちゃん！」

「はい？」

「そのカバンの中に何か変わったモノでもあるの？」

「変わったモノ？」

やばいモノは持ち歩いてないんだけど……

「教科書とノートぐらいしかないけど？」

「本当に？」

「あつ、図書室で借りてきた本ならあるか」

「それよ！ 少し見せてくれる？」

訳も解らぬままカバンから本を取り出す。

「これがどうかしたんですか？」

本を受け取った奈々さんの顔つきが一瞬険しくなったけど、直ぐにいつもの表情に戻っていた。

「ちょっと……古いインクの匂いが気になったのね」

クンクンと手に取った本のページの匂いを嗅いでみる奈々さん。そのまま何もなかったように本を返してくれた。

何なんだか……

釈然としないままもそれを受け取りカバンに戻し、店の裏口から出ていく。

【OFF—SIDE】

「フッフッ……」

独り誰も居なくなった店内で、奈々は楽しげにその口元を綻ばせた。

「あんなモノまで寄せ付けるとは……おもしろいわね、『出雲』クン」

11話（後書き）

某所の二章分がこれで終了です。

さすがに、18禁要素を消すのが面倒くさくなってきたかも（汗

しかし、市販のラノベだってもっと過激なのはあるだろうし……
どこまでやっていいのか解らないのがな（苦笑

12話

「ふう。食べた食べた」

一杯になった腹を撫でながら、食後のお茶を飲む。

このひとときがたまらないものだ。

「洗い物、済ませちゃいますね」

テーブルの上に残る空の食器を集めていく茜。

「手伝うよ」

「いいですよ、すぐに終わりますから。いずみさんはゆっくりして
いて下さい」

水を流し、手早く皿を洗っていく。そんな茜の背中を見ると、
普通の年頃の女の子にしか見えない。

忍者なんだから、忍術とかで洗ったりはしないのかな？
水遁とか分身の術とかでさ。

「なあ、茜」

「何ですか？」

「茜ってどんな忍術が使えるんだ？」

「忍術ですか？」

洗っている手を止め小首を傾げる茜。

「マンガとかで出てくる分身の術とかって使えるのか？」

「使えますけど——えいっ！」

BOMB!

「な!？」

爆音と共に白煙が立ち上ったかと思うと、茜の姿が5人に増えた。近くに佇む茜の身体へと手を伸ばしてみる。

「掴めない？」

「残像を用いた分身の術ですからね」

目を凝らせて見れば僅かにぶれているのが解る。

「よっと」

周りの分身が消え、流し台の前の一人だけが残った。

「他にも、幻術を用いた分身の術や、気配だけを分離させる分身の術などもありますよ」

「ふーん。あつ、質量を伴った分身の術とかはできないのか？ マンガとかでたまに使ってる忍者がいるじゃないか」

「質量ですか……使えないことも無いですけど。かなり疲れるんですよ。私の体力じゃ分身1体を3分ほど維持するのがやっとなんですよ」

茜の体力で3分って……そんなに消耗が激しい術なのか。

分身に皿洗いさせれば早く済むんじゃないかと思ったのは秘密にしておいた方が良さそうだな。

「それに、私の場合は双子の董がいますので、普通の分身の術と双子の存在を組み合わせた方が相手の攪乱に使えるんですよ」

確かに、残像だけの存在と肉体を持った存在が混ざっていれば、

敵は戦いにくいかな。

「そう言えば、いずみさん」

「ん？」

「そのジャージ、いつまで着てるんですか？」

「そ、それはその……奈月達に渡された服よりもこっちの方が落ちて着くから、せめて風呂に入るまではこの格好でいようかなって」

女女した服よりも、体操服とジャージの方が断然ましだ。

スカートのヒラヒラ感も無く落ち着くし。

どうして部屋着として始めからジャージを着ようと考えなかったんだか。今考えると、不思議でしようがない。

「でも、奈月先輩に何か言われませんか？」

「平気平気。今日は奈月の好きな番組をやってるから、うちには来ないんだよ」

パタパタと手を振って気軽に答える。

奈月達さえ来なければ、着替えるなんてことは言われないからな。

あー、やっぱズボンは落ち着く。

普段穿いているミニボトムは、気分的にヒラヒラのスカートよりはマシだから穿いてるんだけど……トランクスよりも丈は短いし、ピッタリとしているから気になるんだよな。

テーブルから離れて、隣のリビングのソファに寝転がる。

「はぁ、極楽極楽」

「いずみさん、食べてすぐ寝ると牛になりますよ？」
洗い物を終えた茜が窘めてきた。

「茜、お前さんは田舎のお婆ちゃんかよ……」

「ですが、書物の方は調べなくて良いんですか？」

書物か……今日借りてきたのはあの理解不能の文字っぽいもので書かれた本だったな。

ハッキリ言ってあれを読み解けるとは思ってもいない。
ただ、酷く気になったから借りてきたただけなんだよな。

「さすがにあり得ない現象に心身共に疲れてきたからな、少しくらいは頭を休ませないとさ」

「そう言われるのでしたら……私は続きをやってきますね」

「あっ、待った」

リビングから出ていこうとする茜を呼び止める。

「茜も今日は休みだ」

「え？」

「茜にも無理をさせたからな。それに溺れて死にかけてるんだしさ、今日ぐらいはゆっくりするのも有りだろ」

「で、ですが……」

「茜に倒れられるとこっちが困るからな」

「え？」

顔を真っ赤にして俯く茜。私、何か変なこと言ったかな？

気まずい空気が部屋を覆った。

「そ、そう言えば、さっきの話の続きになるんだけど」
「はい？」

私の話題転換に返事をしつつ、一人掛けのソファに腰掛ける茜。

「忍術には他には何かあるのか？」

「忍術と言われましても、マンガや映画に出てくるような忍術ですと分身の術や転化の術辺りの秘術や禁術ですね」

「秘術に禁術？」

「威力が凄すぎてあまり大ぴらに使うわけにもいかない術や、外道が使う術などですね」

「外道だって？」

「今では使える者はいませんが、死人を甦らせたりする術とかもあったらしいですよ。今じゃ、術を記した書や巻物ごと封印されてるんですけど」

「死人をね……死者蘇生って封印するほどの術なのか？」

「正確には死体を動かす術ですので、死体の劣化状況では腐敗したモノを動かしたり、骨だけの存在を動かしたりすることになるんです」

……………。

それって、ブードウのゾンビよりも質が悪そうだな。

「茜自身が使える術で変わったモノは？」

「私ですか……あっ、変化の術なんかも使えます」

少し考えて口にしたのは、分身の術と同じくらいメジャーな忍術

だった。

「変化の術なんて使えるんだ。凄いな」

「そ、そんなこと無いですよ」

全身真っ赤にして照れだす茜。そこまで照れられると、是非とも見せて欲しいな。

「何かに変化してみてくれないか？」

「いいですけど、この術も力の消費が激しいので、一回だけですよ」

「うん、うん」

一回でも見せて貰えるなら問題ない。

「それでは、何に化けましょうか？」

「人以外のモノにも変化できる？」

「外見がイメージできるモノでしたら、架空の存在でもなれますけど」

「じゃあ、無難に猫でも」

「猫ですね——いきます」

胸の前で素早く手を組む茜。

「ハッ！」

呼吸を大きく発すると、茜の姿は……

「え？」

「あら？ 久々だから失敗したみたいですね」

変わっていないことに苦笑する茜んだけど……彼女の頭上では獣の耳っぽいモノがピクピクと動いている。

「猫耳」

「え？ あっ！？」

私が指さす先に気付いたのか頭を押さえて、猫耳の存在を自覚する。

「み、見ないで下さい——解！」

一言叫ぶと、茜の頭から猫耳が消えた。

あゝあ、勿体ない。

「コッホン。もう一度やり直します——ハッ！」

同じように印を組むと、今度は茜の姿が完全に消えた。

「にゃあゝ」

猫の鳴き声が足下から聞こえてきた。

「茜？」

そこには黒い猫が一匹いる。

「凄いな……本当に猫になってるよ」

毛並みも猫そのものだし、抱きかかえてみれば重さも見た目通りだ。

足には肉球があるし、顎の下の撫でてみれば気持ちよさげに目を瞑る。

「にゃふう」

尻尾なんてくねくねしてるし……完全に猫だよな？

忍術ってそこまで凄いのか！？

「お腹には乳首があるし、チンチンは無いからメスカ」

抱きかかえたまま色々と確かめる。

「ニャアッ！」

「え!？」

いきなり重たくなったかとも思うと、猫は茜の姿に戻っていた。
その顔が何故か赤い。

「い、いずみさん! 何してくれるんですか!!」

「え? 何かまずいことでもしたのか？」

「まずいものも、色々と弄りすぎです! お尻を触ったり、乳首を突っついてみたり……恥ずかしいじゃないですか!」

あつ、ついつい猫のつもりで対応していたんだけど、茜だったんだよな。

女性相手にあれはやり過ぎか。

「ごめん。あまりに見事な猫だったので、調子に乗りすぎた」

「謝ってくれたから許しますけど……いずみさんが出雲君のままだったら、今頃顔中引っ掻き傷でしたよ」

うわぁ……危なかった。

「それにしても本当に変わるんだな。転化の術じゃ髪の毛の長さとかまで気にしていたのに、変化の術は違うのか？」

「詳しい原理は私も理解してませんけど、変化の術は肉体及び纏ってる服を特殊な状態——気体の様なモノに変換し、変化対象のサイズに必要な部分だけを個体化——肉体にするんです。サイズが大きければ大きいほど希薄な身体になりますけど……普通の人には見分けは付きませんね。ちなみにさきほど言った質量のある分身の術も

同じ様なものです」

「へえー。そこまでいくと、忍術も魔法だな」

一般人である私からしてみれば、まさに奇跡の技だ。

「魔法……ですか。案外、似たようなものかも知れませんね」
私の推測に、クスッと微笑む茜だった。

「しっかし完全に猫だったよな。抱き心地も良かったし……お腹の部分もちゃんと雌猫だっ——」

ゾクッ——

茜から発せられた寒気に、言葉を飲む。

「あっ、いや、別に。悪気があった訳じゃなくて……」

「もう。許すのは今回だけですよ」

ぷくつと可愛らしく頬を膨らませる茜。殺気は完全に霧散していた。

「あっ、そろそろお風呂の方を用意してきますね」

壁の時計を見ては茜はリビングを出ていった。

あれだけ見事に別の存在に化けられるなら、男の姿に変化することも出来るんだよな。

最悪、元に戻る方法が無ければ、変化の術を教えて貰おうかな……

あっ、でも、体力がいるとか言っていたっけ。

さすがに私には無理なのかな。

「あーあ、早く男に戻りた——!？」

あれ？

何だよ、これ……

激しいまでの違和感を身体全体から感じだす。

ビクン――

微かな衣擦れに身体が過激に反応する。

どう言うことだよ……これ？

僅かな刺激に感じ、身体が火照っていくのが解る。

……したい。

「え!？」

無意識に自分を慰めようとして伸びていた手に気付き、慌てて止める。

リビングでオナニーを始めたら、茜に見つかる。

理性を総動員して、突然沸き上がってきた性欲を押さえる。

少しでも気を抜けば手は勝手に動き、胸や股間へと伸びかねない。

「部屋で……」

身体を襲う快樂の波に、理性が従い掛ける。

って、ダメだ。

こんな所でやっていたら、いつ茜が風呂掃除を終えて戻って来るか解らないんだから。

せめて、音とかを誤魔化せる場所じゃないとな。

ソファアーの上に俯せで寝転がり、クッションに顔を押し付けながら考える。

トイレでもやばいし……他の部屋でも同じだよな。

開かずの間は呪われそうだし……

カチャ――

「いずみさん、お風呂の準備が終わりましたから、お先にどうぞ」

「風呂！」

ガバツと起きあがる。

「どうかしましたか？」

「あっ、いや。風呂に入りたいと思っていたんだよ」

そうだよ、風呂だ。風呂でなら茜にも気付かれないで出来る。

「先に入らせて貰うな」

「それは良いですけど……」

何か言いたげな茜を残し、私はさっさと脱衣所へと向かった。

「一体全体、このモヤモヤは何なんだよ……」

服を脱ぐだけで身体が熱く反応を示してくれる。

女ってこうも感じやすい生き物なのか？

それとも、私——俺が元々男だからなのか？ 男の精神状態で身体だけが女になったから、女の感覚に対応し切れてないためか？ 服を脱ぎながらも色々と考えてみるが原因が解らない。

「チッ、さっさと風呂にでも入っておさめるか」
裸になると、隣の浴室へと向かった。

ガッチャン。

カギを閉め、湯船の蓋を開ける。

ザッバーン——

「あう……」

かけ湯しただけで肌が感じる。

敏感すぎるぞ……

この燦りを先に散らさないと風呂は無理か。
キョロキョロと辺りを見渡す。カギは閉めてるし、誰もいるわけないんだけどつい気にしてしまう。

人の気配が完全に無いのを確かめ、股間へとそつと指先を伸ばす。

ガチャ——

！？

脱衣所の扉を開ける音に、身が固また。

「あ、あかね？」

背中を向けたまま背後の扉へと呼び掛ける。努めて冷静にしているつもりが、口から出る声音は震えていた。

「はい」

「どうしたんだよ、一体？ 洗濯機にでも用か？」

「いえ、いずみさんと一緒にお風呂に入ろうかと思ひまして」

「え！？」

戸惑い、思わず振り返ると、立ちこめる湯気の向こうに裸になって入ってくる茜がいた。

「ご、ごめん！」

慌てて前を向く。

って、ちよつと待て！

「か、カギは？」

風呂に入った時にカギは閉めておいたはずだ。

「カギですか？ これくらいのカギ、忍びにとっては合って無いようなものですよ」

カチャン。

扉を閉めて、私の背後に立つ茜。

「こちらを見て下さいよ、いずみさん」

「なっ！？ み、見えるはず無いだろ！ お前だって女なんだから」

「あら、見えるはずですよ。だって、プールの時の更衣室ではずっと見ていたんですから」

「あぐう……」

返す言葉を失う。

「それとも、股間に忍ばせている手が離せませんか？」

ドッキン——

見透かされた一言に、心臓が大きく跳ね上がった。

「あ、あか……ね？」

「クスッ——少し、苛めすぎましたね」

零れた笑いが聞こえた。

「身体の高ぶりを静めるのを手伝いに来たんですよ」

「え？ それって、もしかしてこの状態のことが解っているの——
あう」

緊張で忘れかけていた火照りが戻ってくる。

「それは転化の術による高ぶりです」

「転化の術の？」

「転化の術で性を転換させた者は、転換後しばらくして体中の性感帯が高ぶるんです」

「高ぶるだって!？」

恐る恐る振り返れば、そこには自分と同じように全身真っ裸の茜が惜しげもなく胸を晒していた。

ゴクッ――

茜の乳房に向く視線が外せない。

自分と比べると若干小さいけど、身体が引き締まっているためか形は問題ない。

揉みたい。

女としての身体の高ぶりに、僅かに残っている男の本性が呼応し始めていた。

あのプリッとした乳首をしゃぶりたい。

「だああ！」

ゴツッン！

倒錯的な想いを打ち消すように壁に頭をぶつける。

「いたったった……」

頭に走った痛みで、辛うじて正気に戻った。

「いずみさん！？」

「あ、いや、ちょっとな。それより、続きを」

「はい。それは単純に性を転換させた後遺症なのか、それとも術を組み上げた者が仕込んだものなのかは誰にも解りません」

「仕込むって？ 意図的にかよ？」

「一説には、転換後スムーズに性行為を行えるようにするためのものだと言われてます。その間、転換した男は絶倫とも言えるようになり、里の全ての女性と交じることが可能だとも」

「絶倫——って」

頭から血の気が引く。

男で絶倫なら、女であるこの身体は……

「推測になりますが、今のいずみさんは淫乱になられているかと」
伏し目がちに視線をずらす茜。

微妙な沈黙が浴室を包み込む。

「だったら……」

先に沈黙を破ったのは私だった。

「だったら、ひっそりとしておいてくれればいいじゃないか」
そうすれば、オナニーでもして身体の火照りを静められるのに。

「それでも構いませんけど、いずみさん独りじゃ、高ぶりが消えるのに一晩中掛かりますよ」

「そんなに凄いのか!？」

「はい。ですので、私が一緒になって発散させてあげますよ」

さわっ。

茜に掴まれた指先から刺激が走ってきた。

「で、でもさ……」

「それに大丈夫。恥ずかしがることなんてありませんよ」

「どうして？」

「だって、今起こってる出来事は眠れば忘れますから」

あれ？

茜の瞳が赤色に見える。

途端、頭の中がぼおーっとし始める。

「これって、もしかして忍術？」

まるで思考にプロテクトを施されてるみたいだ。

物事が深く考えられない。

「はい。ここで私と肌を重ねた恥ずかしい記憶は、眠れば忘れるように暗示を掛けておきます。だから、心の底から女を感じて下さいね、いずみさん」

「ひゃん！」

ドッボン――

腕を掴まれ、私の身体は茜と共に湯船に落とされていった。

・ ・ ・

「あれ？」

次に気がついた時には、私の身体は隅々まで茜の手によって洗われていた。

「私はいったい……」

背後から身体を洗ってくれる茜に身を委ねながら考えるも、風呂に入ってから記憶が曖昧でハッキリしない。

何か言い合って、茜との入浴を許可した覚えはあるが、今の今まで何をしていたのか思いだせない。

「あら？ 術の掛かりが浅かったようですね」

「茜？」

振り返ると、茜の双眸と視線ががち合った。

「これは夢」

「夢……」

赤く輝く茜の瞳に見据えられ、身体が固まる。

「そう。今宵起こった出来事は全て夢。起きても思い出せない夢。夢よりも深き夢」

「夢よりも深き夢……だから思い出せない夢」

茜の言葉が心の奥に染み込んでいく。

「さあ、最後にお湯を浴びて上がりましょうか、いずみさん」

「アア、ソウダネ、アカネ」

アカネニイワレルママニ、ワタシハカラダニノコルボディソープ
ノアワヲ、ナガシオトシテイタ。

【OFF—SIDE】

生者としての光を瞳から無くしたまま自室へと戻るいずみ。
長湯でのぼせたのか、それとも……

鼻の奥から一滴の鼻血が伝い出てくる。
それに気付くことなく、

カチャ――

自室の扉を開けると、真っ直ぐにベッドへと向かういずみ。

ガタッ！

ガラスのテーブルに足が上に載っていた本が落ちる。
図書室で借りてきた本だ。

ポタッ――

垂れた鼻血が本の表紙へと落ちる。
気付くことなくベットへと入るいずみは、そのまま寝息を立てて
深い眠りへと誘われた。

ただ、
薄暗い部屋の中で怪しく表紙を光らせている本に気付かないまま
に……

12話（後書き）

うーん、かなりのエロ描写を削ったので、色々とバランスが（汗

13話

トントントン――

微睡みの中、ノックの音で目が覚めた。

「いずみさん、朝ですよ。起きてください」

カチャ――

ん……茜か。

「いずみさん、学校遅れますよ？」

「あゝ、パス」

枕に顔を埋めながら応える。

「ずる休みはダメですよ」

咎める茜に対し、私は毛布の間から腕を出し壁際を指さした。そこには昨日の水泳の授業後から着ていたジャージが放置してある。

「制服クリーニングに出したままだから、着てくのがないんだよ」
さすがにまだクリーニング屋は開いていないはずだ。

「それに、今日は終業式だから休んでも問題ないだろ。だから寝かせてくれよ。この身体になってから、異様に朝は眠いんだよ」

もそもそと毛布にまるかのように寝返りを打つ。

もっとも、眠たい理由の半分は、昨日借りてきた本を読めないくせして夜遅くまで眺めていたのが原因だ。

解説不能なら読むのを止めれば良いんだけど、何故か本からは目が離せなかった。

何かがある。

あの本には何かがある。そう思えてならないのだ。

「解りました。美奈先生には私から言っておきますので、おやすみなさい」

ガチャ――

茜が立ち去っていく音を耳にしながら、私の意識は夢路へと旅立っていった。

「ごちそうさん」

綺麗に平らげた食器の前で手を併せる。

壁の時計は既に10時を回っていた。

「久しぶりによく寝たって感じがするな」

湯飲みのお茶を飲み終えると、汚れた食器を持って流しへと向かう。水を出し皿を洗い出す、その手が止まった。

「エプロンか……」

見つめる先は壁に掛けられたエプロン。

それは茜が家のどこからか見つけたしてきた可愛らしいフリルの付いた少女嗜好のエプロンだった。

ゴクッ――

喉の渴きを誤魔化すように生唾を飲み込む。

誰もいるはずのない屋内で、右見て左見て、私は寝間着代わりに着ていたブカブカのTシャツを脱ぎ捨てた。

プルンと形の良い胸が顕わになる。

「うーん」

少しだけ躊躇うが、意を決してショーツも脱ぐ。

一糸纏わぬ姿になると、エプロンを手に取り素肌の上から身に着けた。

世に言う伝説の裸エプロンってヤツだ。

「うつ」

食器棚のガラスに映る自分の姿を見ては、強烈な背徳感に全身を赤らめる。

「これは凄いな」

鼻の奥にツーンとした刺激を感じつつも、洗い物を再開する。

順調に洗っていく食器だったが、いつしか私の視線は視界の下の方で見え隠れする二つの膨らみに注がれていた。

静寂なる空間には蛇口から勢いよく流れる水の音。そして高鳴る心音が鳴り響いていた。

濡れたままの手でそっと触れる胸。染み込む水の冷たさが胸を刺激する。

揉みたい。

思うがままに揉みたい。

幾度となく訪れた、生来の男ならあり得るはずのない倒錯的な想いが理性を犯し始める。

少しでも強く握れば柔らかく凹む胸の膨らみ。水に濡れ透けたその先に見えるピンクの突起。胸に手を添えたまま伸ばした人差し指を曲げ、それを突っつこうとした――

ピンポーン♪

鳴り響いたインターホンを丸まった背筋が跳ね上がる。

「はあ、はあ、はあ………またやろうとしていたのか、『俺』は」

先ほど以上に乱れる心拍を整えるように荒々しくも呼吸を繰り返す。

ピンポーン、ピンポーン♪

その間もインターホンは鳴り響く。

出る、今出るから――って、今の私って!?

胸に張り付いた濡れた布地の感触と、エプロンしか着てないこともあって感じる空気の感触に自分の姿を思いだした。

こんな格好で出たら、危ない人だ。

玄関に向かうのを止め、備え付けのセキュリティの受話器を取る。

「はい——って茜？」

モニターに映し出されたのは、学校に行ったはずの茜だった。

『あつ、八坂君。私は茜じゃなくて堇ですよ』

「ああ、堇か」

『転化の術の効果をうち消す方法が見つかりました』

「何だって！？ 今開けるから待っていてく——すまん。数分待っていてくれ」

慌てて通話を切ると、脱ぎ捨てたショーツとTシャツを拾い上げ部屋へと駆け込む。

手早く下着を身に着け、服を着込む。鏡の前で軽く乱れを微調整してから玄関へと向かった。

さすがに髪の毛までまとめるゆとりは無く、階段を駆け下りれば髪の毛が盛大に靡いていた。

ガチャ——

「悪かったな。着替え前だったんだ」

「あつ、いえ。問題ないですよ」

堇を家に上げ、リビングへと案内する。

初見の時の忍び装束とは違い、今の堇の姿はいたって普通のTシャツにジーンズ姿だった。

こうやってしている普通の女の子で、忍者には見えないな。

「よく、私ที่บ้านにいと解ったな？」

「朝に一度茜の携帯に電話したんです。それで、八坂君が休んでい

ると教えて貰ったんです」

「そうか」

「はい。それで直接戻れる方法が見つかったことを教えた方が良かったと思い、馳せ参じました」

「そうだったんだ。それで、戻す方法が解ったんなら、今すぐやってくれるか？」

勢い勇んで頼み込む私に対し、董は首を横に振った。

「それが特殊な術のため私と茜だけでは力が足りませんので、月の靈力を借ります」

「月の靈力？」

まるで、忍術と言うより妖術だな。

「そのため、夜でないとこの術は使えないんですよ」

「夜か――」

倒れるようにソファアの背もたれに埋もれる。

窓の向こうに見える空では、陽が南天に向かっていた。

「それで、術のために色々と準備をしておきたいのですが、お庭の方をお借りして良いですか？」

良いも何も断ったら戻れないんだから、反対する理由なんて無かった。

「ああ、好きに使ってくれ」

「ではさっそく方陣を書き始めますね」

「あつ、ちょっと待ってくれ」

董を呼び止める。

「何です？」

「セキュリティに堇のパターンも入れておこうと思ってな」
セキュリティシステムに堇の虹彩パターンを登録する。

その前に、試しに茜の登録で反応するか試してみたけど、予想通り別人と判別された。

「これで、次入ってくる時はインターホンの隣にあるカメラを覗き込んで、0402って入力してくれれば、たぶん鍵は開くから」

「はい、解りました」

頷くと、堇は作業に移ると言い残し、荷物を持って出ていった。

「戻るんだ♪」

心が弾む。

「夜に戻るのなら、女としていられるのは今日中だけ——あつ、流し！」

浮かれていた私の耳は閉め忘れていた水音を捉えた。

キッチンに戻り水道を止める。

その際、食器棚に映り込む自分の姿を見ては、先ほどの行為が甦り身体の芯が熱くなる。

「女……女なんだよな、今の俺——私は。せっかくだから残り時間ぐらいは『女』を楽しんでもいいよな」

楽しげに微笑むと、残り時間の算段を始める。

夜には術を行うから、楽しめるのは昼日中の間だけだ。少しも無駄には出来ない。

って、昼と言えば、隼人のヤツが付き合ってくれって言っていた

な。

隼人との約束を思い出した。

「付き合い、付き合い——ね。何を私に求めるのかは知らないけど、付き合いってやるんだから、私にも付き合いって貰うぞ、隼人」

ガラスに映る私の笑みは、悪戯っぽくもニヤリとした邪笑に変わっていた。

お袋の化粧台の前で一点を凝視する。

「ええい！ 何を躊躇しているんだ、いずみ」

思いつ切り叫んでは奮起する。

「隼人のヤツをからかうなら徹底しないな」

覚悟を決めては掴んでいるソレ——赤いルーージュを口先へと持っていく。

ドクン、ドクン、ドクン——

逸る心拍数。女物の服を着込んだ時と似たような緊張がそこにはあった。

「むうー」

唇を突き立て、慣れない手付きでなぞる。

って、完璧に口先女だな。

予想通りと言うか、何と言うか……

「難しいな」

口紅を拭い落とし、再度挑戦。
悪戦苦闘の末なんとか綺麗に塗れた。

ドキンッ——

鏡に映った濡れた赤い唇の『女』の顔に心臓が高鳴った。乱れる
心音は力強く脈打ち、耳の奥をジンジンとさせる。

「こ、これが……私なのか？」

零れ出た言葉は戸惑い。そして驚きだ。

「化粧をすれば女は化けると言うけど……」

口紅一つで雰囲気印象が一変した。

ナルシストのつもりは無いんだけど、今までも美人だと思っていた。
た。

でも、真相を知る者——それこそ当事者である私にとって、どれ
だけ女らしい恰好をしようとも何処か男としての『八坂出雲』を思
い起こさせてくれたはずの顔が、どう見ても女でしかないのだ。

すつくと立ち上がり、化粧台の隣の姿見に全身を映し出す。

サイズが一回り小さいようにさえ思える黒のタンクトップは胸の
膨らみを強調し、短い丈の為に晒された腰は妖艶にくびれ、同じ黒
色のミニボトムから伸びる色白の脚はすらりと長い。

元の体とは似ても似つかぬ造りをした身体——そんな借り物に思
えていた女の肢体が、顔に化粧を施しただけで心に溶け込んできた。

「女は着飾ることを楽しむ——か」

綺麗になった自分の姿に心が躍った。

楽しい。

正直言ってこいつは楽しかった。

もっと着飾ってみたい。そんな飢えに似た欲望から現実に戻したのは、12時を知らせる時計の音だった。

「おっと、時間か」

少し名残惜しそうに思いつつも黒のノースリーブのパーカーを羽織り、ベットのの上に置いてあったデイパックとキャップ―やはり黒色のそれらを手に両親の寝室を後にする。

途中、髪の毛は束ねることなく自然に流し帽子を被り、黒のスニ―カーを履き玄関を出る。

「堇」

庭の方にいるはずの堇に声を掛けた。

「はい、八坂く―？　もしかして、八坂君のお姉さんですか？」
地面に怪しげな図形を描いていた堇が、顔を上げるとそんなことを聞いてきた。

「私だ、私。八坂いずみ」

「いずみさんですか。初めまして、碓氷堇です」

「違う違う！」

頓狂な返しに、慌てて叫ぶ。

「女の時はいずみと名乗っているけど、出雲だ、八坂出雲」
改名の件を伝えてないことを思い出し、慌てて訂正する。

「え？ 八坂君！？ 化粧したんですね、間違えて見えましたよ。すっごい美人ですよ」

「あ、ありがとう」

面と向かって美人と言われると、照れるな。

「着飾って、どうかしたんですか？」

「用事を思いだしたんで私は出掛けることを告げに来たんだ」

「あっ、そうなんですか」

「もう少ししたら茜が帰ってくるから、昼飯は家にあるモノを食べても良いし、好きにしてくれ」

「わかりました」

「じゃあ、行ってくるな」

「行っってらっしゃい」

腕の時計で時刻を確かめながら歩いていく。まだ待ち合わせ時刻には1時間ほど早い、せっかくの女としての残り時間だ。それを街で楽しもうと考える。

「ふふん、ふりん、ふん♪」

手を後ろで組み、鼻歌交じりに足取り軽くショッピング街を散策する。

颯爽とした私の姿に、男女問わず行き交う人達の注目していた。そんな視線も何処吹く風で、今までなら感じていた羞恥も無く、見られることに心地よさすら覚えていた。

「今年の流行か……」

ウィンドウに飾られた衣装を見つけては、今の自分が着込んだ姿

を連想し、悦に浸る。

幸い遅めの朝食のため腹は空いておらず、待ち合わせの時刻まで十分にウィンドウショッピングを楽しめた。

「さすがにこうも陽射しが強いと喉が乾くな」

術の影響か不思議と汗はかいていないが、夏の暑気は感じていた。自販機で缶ジュースを買うと駅前広場の木陰のベンチに腰掛ける。封を切った缶を傾ければ、冷えた液体が流れ込んでくる。

「ふう、美味しい」

半分ほどを一気に飲むと、一息付いた。

「ねえ、彼女」

「暇なら、俺達と遊ばない？」

若い男が二人、休んでいる私の元に近付いてきた。

一瞬、それが自分に向けられたモノだと理解できず、きょとんとしていると、男達は馴れ馴れしくベンチの隣りに腰掛けてくる。

「無茶苦茶美人だね。彼氏とかいる？」

「別にいない……」

あまりの出来事に思考が麻痺し逃げ出すことも出来ず、ただただ聞かれるままに応えていく。

「じゃあさ、俺達と遊ばない？ 良いトコ知ってんだよね」

「いい」

眩くような私の否定。

「そんなつれないこと言わないでさ、一緒に遊ぼうよ」

「きゃあっ」

いきなり腕を引っ張られ、その拍子で持っていた缶が手から滑り

落ちた。

バツシャ——

「あつ、俺のズボン」

落ちた缶から零れた中身は男の一人のズボンの裾を少しだけ濡らした。

「どうしてくれるんだよ、これ。20万もするビンテージ物なんだからぜ？」

「そ、そんなこと言われても……困る」

萎縮した私の心はそれだけ答えるのがやっとだった。

「悪いと思っているなら付き合ってくれよな。俺達が楽しめたら許してやるからさ」

その卑下たる笑みに、恐怖で私の身が竦む。

男だから。男だからこそ、男達の狙いがよく解る。

女だから。女だからこそ、己の身に訪れる恐怖がよく解る。

「い、いやだ……」

抵抗するが力の差は歴然。勝てるはずもなく引つ張られる。

助けを求めるように周りを見るが、誰も彼も我が身に被害が及ばないようにとそそくさと立ち去っていく。

「大丈夫さ。痛くはしないから」

「あまりの快感で悶え苦しむかも知れないけど——」

ガッツン！

「痛！」

男の一人に何かが当たった。

カラン、カラン、カラン――

「空き缶？」

音を発てて足下で転がるのは、さっきまで私が飲んでいた缶だった。

「おっと、すまない。空き缶を捨てたまま立ち去ろうとしたので返しただけだよ」

隼人！？

「なんだ、てめえは？」

「何だと言われても、その娘の知り合いだよ」

助けに現れたのは、私服姿の隼人だった。

見知った顔に安堵し、少しだけ力が抜ける。

「一連の状況を見ていたけど、難癖吹っ掛けて無理矢理付き合わせようとするのはダメだね」

涼しげに言い放つ隼人。

見ていたんだったら、もう少し早く来てくれよな……

でも、この登場の仕方は、男としてはくやしいが、女としては頼もしく思える。

「うっさいな、おまえ！」

迫ってきた男の一人に慌てることなく隼人は動いた。

危ない！

思わず目を閉じるが、何の打撃音も聞こえない。

恐る恐る瞼を開ければ、男の鼻先に伸ばされた隼人の足が見えた。

「闘う気なら本気でやるよ？」

誘う隼人に対し、寸止めの蹴りは男の虚勢を削いでいた。

「ちっ、今日の所は退いてやる！」

敵わないと思ったのか、捨て台詞を吐いて立ち去っていく二人。

「空き缶はちゃんとゴミ箱に捨てていきなよ」

そう言うと、隼人は落ちている空き缶を蹴り上げた。放物線を描いて男達に向かって飛んでいく空き缶。男の頭に当たって跳ね、その脇にあったゴミ箱にそれは落ちた。

「あ、ありがとう」

「いや、礼は不要だけど――あれ？」

隼人が不思議そうに眉を顰めた。

何だ？

「失礼。髪の長さで知り合いかと思ったんだけど、人違いだったみたいだったようだ」

素直に頭を下げる隼人。

どうも私の正体に気付いていないようだけど……本当に解っていないのか？

前に、『氣』で見分けを付けてるって言っていたし……試してみるか。

私の中で悪戯心がむくりと沸き上がる。

「あ、あの。よろしければ、お礼にお昼でもどうですか？」

「ごめん。待ち合わせをしてるんだ」

「待ち合わせですか？ それは何時に？」

「1時半だけ」

広場の時計を見れば、1時になったばかりだ。

「まだ30分ありますね。アイスクリームぐらいなら食べられますよね」

強引に隼人の腕を取ると、駅前のアイスクリーム屋へと足を向ける。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。僕は別に――」

「私の誘いは嫌なんですか？」

上目遣いにじっと見つめる。

微妙に目を潤ませるのがミソだ。

「少しだけだよ」

「はい♪」

項垂れるように折れた隼人に、私は楽しみに返事を弾ませ、心の内でほくそ笑む。

アイスクリーム屋で買ってきたアイスをペロペロと舐める。

「強いんですね。格闘技とか習っているんですか？」

「一応、実家に伝わる古武術を嗜んでるだけだよ」

軽く応え、時計を気にする隼人。どうにも落ち着かない様子だ。

フッフッフ……

恋人がいるとは言え、遠距離恋愛だ。こう言うシチュエーションには慣れていないんだろうな。

対する私も恋人こそいないけど、この手の事柄には奈月や美奈さんに鍛えられている――否、奢らされて慣れていた。

その割には恋人が出来ないんだよね……

「私と間違えた方がいたみたいですけど、恋人なんですか？」

「え？ ああ、あいつは――友人かな？ 今日の買い物に付き合っ
て貰う約束をしていたんだよ」

「私に似てるんですか？」

「外見はよく似てると思うよ。ただ、雰囲気が違うかな。あいつは
明らかに全てを包み込むって感じで、キミは優雅で楽しげな感じを
受けるよ」

「優雅で楽しげ――クスッ」

小さく零す笑み。

「お前でも見誤ることがあるんだな、隼人」
いきなり口調を変えタネを明かす。

「え？」

珍しく間の抜けた顔をする隼人。

「ま、まさか!？」

見る間に、ヤツの顔が驚愕に歪んでいく。

「私だ、私。八坂いずみだ」

「八坂だって!？」

「ばか。静かにしろ。周りの注目を集めてるぞ」

「す、すまない」

慌てて何でもないように声のトーンを抑える隼人。

「だけど、全然気が違うじゃないか？ 本当に八坂なのか？」

「お前の言う気の違いは私には解らないけど、雰囲気の違いは説明できるかな」

そう前置きし、元に戻る方法が見つかったことを告げる。

「戻るのか？ 良かったじゃないか」

「ああ。それで、精神的にゆとりができたからな。残り少ない女の時間を楽しむことにしたんだ。そう言うことで、お前の買い物には女として付き合うことにしたから」

一度言葉を区切る。

「楽しませてね、隼人♪」

艶っぽく言ってみせれば、隼人は頬を引きつらせ冷や汗を流していた。

「ねえ、プレゼントを買いに行くって言っていたわよね？」

「ああ、そのつもりだけど……これなら、一人で来た方が良かったよ」

語尾に続けられた疲れた言葉は聞こえないことにしておく。

「それで、どんなのを買うの？」

「考えているのは小物か服の予定だけど——頼むからその口調は止めてくれないか」

心底嫌なのか苦味を帯びた顔で言ってくる。

「いや。最後ぐらい楽しまないと損じゃない」

今の私には取り合う気は無かった。

逆に女を強調する様に、隼人の腕を取り垂れ掛かるように歩く。

「お、おい、八坂！ 腕を組むんじゃない！！」

「ええ、いいじゃない。この方が恋人っぽく見えて、変な人にも声掛けられないで済むしね」

無理矢理解こうとすれば、どんどん身体を押し付けてやる。

我ながら意地悪だなと思うけど、困る隼人を見るのが楽しかった。

「む、胸を押し付けなくてくれよ！」

「なに恥ずかしがってるのよ。この間、学校で堂々と私の胸を揉みだくせに」

「あれは言葉の綾だよ！」

白昼の往来でしれっと言いつ切る私に対し慌てて弁解する隼人。

二人の会話に通行人達が足を止め注目してくる。周りからしてみれば、恋人がいちゃついている様に見えるんだろうな。

そんな殺気を含んでいそうな視線に耐え切れなくなったのか、隼人は私の腕を取ると脱兎の如くステーションビルの百貨店へと逃げ込んだ。

「僕が悪かったから、あまり変なことをしないでくれよ」

「解ったわよ」

クスクス笑いながらも腕を放す。

若干、名残惜しかったけど……

「それでまずはどこから覗くの？」

「言葉遣いは戻さないんだな」

力尽きたような隼人の呟き。

戻す気なんてないわよ。

今は、女を楽しむと決めたんだから。
そう心の中で応えてみせる。

13話（後書き）

こっちはそれなりに読まれているのに、P i x i v はあんまし読まれていないよな（悩

まあ、あっちはイラストSNSなんだから、仕方ないかな。

14話

「まずはファンシーショップからかな」

売り場のある階へ行くためエレベーターへと向かう。終業式の日と言うこともあってかエレベーターの前には学生の人集りができていた。

降りる客を待つて乗り込む一行。真ん中の方へと行こうとする私の腕を取って壁際に押し付けてきた。

「隼人？」

「仕方ないだろ、今のお前は女の子なんだから」
人々の重圧から守るように立ち塞がる隼人。

「あ、ありがとう」

恐縮そうに礼を述べる心が、くすぐったかった。

「なあ、八坂。女の子は何を送られると喜ぶと思う？」

「女の子か……ええっと――」

視線を感じて言葉を止める。

辺りを探れば、客の中に北嶺学園の女子が数人こちらを見てはひそひそ話をしてた。

「私に聞かないでよ。私は日本文化には疎いんだから」
咄嗟に、帰国子女の設定を用いて答える。

下手に普通に答えたりして、後でどうなるか解ったものじゃないからな。

「じゃあ、キミが欲しいモノはあるかい？」

「私？」

キョトンと返す。

いきなり言われても返事に困る。

ぱっと見、置物系は『八坂出雲』の部屋に飾っても浮くだけで、手にした男の自分を想像するのも難しい。

辺りを探す私の視線はネックレスの置いてあるコーナーで止まった。

紅を口に付けたことで着飾ることに興味がでてきた。

「しいて気になるのは、あの辺りかな」

「ネックレスに指輪か……それなら」

いきなり手を取ってファンシーショップを出ていく隼人。

そのまま階段を使って一つ下の階へと向かった。

「宝石？」

やってきたのは中央展示場の一角に簡易で作られた小さな売り場だ。

先ほどのファンシーショップと大差ない雰囲気だが、並んでいる宝石はどれも本物っぽかった。

「この間来た時に見つけてさ。本格的な宝石店だと高いけど、ここなら僕でも買えそうだなって思ってたんだ」

貴金属店と比べれば、学生でも頑張れば買えそうなリーズナブルな値段が並んでいる。それでも先ほどのファンシーショップよりは高いし、中にはあり得ないまでの0が付いた石もあった。

並んでいるのは指輪やらネックレス以外にも、荒削りのままの寶石の原石や鉱石、古くから伝わっているような手作りのアミュレットなどがあった。

どちらかと言えば、装飾品よりも原石や鉱石の方が多いみたいだ。

「綺麗ね」

一つ手にとっては鏡の前で自分の首に掛けてみる。

「おいおい、楽しむ前に選ぶのを手伝ってくれよ」

「彼女へのプレゼントですか？」

どこかの民族衣装を彷彿とさせるローブ姿の若い女性が声を掛けてきた。

「あ、こいつは付き添いで、僕の恋人へのプレゼント選びにしどろもどろな隼人。その顔は真っ赤になっていた。」

「そうでしたか。てっきりお似合いのカップルだと思ったもので」
クスクスと微笑む売り子。

「それでどう言った方への贈り物ですか？」

「ええっと、僕たちと同じ年頃で……」

「それでしたら流行の――」

勧められるままにネックレスやペンダントを見ていく隼人。そんな親友を横目に、私は自分に似合いそうな装飾品を探していた。

「指輪とかどうですか？」

「瑠璃のサイズが解らないから無理ですよ」

「送る相手は瑠璃さんと仰られるのですか？」

「あ、はい」

「では、こちらのラピスラズリなどどうでしょうか？」

「ラピスラズリ？」

「宝石の名前ですわ。ラピスラズリ。日本名では瑠璃といいます」
その一言で、隼人のプレゼントは決まったようだ。

「じゃあ、それをお願いします」

「はい」

隼人が精算をしてる間も物色を続ける。そんな私の双眸が一つの宝石に止まった。

それは、雅やかに輝く宝石の奥にひっそりと置かれた不思議な光彩の石。

決して綺麗とは言えないが、何故か興味が離れない。

「あら、それはラピスフィロソフォルムですね」

私の視線に気付いたのか、売り子が声を掛けてきた。

「ラピスフィロソフォルム？ 聞いたこと無い名前だわ」

両親の職業柄と隣で少女向けの雑貨店を開く奈々さんのおかげで、石にはそれなりに詳しいつもりだけど、その名前は知らなかった。確か、フィロソフォルムは哲学者だっけ？

ラピスは石って意味だから、哲学者の石？
よく解らない和訳に余計混乱する。

「珍しい石ですよ。気になるのであれば、お安くしておきますから
どうですか？」

「え、でも……」

「今なら、こちらのペンダントに組み込みをサービスしますよ」
売り子が手にとって持ってきたのは、翼をあしらった銀細工のペ
ンダントだった。

「これをこうして——っと」

私が興味を持った石を摘み上げそれに組み込めば、一つの見事な
ペンダントが完成した。

「どうですか？」

「買います」

その見事な出来映えに、私は反射的にそう言っていた。

「でもいいのか？ そんなモノを買ったりして。今日には戻るんだ
よね？」

買い上げたペンダントを早速首に掛ける。

「二度と付けることが無いなら無駄遣いにならないか？」

値引きこそしてくれたがそれでも値段はしっかりしており、男に
戻れば不要になる以上、意味の無い出費だ。

確かに、無駄遣いだとは思うけど……

「これは証なのよ。いつかきつとこれを見て、私が少女であったコ
トを思い出すような証」

言っでは、胸元のペンダントを指先で弾いてみせた。

ペンダントを買い終えると、隼人は服も探すと更に別の階のブテ

イックへと移動してきた。

「服ってどんなのを贈るつもりなの？」

「冬ならコートの一つでも贈るんだけど……夏だと何が良いと思う？」

ティーンエイジャー向けの売り場にやってきた私達。

居るのは全てが若い女性で、唯一男性である隼人はどこか居心地の悪そうだ。

「Tシャツとかじゃプレゼントには微妙だし、ワンピースとかでいいんじゃない？」

「ワンピースか」

マネキンが着込む水色のワンピースへと視線を向ける隼人。頭の中では恋人の瑠璃に着せた姿を想像しているのかにやけていた。

「はい、はい。鼻の下を伸ばさない」

妄想する隼人を窘める。

「それで、瑠璃の服のサイズは解ってるの？」

「あっ」

肝心要のサイズが解っていないみたいだ。

「どうするの？ 憶測で買う気？」

「それしかないかな」

困ったように視線を彷徨わせる隼人。

「でもさ、美奈さんに聞いたんだけど、サイズが大きかったり小さかったりすると、贈られた女の子は太って見られていたとか、痩せろって言われているのか——って考えたりするみたいよ」

昔、姫川三姉妹に海外土産の服を贈った時に言われた言葉を口にする。

あの時、腰回りが小さく、胸回りが大きい服を奈月に贈っては、どつかれたんだよね……百科事典全てで。

「そう言われても……」

隼人の視線が私の身体で止まった。

「八坂、身体のサイズは解ってるのかい？」

「ん？ 一応は」

小首を傾げながら答える。サイズ自体は『姫』で服を選んで貰う時に計っていた。

「後ろを向いてくれないか？」

「？」

怪訝に思いながらも振り返る。

「ひゃうい!？」

いきなり背後から腰を触られ、変な声が出た。

「な、なにするんだ!？」

「悪い、悪い。体感的なサイズなら覚えてるから、比べてみたんだけど……瑠璃の方が細いな」

「当たり前よ! あの娘の方が私よりも小柄なんだから」

記憶にあるのは男の時との体系差だが、女に変わったことを考慮しても自分よりも小さいと考える。

「それで八坂、ウエスト何センチ？」

「ウエストは55センチよ」

悪びれもせずに聞いてくる隼人に面倒臭げに教えてやった。

「そうになると53センチくらいになるのか。胸は――」

「触る気!？」

咄嗟に両腕で胸を隠す。

さすがに公衆の面前で胸までは触らす気はない。

「別に良いか」

クルリと背を向けワンピースを選びだす隼人。それはそれで屈辱的だった。

「何色が良いと思う？」

「名前からして、緑か青系統じゃないの？」

「安易だね」

「だったら、あの娘の好きな色にでもすれば？」

素っ気なく言い放つと、私は隣りに並んでいるスカートを物色しだす。

「ねえ、探してる間に試着してきていい？」

「いいけどさ、嬉しそうだね」

言われて自分の頬がにやけていることに気が付いた。

「んー、奈月達に用意して貰った服は全て足を思いつ切り見せるのばかりだったからね」

今穿いているミニボトムを指さす。

「色々と見ているうちに、ロングスカートとかも履いてみたいって思えてきたの」

スカートを数着分手に取り、試着室に入るとカーテンを閉めズボンを脱ぐ。

狭い空間の中、鏡に映り込む少女の姿。

奈々の店である『姫』での着替えの時は慌ただしさのあまり深く考えるゆとりがなかったが、鏡を前にした狭い空間での『女』としての着替えは酷く背德的行為に感じられた。

フレアスカートを穿いては、狭い中で軽く身体を回し裾を浮き上がらせてみる。そんな、ふわりとした感触が面白い。

続いて、デニム地のタイトなロングスカートを穿いてみる。

「全く動かせないと思っていただけ……スリットがあるから歩く分には問題ないんだ」

思いの外自由な、足回りを実体験する。

それ以降も、売り場から新しいのを見つけてきてはそれを試す私。いくつか気に入ったのもあった。

でも、

さすがに買うわけにもいかなかった。

安易に買い込んで、奈月達に見つかったら何言われるか解ったものじゃない。

後ろ髪惹かれる思いで試着室を後にする。

レジではラッピングを頼んでいる隼人がいた。

「ちゃんと良いの見つけた？」

「良いか悪いかはよく解らないよ」

私の言葉に隼人は苦笑した。

「八坂は何か買わないのかい？」

「んゝ、いくつか欲しいのはあったけど、買っても着ることがないし……想い出はこれだけで十分よ」

胸元のペンダントを指先で弄ってみせる。

目的を済ませた隼人は私を連れだって百貨店を出た。時刻は2時
ちよい過ぎ。陽は高くまだまだ暑い。

「これで買い物は終わったんだよね？」

「ああ、おかげさまで助かったよ」

「じゃあ、この後は私に付き合ってね」

「付き合うってどこに？」

「んゝ」

キヨロキヨロと街並みを見渡す。

「あそこかな」

通りの先の一点を指さした。

「じよ、冗談だね？」

私の指さす方向を辿ってはドギマギする隼人。

そっちは歓楽街で、ソープやらキャバレーにラブホテルとかが並んでいる。

「ええ、女になったんだから試してみたいじゃない。どれくら男と違うのかをね♪ それに、男の時と違って女の方が気持ちよさそうだし——早く行こ♪」

「お、お、おい、おい!？ 俺には瑠璃がいるんだから——」

妖しくも薄暗い明かりに包まれた一室に女の嬌声が響き渡る。

「——♪——♪——♪——♪」

「…………カラオケなわけか」

私達がいるのはラブホテルの少し手前にあった小さなカラオケスタジオ。マイクを握ったまま離さない私の姿をよそに、隼人は力尽きたように椅子に座り込んでいた。

「——♪——♪——♪——♪」

男の時では歌えない高いキーの歌を熱唱しては、その音が出ることに感激しているいずみ。振りまで付けて、かなりののっていた。

・ ・ ・

「んゝ、スッキリした」

大きく背伸びする仕草をとる。冷房の効き過ぎだった店内と違い、外はかなり暑かった。

「喉痛くなっちゃった」

「4時間近くも歌いすぎだよ」

「だって、どうせ後数時間で元に戻るんだから、女として試してみたいことはやっておきたいじゃない」

そうだよな。

自らの発した言葉に頷く自分がいた。

夜になれば私は男に戻る。

望んでいたことだし、それはそれで待ち遠しい。

だけど、

ここまで来たら、女としてのセックスを味わってみたい気もしてきた。

男に抱かれるなんて嫌だ。

始めはそう思っていたし、今もそう思っている。

でも、

このチャンスを逃したら、二度と体験する機会は訪れないんだよな。

だからこそ、

喻え童貞を失っていない俺としても、女としてのセックスを知ってみたい。

好奇と興味と欲望が――

いくつもの感情が心の中で渦巻き、渇きに似た知的欲求と本能の命じる性的欲求の二つが俺の心を犯していく。

それに、

割り切って楽しむなら、隼人なら問題ない。

顔は良いし身体も引き締まっている。それに恋人もいるから後には引かないはずだ――

って、男に戻った後にまで引かれても困るけどな。
何より、こいつなら秘密は守ってくれるだろう。

問題は、どうやって切り出すかだ。

人の胸を揉んでみせた隼人だが、あれは私を男である出雲として見ていたからこそ出来た行為だ。

何だかんだ言ってこいつは許嫁持ちだしな。そんな恋人を裏切る真似なんて、普通に考えて隼人に出来るはずがない。

どう誘うべきなのやら……

「そんなに喉が痛いなら、何か飲み物でも買ってきてやるよ」
「ほえ？」

眉を潜めて考え込んでいた私の表情を読み間違えたのか、そんなことを言い出してきた。

「じゃあ、オレンジジュース」
喉に痛みがあることもあり、隼人の好意を素直に受けることにする。

「無かったらスポーツドリンク。炭酸はダメだから」
痛んだ喉に優しそうな飲み物を注文すると、木陰のベンチに腰掛けた。

奇しくもそこは昼にナンパといざこざがあった場所だ。

「ねえ、キミ。暇なら俺と遊ばない？」
そしてやはり、あの時と同じように軽そうな男が近付いてきた。

「ごめん。私は売約済みだ」
チラリと一瞥するとあっさりと袖に振る。

何か言いたげな男を残し、たったたと足取り軽くジュースを買ってきた隼人の元へと駆け寄り、その腕を絡め取る。

「おい、おい!？」
戸惑う隼人を後目に、背後のナンパ男を窺えば唾然としているのが見て取れた。

「ナンパ対策だ。気にするな」
隼人の手からオレンジジュースを取り上げ、封を開ける。

「冷たくて気持ちいいな♪」
一息に中身を空ける。

ちらりと横目で隼人を窺えば、缶コーヒーの封を開け様としている隼人の頬が赤い。

ふむ。

腕に抱きついた際、胸を押し付けたのが功を奏したのか、私の身体を意識している様だ。

これならば上手く言いくるめれば、誘いに乗ってきそうだな。

にやっと、表情には出さず内心で嗤う。

「はや——」

「——隼人さん」

私の呼び声に重なるように届いてきた声音に、隼人は缶の縁に口を付けた形で固まった。

「お久しぶりですわ」

それは底冷えを感じさせる声。

隼人につられて振り返れば、背中にまで届くサラリとした黒髪を靡かせた小柄の少女が佇んでいた。

「……瑠璃」

絞り出すようにその名を呼ぶ隼人。

どこかで見た顔だと思ったら、それは緑山瑠璃だった。

「許嫁が要るのにデートですか」

「ご、誤解だよ！」

慌てて否定するのはいいが、その狼狽ぶりは逆に肯定と捉えられても仕方ない気がするぞ。

「知りませんわ。隼人さんのバカっ!!」

持っていたカバンを隼人に投げつけると、瑠璃は逃げるようにその場から走り去って行く。

その瞳からは煌めくモノがこぼれ落ちていた。

「瑠璃！」

「待つて」

追い掛けようとする隼人の腕を掴んで押し留める。

「隼人が行っても無駄だ。私が行くからここで待つてろ」
言うが早いか、瑠璃を追って雑踏の中へと身を翻す。

人混みを掻き分ける私だったが、今の身体になって全力で走ることは始めての為か、なかなか追いつけない。

いつもとは違う歩幅に拍子が崩れ、二つの胸が揺れる。

ややもすれば転びそうになりながらも、それでも構わず前へと足を出す。

その甲斐あってか、駅の改札の前で瑠璃に追いつけた。

「はあ、はあ、はあ……追いついた」

「ほっというて下さい！」

踵を返し、逃げようとする瑠璃の手を掴んで押し留める。

「足早いな。この姿で走るのは慣れてないから追いつくの苦労したよ」

「貴女は隼人さんとデートの最中なんですよ？ デートに戻られた
のですか？」

素っ気ない言葉。

ただ、掴んでいる手から感じる小刻みの震えで虚勢を張ってるの
は解った。

「誤解だ、誤解。あれはデートじゃないぞ」

「うそ。貴女は楽しそうに笑い、隼人さんは嬉しそうでしたわ」

「私が楽しそうなのは解るけど……隼人が嬉しそうなのは少し疑
問だな」

クスリと小さく苦笑し、真っ直ぐ瑠璃を見据える。

「瑠璃——緑山さん。私——じゃなかった、俺はキミと一度会って
るんだ」

「え？」

いきなり変じた雰囲気顔に顔を上げる瑠璃。

「覚えてないかな？ 今年の春に、隼人——鈴瀬に紹介して貰った
のを。『八坂出雲』——それが俺の本当の名前だ」

「八坂君！ で、でも、あなた女性では！？」

驚き、まじまじと瑠璃が見つめる先には、大きすぎるとは言わな
いが慎み深い彼女以上の存在感を示すモノがあった。

「こんな姿じゃ信じられないと思うけど……」

そう前置きをし、私は『八坂出雲』の身に起こった出来事を語っ
た。

自分のクラスに転校してきた抜け忍とそれを捕まえに来た追い忍

との戦いに巻き込まれて、忍者の秘術を喰らったことを。

そして、それで女体化したこと。そのことをあっさり隼人にばれたことを。

「にわかには信じがたいですわ」

一通りの話を聞き終えた瑠璃が発したのはそんな言葉だった。

「まあな。俺自身、自分の身に起こってなかったら信じられなかったと思う」

肩を竦め軽く零す。

世界各地を旅行したことのある俺は、同年代の普通の学生よりかは色々な経験を積んでいるつもりだ。

そんな俺でも、こんなバカげた出来事は見たことも、聞いたことも無い。

「信じられないのなら夜に俺の家に来るといい。そこで茜達に術を解いて貰う予定になってるからな。目の前でそれを見れば、さすがに信じるだろう？」

言いたいことだけ言うと私は、探る様な瑠璃の眼差しをかわし隣を歩き去っていく。

「駅前の広場で隼人のヤツが、キミへのプレゼントを持って待ってるぞ」

すれ違い様に、それだけを囁く。

「じゃあな、瑠璃」

長い髪を翻してその場を走り去った。

15話

瑠璃の元を去ってから、独り街を歩く。

「これからどうするかな」

呟き零れる自問は、瑠璃と別れてから幾度となく頭の中で繰り返されていた。

そして、その答えも既に決まってる。

落とした視線が胸の膨らみを捉える。

セックスには興味があるが、さすがにゆきずりのナンパ男相手に身体を汚す気にはなれなかった。

ならば出来ることは限られていた。

いつしか夏の暑さは消え、街のノイズが遠くに失せる。

周りからの視線も忘れ、ただ感じるのはドギマギした心拍音のみ。

心の底からわき出る気持ち——それは心の隅に追いやっていた好奇心の再来。

「夜には戻るんだよな……」

立ち止まって空を見上げるいずみ。時刻は5時を過ぎているが、まだまだ明るい夏の空。

このまま疼きを持ったまま男に戻るには抵抗があった。

女の快感。

いまだかつてまともに味わっていないのだ。夢うつつに色々や
った様な気はするけど……

「せめて、オナニーぐらいはしてみろかな」

心を決めた途端、世界は音に溢れ周りに色が付く。

自分を見つめる通行人達に気付き、慌ててその場を離れる。

逃げるようにやってきたのは、ビルとビルの間の薄暗い路地裏だ
った。

「ここなら誰にも見られないよな」

Ｌ字型に曲がった先は、隙間こそあるがとても人が通れる程の幅
は無く、袋小路と化していた。

何処にも人の気配がないのを確かめ、そっと右の手を高鳴る胸へ
と向けた。

むにゅとした感触。

揉んでいる。そして揉まれていると言う『八坂出雲』に戻ったら
もう味わえない感触が伝わってくる。

「これが女――女の胸なんだよな」

そして、後数時間で無くなってしまふモノ。

そう考えると、ソレが愛おしくなる。

突っ張っていた服は押さえる指の形に皺が走り、手の中で変形す
る胸。

燻っていた疼きに灯が点いたのか、快楽はすぐに波立ち始めた。

二度三度と飽きることなく揉み続ける。いつしか男として胸を揉み、女として揉まれてると言う倒錯感に酔い始めた。

足の力は抜け、ペタリと腰を下ろす。

ミニボトムボタンを外しファスナーを下ろせば、ショーツの感触が伝わってくる。

「柔らかい……柔らかいよ………はぁん、はぁ、はぁ………」

口から零れ出るモノは意味を無くし、熱い吐息へと変じる。身体は女として感じてきた――

バッコン!!

突然の衝撃を脳天に受け倒れ込む。

頭を押さえて潤んだ瞳を向ければ、眉をつり上げて睨んでいる幼なじみの少女がいた。

「あんたはさかりのついた猫か!!」

「な、奈月!？」

驚き、慌てて胸と股間にあった両の腕を背後に隠す。

「な、なぜ、こ、ここに?」

「あんたが家にいないから、嫌な予感がして迎えに来たのよ」

フンツと荒々しく鼻息を吐き捨てる奈月。ジロリとした彼女の視線は皺が残る私の胸と明け放れたままのボトムに注がれていた。

気まずさを感じながら、タンクトップの裾を引っ張って皺を伸ばし、ボトムを履き直す。

「あのね、いずみ。そう言うことするなら、自分の部屋でしなさいよね」

「え？」

奈月の言葉に戸惑う。

「怒ってないのか？」

「何であたしがあなたの身体のコトで怒らないとならないのよ」
うざったげに髪の毛を払い、

「思春期真っ盛りのまっとうな若者なら、異性の身体に興味を持つぐらい解ってるわよ」

奈月はキツパリ言い切った。

「あたしが止めたのは、こんな町中で行為に及んでることよ！」
そんな奈月から差し延べられた手を借り、立ち上がる。

「あんたは元々男だからこの手の情報には疎いと思っているけど……」

「ここは痴漢達が、通りで捕まえた女の子を襲う場所なのよ？　こんなトコであんなコトをしていたら、誰かに襲われるわよ」

奈月の言葉の意味に、顔から血が引いているのを感じた。

隼人と関係こそは持ったけど、さすがに見ず知らずの男とまでは行為を行う気にはなれない。

「は、はやく帰ろう！」

慌ててその場を離れようとする。

さすがに身体のコトを焦っていた火は消えていた。

「でも、良く私の場所が解ったな」

「あんたの場所ぐらい、喻え地球の裏側にいたって解るわよ」

そう言った奈月の横顔は、コケティッシュかつ不遜な笑みを浮かべていた。

家に帰ると、庭には巨大な図柄が描かれていた。

それはあたかも、ファンタジー映画に出てくるような魔法陣だ。

「ただいま」

「お邪魔するわね」

玄関を開けて入る私に奈月。

「お帰りなさい、いずみさん、奈月さん」

「あっ、いずみさん。留守中に航空便が届きましたよ」

出迎える菫に続いて、ダイニングからエプロン姿の茜が顔を覗かせた。

「航空便？」

「小父さん達、また何か送ってきたのかしら？」

リビングのテーブルの上に置かれた段ボールを一瞥し、そのままダイニングへと向かう。見るまでもなくそれが両親からなのは解っていた。

「中身を確認出来ないんですか？」

「何でしょうね？」

「どーせ、要らない発掘品でも送ってきたんだと思う」

興味津々の茜達だが、いつものことだから気にもしない。
出てくるのはがらくただって決まっている。

「それより、術の方の準備はできたのか？」
今の私にはこっちの方が重要事項だ。

「あつ、はい。あとは月の霊力が一定以上に高まる夜を待つだけですの……」

「早ければ、あと二時間もすれば実行できるはずですよ」

「二時間——か」

大きく伸びをする。

頭の片隅では、奈月に中断させられた行為を思い起こすが、みんなが居る状況じゃやれそうにはない。

女で居る時間こそまだまだあるが、家に同世代の女子がいる手前、さすがに続きをやるのははばかれた。

「奈月さんも夕食はご一緒します？」

「茜ちゃんの料理に興味があるから、頼むわ」
4人の少女が席に着き、夕食を食べ始める。

「あゝ、食べた、食べた。美味しかったよ、茜ちゃん」

「お粗末様です」

綺麗に自分の分を平らげ、麦茶を飲む奈月。

「あつ、董ちゃん」

「何ですか？」

「よく、こんな短期間で戻す方法が解ったわね？　もう少し掛かる
思っていたんだけど」

「ああ、それですか」

応え、何かを思いだしたのかほくそ笑む茜。

「今、村の方では、村の資料を保管していた公民館の立て直しているんですが、古い文献の中に転化の術の解除方法を載せた書物が見つかったんです」

「「え？」」

声を併せて驚く私と奈月。

茜は既に話を聞いているのか、食べ終わった食器を洗いにキッチンへと向かっていた。

「それは存在しなかったんじゃないの？」

「どうも、転化の術を受けることは碓氷一族にとっては当たり前の事だったので、誰も転化の術を破ることなどは考えていなかったようでした——今までその存在が忘れ去られていたと思います。そして解術から、転化の術の原理も解りました」

「原理？ それってどんなのだったんだ？」

「転化の術とは、高度に組まれた変化の術だったんですよ」

「変化の術って、別のモノに化ける術だよな？」

猫に化けてもらった茜の姿を思いだしていた。

あの時は、変化の術の見事さに色々と見まくり、弄りまくっていたけど……あれって茜の身体を弄っていたことになるんだよな。

冷静に考えてみれば、女の子の身体相手にやばいことをしていたことに思い至った。

「それで、転化の術は異性への変化——それも細胞単位で見た目を

変え、一生涯解けることのない高度な術だったんです。そして、そのことから面白いことが解ったんですよ」

クスツと、堇がほくそ笑む。

「面白いことって？」

そこまで聞いていないのかキッチンの中の茜も耳を傾けてきた。

「実際に調べたわけでもないので推測の域は越えてませんが――転化の術は、細胞単位で見た目を変化させてるだけですので、DNAや染色体などは元の性――男のままだったと推察できるんです」

「被術者の体内で作られる精子もまた精子の形状をしていますが、実はそれは卵子だったと考えれば、そのため性行為を行っても、本来精子と卵子の組合せが実は卵子と卵子の組合せで、そこから生まれる子供にはY染色体が存在するはずもなく、それが碓氷一族が女系だった絡繰りではないかって話なんです」

「ふーん。面白い推察ね。それで、女系だったって言えば、精子バンクの話はしたの？」

「あっ、はい。そのことでは、奈月さんには凄く感謝しています」

堇は奈月に向かってペコリと頭を下げた。

「里に戻った後、精子バンクの話を里の者達に話したところ、たいそう興味を持たれ、長老会でも承認され、すぐにでも買いに向かうため、今も精子バンクを目的とした観光ツアーを行おうと旅行代理店と話し合っているはずですよ」

「たっはっは……すごい行動力ね」

さすがの奈月もそこまで話が飛躍するとは予想できず、引きつった笑顔を見せた。

ピンポーン♪

「お邪魔するね、いずみちゃん」

インターホンが鳴り響いたかと思うと、玄関のドアを開ける音共に美奈さんの声が聞こえてきた。

「美奈さん？ それに隼人達まで」

やってきたのは、美奈さん、奈々さんの隣人親娘に隼人と瑠璃の二人もいた。

「瑠璃？」

「貴女の話だけでは全てを信じられませんでしたので、戻るところを確認させていただきに参りましたわ」

複雑そうな表情のまま頭を下げる瑠璃。隣で隼人が苦笑していた。瑠璃及び隼人のことを紹介し、夜がもう少し更けるのを待って私は解術を執行し始めた。

雲一つない夜空には欠けた月が一つ。満月にはもうしばらくの日数が掛かるが、十二分に明るい。

「これが忍者の使う方陣ってヤツなのか」

「陰陽道に近い式ですわ」

実家が神社である二人は、興味深げに庭に描かれた方陣を見ていた。

「ふーん」

「何か解るの、姉さん？」

辺りを眺め眇める奈々さんに対し、小首を傾げる美奈さん。

「少し感心しただけよ」

簡単に返し縁側に腰掛ける奈々さん。美奈さんも習って座る。奈月は少し離れた位置から全体をカメラで撮影していた。

「皆さん、離れてくださいね」

隼人と瑠璃が離れるように指示を出す茜。

「いずみさん、準備はいいですか？」

堇は方陣の中央に立つ私に確認を取る。

「私の方はいつでもいいぞ」

応じる私の姿は、男に戻った後も問題ないようにとTシャツとスウェット。見えない部分の下着もブラジャーを外し、トランクスに変えていた。

「では、参ります！」

かけ声と共に堇と茜が両サイドから素早く印を結びだした。

複雑な印。次々組み上げられていく印に呼応するように方陣が淡く輝きだす。

「綺麗だね」

場違いな感想を漏らす隼人。ただ、その考えはヤツだけではなく、そこに居合わせた全員が思うところでもあった。

光が全ての方陣に満ちた時――

「「解！」」

双子の発した言葉が大気を震わせ、世界を一瞬だけ白に染めた。

「けっほ、けっほ……」

舞い上がった砂埃に噎せながら、ぐっと握る拳。

そっと開いては力加減を確かめ、女の特徴が出ていた胸や尻に触れてみる。

「……やった」

小さく零れ出る言葉はいつもの低さ。顔の前で拳を握りしめては震わせ、

「戻った、戻ったぞお!!」

歓喜に溢れた雄叫びを上げる。

「よかった……無事に戻れようですね」

ヘナヘナヘナと腰砕けにへたり込む輩。その対象の位置では茜も同じように腰を落としていた。

「なっ、本当だったんですの!？」

「だから、本当だって言っただろ、瑠璃」

そう言う隼人のヤツも性転換を目の当たりにして、顔が驚きに固まっていた。

「やった、やったんだ♪」

「騒ぐんじゃない、バカ出海! ご近所に迷惑でしょうが!!」

ドゴツ――

顔面に受けた雑誌は、懐かしくも痛い奈月――ねえの攻撃だった。って、どこに持っていたんだ、このヒトは!?

「不肖八坂出雲が無事に男に戻れたことを祝って――」
俺のかけ声で

「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

乾杯をする一同。

無事に戻れたことが嬉しく、集まったみんなを誘って宴会を始め
ていた。

俺の奢りで頼んだピザを摘みながらジュースを飲み、大人である
奈々さんと美奈ねえは姫川家から持ってきたワインを楽しんでいた。

「摩訶不思議な術でした。忍術があのような不可思議な現象まで起
こすとは恐れ入りましたわ」

「これで、瑠璃も僕が浮気をしてなかったことを信じてくれるだろ
?」

「ええ。隼人さんは、やっぱり隼人さんだったのですね」

引っ付くように寄り添う瑠璃。そんな彼女に困ったように苦笑し
ながらも満更じゃない隼人だった。

「――で――」

「――だから――」

茜と堇の話し合いが聞こえてきた。

「何話してるんだ？」

「あっ」

「出雲君」

二人揃って顔を上げる。

「出雲君が元に戻れましたので――」

「これからのことを話し合っていたんです」

「これから？」

「お借りしてる茜の部屋のことです」

「茜って里に戻るのか？」

「あっ、いえ。せつかくですので、しばらくはこの地に居る予定です」

「それで、秋からは私も一緒に転校して来ようと思ってるんです。奈月さんの助言により、里の問題も終結しましたし、私も外の世界を体験してみたいので」

「ふーん。じゃあ、もう一部屋いるかな。あっ、それとも、二人で一部屋使う？」

「「え？」」

何気ない俺の言葉に戸惑いを見せる二人。

俺、何か変なことでも言ったか？

「居ていいんですか？ 私達はここに居る必要は無いんですよ」
「そう言うことか。」

俺が戻った以上、ここに居着く理由はないんだよな。

「それもそうね」

奈月ねえが会話に割り込んできた。

「出雲が男に戻った以上、年頃の女の子を一つ屋根の下に住まわせるのは危険だからね」

「……そうですね」

正論に力なさに頷く茜。

別に住み続けても良いと思ったけど、言われてみればさすがにま
ずいか。

「そう言うことで、茜ちゃんと堇ちゃんはあたしの家に引っ越しね」
「え？」

「奈月先輩の家!？」

いきなりの急展開に戸惑う二人を後目に、奈月ねえはソファで
ワインを嗜んでいる奈々さんに顔を向けた。

「いいでしょ、奈々姉さん」

「ん？」

仄かに赤らめた顔を妹に向けてくる。

「いいわよ」

あっさりと承諾してみせた。

「でも、そんな必要も無いかもね」

意味深な一言を零すと、奈々さんは残りのワインを呷った。

「必要ないってどう言う――」

言いかけた問いかけを飲み込む茜。奈々さんの視線が既に彼女た
ちではなく、隼人達に向けられていたことに気が付いたからだ。

「八坂、あの段ボール箱はなんだい？」

そこには、部屋の片隅に追いやられた航空便の段ボール箱を怪訝そうに睨んでいる隼人と瑠璃がいた。

どうも、奈々さんの言いたいのはアレのようだ。

「そう言えば中身を確認してなかったな」

ポリポリポリと頭を掻きむしりながら、食べ終わったピザの箱を横にどけ、段ボール箱を部屋の中央に置き封を開ける。

「どうせ、いつもの妖しげな発掘品だと思うけど……」

衝撃吸収用の梱包材の中に手を入れてみれば、出てくるのはビデオカメラにデジタルカメラ。後は各種記録媒体。

不思議に思いつつもそれらを順に並べていき、次のを取り出そうと突っ込んだ指先は異質な材質を感じ取った。

「なんだこれ？」

出てきたのは、木彫りで出来た人型の立像だった。

「む！？」

「な！」

像を取り出した瞬間、顔つきを一層険しくする隼人と瑠璃。

「この像に何かあるのか？」

いくら見渡しても別段何でもない普通の木像だ。

「いや、さっきから気の揺らぎを感じていたんだけど、それが元凶のようだ」

「私も何かの力を感じますわ」

隼人の言葉に追隨する瑠璃。

「茜達は？」

俺の問いに顔を見合わせる双子。

「鈴瀬君達に言われて辛うじて」

「違和感を感じるくらいですね」

「違和感ね……」

像を眺め眇めるが、凡人である俺には何も感じられない。

「奈月ねえと美奈ねえは——って、二人が感じる訳ないか」

そのまま持った像の角を使ってボリボリと頭を搔く。

「むっ、私達が鈍感だっと思っていたの？」

「べ、べつにそう言う訳じゃ。二人はこいつらと比べれば一般人だ
って——」

「まあ、私達が普通だなんて、さすがは出雲ちゃんね」

「あら、面白そうなモノが出てきたわよ」

ひょいと背後から像を奪われた。

「奈々さん？」

「これは精霊の像よ。それも封じの像ね」

「封じの像？」

「悪さした精霊を封じ込める依り代よ。この手のモノに封じられた
精霊は、封印を解いた人間の願いを叶えないと自由になれないのよ
ね。出雲君のトコに送られてきたってことは……」

「俺に精霊の封印を解いて男に戻るようにしてもらえって、親父達
が送ってきたってコトか!？」

「違うわね。大方、八坂の小父さん達の願いを叶えるために送り込まれたってトコかしら」

だよな……やっぱり。

あの親達が息子を助けるために労力を割くとは思えない。

「精霊、いるんでしょう？ 出てこないと燃やすわよ」

何処から取り出したのかライターに火を灯し、奈々さんは揺らめく炎の先端を像の端に近づけていく。

「うわぁ、わぁっ、や、止めろ!!」

ポンッとした音共に白煙が溢れ、木像は緑色の髪をした少女になった——ただし、身長14センチほどの。

「気の持ち主は精霊だったのか」

「力は精霊のモノでしたか」

「あ、茜、精霊ですよ、精霊！ あんなモノが現実には居るんですね」

「葦、落ち着きなさいって」

「落ち着いてないのは茜ちゃんもでしょ。クナイなんて握りしめて」「一人欲しいわね。どこかで売ってないかしら？」

「な、な、な、奈々さん！ な、何なんです、あれ!？」

「ん、輸入雑貨で精霊信仰の部族とかから民芸品を仕入れたりもしてるからね。話に聞いたことがあって試してみたんだけど……本当に出ると思わなかったわ」

どこまで本当なのか判断に苦しむ様な、涼しげな笑みを浮かべて

みせる奈々さんだ。

出てきた精霊とやらは、俺達の頭上を飛び回る。

「八坂出雲、いるか？」

「出雲は俺だけど」

手を上げれば、精霊はまじまじと出雲を見つめたかと思うと、ふよふよと近付きその平らな胸を触り始めた。

女だったら感じたかも知れないけど、さわさわとした手触りはくすぐったいだけだった。

「な、何するんだよ!？」

「お前、女じゃない」

「ああ、さっき元に戻ったんだ」

俺の言葉に、小さな顔の細い眉を顰める精霊。

「我、八坂夫妻に頼まれた。少女になった息子の姿を撮ってこいと」
ちらっと精霊が横目で見ると先には、一緒に送られてきた各種カメラが並んでいる。

どうやら、あれで撮影しろってコトのようだ。

「我、願い叶えないと、自由なれない」

「そう言われてもな……」

「だから、お前、もう一度女なる」

「え?」

精霊の言葉が頭に浸透するのに暫し時間が掛かった。

そして、

その一瞬の間が悪かった。

「――――」

聞き取れない言葉を発したかと思うと、目映い閃光が部屋を覆った。

「なっ!?!」

眩んだ視界が少しずつ戻ってくると、

「何なんだよいきな――へっ!?!」

見慣れない、そしてさっきまで見慣れたモノが見えた。

「む、胸がある!?!」

慌てて身体をまさぐれば、筋肉質だった身体は丸みを帯びた柔らかいモノに変わっていた。

「――「なっ!?!」」

突然の出来事に啞然とする4人に対し、

「あら、出雲ちゃんがいずみちゃんに♪」

「やっぱり必要なさそうね」

成人の二人は楽しげに声を弾ませ、

「あんたってば——クックク……あっはっはっはっは!!」
幼なじみの姉貴分は堪えきれず、声を上げて笑い出した。

一同が見守る中、俺はゆっくりと首を横に向ける。そんな俺の姿を、夜の帳を分け隔てる窓ガラスが鏡のようにその身を映し出した。闇の中に映り込むそれは、膨らんだ胸にくびれる腰、突き出た尻。その姿は紛れもなく先ほどの『八坂いずみ』そのものであった。

ただ一つ、違うのは髪長さくらいか。

その長さは、男に戻った時とさほど変わらない——ショートヘアだ。

「……………」

啞然とへたり込む。そんな俺の周りを精霊は飛び回り、見えない力でカメラを浮かび上がらせてはファインダーに収めていく。

「何だよ、これ……何なんだよ、これ!？」

そんな鳴り響くシャッター音に曝されつつ、甲高い俺の絶叫が夜の八坂家に響き渡っていた。

15話（後書き）

某所の三章分がこれで終了。

切りがいいので、ひとまずこの話で中断します（終了じゃないので完結設定はしません）

ただ、続けるかどうかは未定です。

16話 一精霊編一

「う……ん……………」

カーテンの隙間から射し込む陽光に、目を覚ました。

「もう、朝か」

気怠そうに瞼を擦れば、腕の動きに引っ張られて動く――胸の存在に、否応なく昨夜の出来事が思い出される。

「また、女になったんだよな」

忌々しく呟く声は、高かった。

親父達が送り込んできた精霊の手によって再び女性化してしまった俺の身体。

あの後、愕然とした俺は茜達の忍術で戻せないかと訊ねただけど、董の探してきた解除術は転化の術のみに通じるため、意味はないと言われた。

それならばもう一度転化の術を――とも考えたんだけど……
それもまた、あっさりと否定された。

顔に掛かるショートカットの髪の毛を弄りながら、昨夜のやりとりの続きへと思いを馳せる。

・ ・ ・

「そうだ！」

頭の中で天秤が揺らめく。

「それも一生——ううん」

言いかけた言葉を首を振って否定する堇。

「その髪の長さですと——」

さっきまでの長すぎる髪と違い、女性としては短めの髪の手を見つめながら、堇は困った表情を浮かべた。

「髪の毛だけじゃなく、別の部分も犠牲になるかと」

「別の部分？」

「身長とか——かしら？」

うっ……

髪の毛だけなら我慢も出来るけど、体型まで変わってしまうのはさすがに問題だ。

「それ以外ですと——」

チラッ。

って、俺の股間を見ては顔を赤らめるな！

縮むのか？ こそも縮むのか！？

男に戻っても一番大事な部分が赤ちゃんサイズじゃ洒落にならないぞー！！

「せめて、髪の毛の長さが転化の術の時と同じくらいまで伸びれば何とか……」

「それって……どれくらい掛かるんだよ」

ガツクリと肩を落とす。

どう考えても、あそこの長さまで伸ばそうと思ったら、1ヶ月や2ヶ月じゃ済まないよな。

それこそ年単位の時間が掛かる。

・ ・ ・

「どうしたものやら」

男の時と大差ない長さの髪の毛を引っ張っては呟く。

どうせ女にするなら、ロングヘアの女にしてくれば良かったのに……そうすれば、転化の術で男に戻れたのにな。

胸やら身長やら、ここまで変わっているのに、どうして髪の毛だけは元の長さなんだよ。

「これもそれも、あの精霊のヤツが――」

あー、思い出すだけで腹が立ってくる。

クール便で親父達のトコに送り返してやろうか。

いや、いっそ捕まえてTV局にでも売るか。

妖精なら、下手な珍獣よりかなりの金になるな。

って、俺のことまで暴露するのはまずいよな。ネットオークションでこっそり売るか。

「我を呼んだか？ 八坂出雲」

「へ？」

足下から聞こえる精霊の声に上半身を起こせば、俺の足から穿いていたショーツを脱がそうとしている精霊と視線があった。

「……………」

理解すること暫し――

「何やってるんだ、お前？」

問い詰めるも応えず、精霊は露わになった俺の股間へと浮かしたカメラのレンズを向けていた。

カッシャン――

「だから、何をやってるんだよ!？」

シャッター音を掻き消さんばかりに叫べば、精霊はその小さな口を開けた。

「決まっておろう。八坂出雲が女になった証拠を写してこいと命じられておるからな。その最たる部分を写しておるのじゃ」
面倒くさそうに応えつつも、写真を取り捲っている精霊。

「なっ、なっ、何やってるんだよ!!」

叫び、一息に立ち上がると、膝まで脱がされていたショーツをつり上げる。

全身を真っ赤に染め上げる俺の周りには、精霊が浮かしては操る無数のカメラがあった。

ゆらり――

ふらつくように身体を揺らし、部屋の片隅に立て掛けられていた

木刀を手取る。

中学ん時の修学旅行で京都の土産として買ったソレは、たまの素振り以外に目立った利用方法もなく飾りと化していたが、今ここにその真価を発揮する時が来たのだ。

「斬！」

気合いの叫びと共に振るわれた木刀は、宙に浮いているカメラを次々に撃破していく。

斬る、斬る、斬る！

ガッシャーン！ バッコン！！ ドシャン！！！！

砕けろ、砕けろ！！

ギャシャン！ ズッシャン！！

カメラから散らばる精密な部品の数々は、まるで血しぶきを吹き上げているようだ。

「な、何するか、八坂出雲！」

「うっせ！ あんな写真、誰にも見せられるわけないだろ！！」

床に散らばるカメラを、これでもかとかばかりに木刀で突いては粉々に砕く。

「や、止めぬか！ 八坂出雲！！」

「知るか！！」

構うことなく次々と壊していく。

壊し屋と化した俺の隣では、精霊は木っ端微塵になったカメラの残骸を集めては元の形に集めようとしていた。幾ら形を組み上げようとも、完全に砕けたそれは元には戻らず、ヤツの手からボロツと部品が落ちていく。

ふん。見たことか。

そんな精霊の様子に少しだけ溜飲が収まってきた。

「うっ」

「う？」

精霊の瞳からは大粒の涙が零れた。

ボロボロと流れ落ちる涙はフローリングの床を濡らしだし、やがて大声で泣き始めた。

「う、うわああああん」

「うるせー、だまれ！」

叫び返すが、精霊の泣き声は一向に止む気配がない。

いつそ、こいつも叩き斬るか？

耳障りな泣き声に心がざわつく。

木刀を握る手に力を込める。

せめてもの情けだ。一発で沈めてやるよ。

「ちょ、ちょっと、八雲！ 何事なの！？」

突然ドアが開き、奈月ねえが飛び込んできた。ドアの向こうでは茜堇の双子がこちらの様子を窺っている。

思わず、先ほどの行為が見られていたのかと思ったが、雰囲気からして違うようだ。

床に散らばるカメラの残骸とその中心で泣き崩れる精霊。そして俺が振りかぶっている木刀を見比べては、奈月ねえは額に指先を当てた。

「何があったのよ？」

「――勝手に写真を撮るから、壊したんだよ」

「え？」

声を小さくして呟くように答えた俺の言葉に、奈月ねえは聞き返してきた。

「だから、こいつが女になった証拠だって俺の股間の写真を撮ろうと、穿いてたショーツを剥がしてはカメラを操っていたから、全てをぶっ壊したんだよ!!」

「カメラ、全て壊された。我、これでは契約を果たせない。もう自由になれない……」

「あー、そう言うことね」

俺の叫びと嗚咽混じりの精霊の呟きに、状況を察した奈月ねえは苦い笑みを浮かべてくれた。

「精霊の自業自得とは言え……泣かしたままってのもね」

いまだ泣き続ける精霊を見下ろしては、ポリポリポリと頭を搔く。

「ねえ、あなた。壊されたカメラの代わりに、あたしのを貸してあげようか？」

精霊の前でしゃがみ込むと、ズボンのポケットから携帯していた

デジカメを取り出す奈月ねえ。そんな突然の申し出に精霊の泣き声が止まる。それでもまだ涙は完全に止まっていないのか、両の眼は零れんばかりに潤んでいた。

「ま、まことか？」

「まこと、まこと。でも――」

チラリと横目で俺を見てくる。

何だ？

何かあるのか？

「無料では貸せないから、あたしの願いを一つ叶えてくれるのでどう？」

「願い？　願いを叶えればいいのか？」

「ええ、そうよ。あなたが出来る範囲のことしか頼まないわ」

「解った。そなたの願い叶える」

「約束よ」

「約束だ」

精霊の承諾に、奈月ねえは満足げに頷いた。

「はい。好きなだけ撮って良いわよ」

手渡されたカメラで撮影を再開する精霊。さすがに奈月ねえのカメラじゃ壊すわけにもいかないよな……後が恐いし。

「それで出雲。あんたはどうするの？」

「どうするって？」

奈月ねえの言いたいことが理解できない。

「あたしがこの精霊に、あんたを元に戻すように願ってあげてもいいかなって考えよ」

「あっ！」

奈月ねえの策略に気が付く。

「頼めるかな？」

「かまわないわよ」

あっさりと承諾してくれる。

「ただし――」

んな訳ないか。

「ただし？」

「せっかくの願い事が叶うチャンスをあんたに譲るんだから、それ相応の誠意を見せて貰わないとね」

小悪魔っぽく微笑んだ。

「何が望みなんだ？ うたかたのあんみつか？ ぜんざいか？」

「ちよっと、まるであたしが食い意地張ってるような言い分ね」

「じゃあ、なんだよ？」

「んー、夏休みの間に一度だけで良いから、『八坂出雲』に対する絶対的な命令権をくれない？」

うっ。

一瞬後込みする。

奈月ねえ相手じゃ、さすがに簡単には承諾できない。ここでその条件を呑めば、どんな無茶を押し付けられるか解ったモノじゃない。そんな俺の心の内を読んだかのように、奈月ねえから溜息が漏れた。

「別に海の水を飲み干せとか、世界中の財宝を寄越せとか、不老不死にしてくれと言った無理難題は言わないわよ」

逆に、そこまでの無理難題なら、有耶無耶の内にご破算に出来そうない気がする。

「出雲に出来るコトにしか命令権は行使しないわよ」

「解った。お願いする」

「商談成立ね♪」

悪魔に魂を売った気分なのは気のせいなのやら……

「命令権を行使した際、出雲が破ったらそれなりの罰を与えるから覚えておいてね」

楽しげに釘を刺してくる。

命令権以上に、その罰則の方が気になるな。

「ねえ、撮影はどれくらいの期間掛かるの？」

「女の日常撮れ言われた。最低でも今日一日は撮る。終わったらきおくばいたいとやらを送る。それで私の仕事完了」

「ふーん。あっ、そうそう。股間を撮るのはもう止めておきなさいね」

「何故だ？」

「いくら小父さん達だって、むす——め？のあそこを見たいとは思わないでしょ」

親父なら見たがるかも知れないと思うけどな。

でも、お袋がそれを許すとは思えないか。

「でも、我は女である証を撮らねばならぬのじゃ」

精霊は、借りたカメラと俺と奈月ねえを見比べる。俺と違い、力

メラを借りた恩からか話だけは聞いているようだ。

「女である証拠ね……」

クルリと俺の方を振り返る奈月ねえ。上へ下へと俺の身体に視線を走らせる。そんな全てを見透かすような奈月ねえの瞳に耐えきれず、気恥ずかしさで後ずさった。

「な、なんだよ……」

「また、ファッションショーかなって思ってたね」

「こちらは？」

「董は初めてだったわね。奈々さんのお店よ」

奈月ねえに連れられて、俺達は『姫』へと訪れた。

午前中——それも朝寄りの時間だけ合って客はおらず、店内は閑散としている。

あれ？ 客だけじゃなく、奈々さんもないな。

「なあ、また着替えを探すのか？ 俺としては今着てるヤツで十分だと思うけど」

俺の部屋にはまだ先日渡された服が残っている。

「今回は少女らしさを誇張したファッションにしようかなってね」
涼しげに微笑んでみせる奈月ねえ。

「あっ、そうそう」

「なんだよ？」

「女の姿でいる以上は、いずみの設定で行動しなさい。そうじゃないと外で誰かと会ったら困るでしょ」

「あっ……」

口を押さえて黙り込む。

大きく深呼吸してから、俺はいずみになりきった。

「奈月。少女らしさってどんなのを選ぶ気なんだ？」

「そうですよ、奈月先輩」

「どうして、少女らしさなんですか？」

「女である証拠を見せるのでしたら——」

「やはり前のように女性としてのボディラインを際立たせた方が宜しいのでは？」

ちゅちゅち——と、私達の前で人差し指を振る奈月。

「小父さんや小母さんに見せるなら、少女らしい方が受けが良いでしょ。際どいお水よりも清楚なお嬢様ってね」

はぁ……

そう言うモノなのかな？

奈月の根拠はよく解らないけど、際どすぎる服装じゃないならいいか。

私は安易にそう考えていた。

「はい、まずはゴスロリね」

そう言っっては、奥の方の棚から過剰なまでのフリルやリボンで飾られた服を持ってきた。

ある程度の女装には慣れた私だったが、機能性の微塵も感じられない服は予想外だった。

「なあ、本当にこれを着るのか？」

「別にそれじゃなくてもいいけど、どうせ一日過ぎれば戻れるんだからこういう恰好も経験してみたら？」

頭上で私達の様子を撮影している精霊を見上げながら、奈月は言った。

確かに、前回とは違って今回は確実に戻れる。だからと言ってコレはな……

ジト目で奈月の持つゴスロリを見る。

「あら？ みんな揃ってどうしたの？」

店の入り口から、大きな段ボール箱を持った奈々さんが入ってきた。

「いずみの服探しよ。この精霊が、いずみの女らしさを撮りたいって言うからね」

「それならコレなんてどう？ 面白そうだから仕入れてみたの」

奈々さんは持っていた段ボールを床に置くと、おもむろに封を開け始めた。

そこから出てきたのはメイド服だった。

「姉さん、どうしたの、これ？」

「私の親友が趣味で作ってるコスプレ衣装よ。売れるかどうか試して欲しいって頼まれたの」

「ふーん。借りても良いの？」

「いいわよ。人が着込んでいる姿とかも見てみたかったし。奈月に頼もうかと思っていたけど、いずみちゃんが着てくれるなら丁度いいわ」

手にしたメイド服と私を見比べる奈月。彼女の口元が楽しげにつ

り上がった。

「面白いわね」

ゴスロリを元の場所に戻すと、メイド服を俺に差し出してきた。

「はい、着替えてね」

「へいへい」

着替えるしかないのは解っているから、私は素直にそれを受け取った。

試着室に入ると着ている服を脱ぎ、下着姿になる。
まずは黒色のワンピースへと手を伸ばす。

「あっ、いずみ」

カーテンの隙間からヒョッコリと奈月が顔を入れてきた。

反射的に持っていたワンピースで身体を隠す。

——って、何やってるんだ私は。

少女らしい反応に苦笑する。

「この下着に着替えなさいね」

隙間から差し延べられた手には純白の下着セットがあった。

「なんだよ、これ？」

ショーツ、それにストッキングは解ったが、他のが解らない。

「ブラジャーなのか、これ？」

胸を入れるカップがあるから、そっち系の下着なのは解る。

「ビスチェよ。ドレスとかを着る時に身に着ける下着ね」

「ふーん。女って色んな下着があるんだな」

感心しながら、別の形の解らない下着を摘み上げた。

「これは？」

「ガーターベルトよ」

「ガーターベルト？ ああ、ストッキングを釣り上げるヤツか」

日頃接点のない女性下着の、それまたマニアックなそれに、私は驚きを覚えた。

「それを身に着ける時は、ショーツの下に着けるんだから注意してね」

「下って？」

「垂れ下がっているベルトの部分がショーツの下を通るのよ。モデルの写真とかじゃ見栄えを気にして逆にすることがあったりして間違われやすいけど、ショーツの上に身に着けるとトイレの時に困るから」

それだけ言うと、奈月は顔を引っ込めた。

狭い空間でガーターベルトを見つめる。

頭の中で構造を考えてみれば、確かにショーツの上にこれを着けたらトイレの度に全て脱がないとまらない。

「女の服って面倒臭いな」

愚痴を漏らしながらもショーツを脱ぐと、顕わになった股間を気にしないようにガーターベルトを身に着ける。

腰の部分を押さえながらも、下半身のどこも隠していない下着は不思議だった。

「ええっと、次はショーツか」

一緒に渡されたショーツは、フリルの装飾が付いたゴージャスなモノだった。

そんなショーツへと脚を通すが、垂れているベルトがぶらぶらしていて邪魔になる。

「先にストッキングの方がいいか」

ショーツを戻し、ガーターベルトと同じ純白のストッキングを手にとった。

爪先から足を入れ、太股まで上げたら前後のクリップでそれを留める。ぶらぶらと遊んでいたモノが無くなったことで、ショーツはすんなりと身に着けられた。

下半身が終わると、ビスチェとやらを身に着けるために今着けているヤツを外す。

ブラジャーとは違い、腰全体にあるホックを止めるには苦労したが、好い感じだ。

全ての下着を身に着けると、鏡の方を向く。

「こうやってみると、完全武装だな」

鏡に映り込む姿はまるでお姫様の下着姿で、少しだけ悦に浸る。

——っと、着替えないとな。

メイド服を取ろうと伸ばした手が、下着っぽい何かに触れた。

「なあ、この薄地の黒いスカートみたいなのってなんだ？」

「薄地のスカートみたいなの？」

カーテンの向こうに呼び掛ければ、少し間が開いて答えが返って

きた。

「ああ、ペチコートね。スカートの下に履く下着よ」

「まだ下着があるのかよ……」

心底、女の下着の複雑さに辟易してきた。

それでも、ペチコートとか言うヤツを履き、その上から黒のワンピースをまとう。

「よつと」

男の服ではまず存在しないであろう背中ファスナーを上げ、胸元の赤いリボンを整える。

膝上のスカートは、ペチコートとやらの膨らみでフワリと広がり、裾に走る赤いラインが映えていた。

手首の赤いリボンをワンポイントにした手袋をはめ、カチューシヤを頭に装着する。

後は、黒色のエプロンを身に着け、その上から赤いリボンを腰に巻いて完成した。

「……まじかよ、これ」

鏡に映し出された黒メイドさんに、頬が苦笑気味に引きつる。

話題の萌えと言うモノが今まで解らなかったが、何となく解ってきた気がする。

巷にメイド喫茶とかが出来るわけだな。

俺だって、これクラスのメイドさんがいる喫茶店が近くに有れば、毎日だって通うかも知れない。

「ねえ、着替えたのなら開けるわよ」

「えっ!？　ちょ、ちょっとまで——」

心の準備が終わる前に開け放たれたことで、思わず顔を隠してし

まう。

そんな私の手を無理矢理下げさせる奈月。ジロジロと視線を動かしてはしきりに頷いてみせる。

顔面に血が集まってくるのを感じながらも、そんな奈月に訊ねる。

「ど、どうかな？　これでいいのか？」

「うん、かなりいいけてるじゃない」

「うわあ、よくお似合いよ♪」

「茜、ああ言うのが萌えてヤツなのかな？」

「多分そうよ」

ひそひそとした董と茜の声が聞こえる。私と同じ感想を抱いているようだ。

「あら、興味があるなら二人も着てみる？」

奈々さんに聞かれ、双子の姉妹は暫しお互いの顔を見合わせた後、コクツと頷いた。

「お借りしますね」

「里じゃ、こういう服って無いんですよ」

メイド服一式を持つと、二人は試着室へと消えていった。

「奈月も着てみる？」

「私はいいわ。メイドよりもメイドが仕える存在でありたいし」

さりげなく傲慢なセリフを口にするが、奈月の場合不思議と違和感がなかった。

唯我独尊のお嬢様タイプだよな、奈月って。

「鎖帷子よりは軽いけど、メイド服って重装備なんですね」
「でも、可愛いですね」

双子の姉妹はお互いにメイド服の感想を口にしていた。

そんな彼女達と私を並べては写真を撮る精霊。デジカメ以外にもビデオカメラも借りて、さっきから私の動く姿を撮り続けていた。

「いずみちゃん一人でも良かったけど、三人も並ぶと壮観ね。かなりグツとしたモノが来るわ♪」

いつの間にかカメラを取り出してシャッターを切っている奈々さんに、奈月はやれやれと溜め息を零していた。

「なあ、写真を撮ったのならもう脱いで良いのか？」

冷房が効いているから暑くはないんだけど、これだけ着込むとさすがに息苦しい。

「せっかく着込んだんだからダメよ」

「ダメよって、何をやらせるんだ？ 何かアイデアでもあるのか？」

「アイデアね……」

さしもの奈月も頭を捻る。

行き当たりばったりで着替えさせたものの、そこまでの考えは無いようだ。

「せっかくのメイドなんだから、姫でバイト——って、三人は多すぎるわね」

浮かんだアイデアをあっさりと否定する奈月。

普段から奈々さん一人で切り盛りできる店だし、主力の販売はネット通販だと聞いたことがある。そんな小さな店に三人もの店員は余分だ。

「それなら、一つ良いアイデアがあるわよ」
精霊と一緒に私達の写真を撮っていた奈々さんが会話に戻ってきた。

「商店街組合で活性化のために色々やってみようかって話があったね」

「活性化？」

その何処が自分達のメイド姿とは繋がらない。

「はい、これ。大通りに行って配ってきて」

カウンターの奥から奈々さんが持ち出してきたのは、籐編みの籠に入ったポケットティッシュだった。

裏を見ると、『柳町通り商店街』の文字と商店街に並ぶ店のマップが印刷されている。

「これを三人で配ってきて」

「え！？」

「表で？」

「これを……ですか？」

ポケットティッシュ片手に、私達三人が固まる。

さすがにこの恰好で路上に出るのは抵抗があった。

「あら？　せっかく綺麗なんだから、みんなに見て貰うべきよ。それにその恰好ならウチの宣伝にもなるしね。ティッシュが全て無くなるまで帰ってきちゃダメよ」

「ちょ、ちよっと奈々さん！？」

「はいはい、いずみちゃんも茜ちゃんも堇ちゃんも可愛いんだから、

すぐに無くなるわよ」

私達の背後に回ると奈々さんは、背中を押して店の外へ追いやり始める。

「あつ、精霊。あなたはさすがに外に出るとまずいから、撮影はあたしがしてきてあげるわ」

そんな私達を後目に、奈月は精霊からカメラを預かっていた。

16話 一精霊編一（後書き）

リアルの都合でやる気ゼロな状態なので、気晴らしに更新でも。
なお、修正個所が多くなるので、毎日更新なんて真似はできません
のであしからず（それでもなるべく早く二話分（精霊編）は更新
したいかな？）

あつ、P i x i vの方の六話（五頁目）に挿し絵を加えているの
で、興味があつてアカウントがある方はそちらもどうぞ。

本当は、もっと挿し絵を加えたいんだけど……精神的なゆとりが
（絶不調進行中

17話

「いずみさん、どうします？」

気恥ずかしいのか、なるべく通行人の方を見ないようにする茜。かく言う私も恥ずかしく、茜と身を寄せ合っている。

「あまり人が増える前に、さっさと配るしか無いわね」

学生が夏休みに入っているとは言え昼前の商店街は人がまばらだけど、小さな網籠一杯分のティッシュならすぐになくなるだろう。

「あの、いずみさん」

「何、葦？」

遅れて店を出てきた葦の腕には、大きな段ボール箱が二つ積ん抱きかかえられていた。

「そ、それは？」

何かは解るが、聞かずにおれない。

「ポケットティッシュですよ。コレを全て配ってきてと奈々さんが「マジ？」

「大マジですよ」

あまりの多さに、応える葦の声にも力が無かった。

仕方なく段ボール箱を持って場所を移動する私達。遠巻きに不思議そうに見ている好奇の視線に、心臓はバクバクしていた。

穴があったら入りたいとは、こんな気分の時に使うんだろな。

商店街の中心に来ると、籠の中にポケットティッシュを詰める。残りのポケットティッシュは段ボール箱ごと、少し離れた外灯の下が目立たない所に積んでおく。足下に置くよりはその方がいいだろうとの、奈月の案だ。

何がいいのか解らないけど……

「どのように配れば良いんですか？」

「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ——つとでも言いながらかな？」

「無難な線だとそんなトコね。過激に行きたいなら商店街の入り口にでも立って、お帰りなさいませ御主人様——とか？」

ビデオカメラを向けたまま、奈月は少し前に流行っていたメイド喫茶の挨拶を真似てみせた。

他人事だと思って楽しんでるのは声のトーンから解る。

「さすがにそれは嫌だぞ」

諭えメイドの恰好はしていても、心までメイドになりきる気はない。

「じゃあ、最初にあんたが言ったヤツでいいじゃない」

「そうだな」

奈月から離れ、手頃に歩いている通行人へと駆け寄る。

「こ、こんにちは、や、柳町通り商店街……です。こ、これをどうぞ」

「あっ、ありがとう」

ぎこちない私の挨拶に、顔を赤くして照れる通行人の男性。なん

か、こう言うのも面白い——かも。

——って、いかん、いかん。

一瞬おかしな道へと目覚めそうになる自分を、首を振って戒める。
緊張を解すように大きく息を吸い込み、そして吐き出す。

「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」
先ほどと違い、私は努めて冷静に次のターゲットへとティッシュ
を手渡した。

「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」
「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」
「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」

茜と堇との三人で次々と道行く人達にティッシュを配っていく。

「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」
「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」
「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」

「おい、メイドさんだよ」
「ほんとうだ」

「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」
「ありがとうございます」

「いえいえ、そちらの方もどうぞ」
「すいません」

物珍しさからか、いつの間にか私達の周りには人が集まりだして

いた。

「ありがたや、ありがたや」

中には、私達に手を併せ、拝みだす老人までいた。
メイドってありがたいモノなのか？

「冥土のみやげになりますじゃ」

ええつと……

返す言葉が浮かばなかった。ツツコミを入れたら本当に行きそうだし……

その後もティッシュを配っていく。

「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」

「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」

「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」

至る所から感じる視線はくすぐったい。でも、それが心地良い。
いつしか、私の中で注目を浴びることが快感になりかけていたようだ。

「おろ、ティッシュが切れたな」

「こっちも尽きました」

「私입니다」

空の網籠を持って段ボール箱へと向かう。

そこでは、カメラを構える奈月に矢絣柄の着物に紺色の袴を履いた少女が話しかけてくるのが見えた。

「奈月ち。そのメイドさんだーずは、何者なのだよ？」

彼女の名前は神楽坂葵。葵さん——葵は、奈月の同級生で私——八坂出雲の幼馴染み兼先輩。甘味処うたかたの娘だ。着ている袴姿はうたかたの制服になる。

「出雲の従姉妹のいずみに、出雲のクラスメイトの茜ちゃん。んで、その双子の片割れの堇ちゃんよ。奈々姉さんの指示で、商店街発展に貢献しているトコよ」

「ほえ。商店街発展とは有り難いことだね」
商店街発展と言う言葉をしきりに感心してくれる。

「奈月先輩、その方は？」
茜達も気付いたのか、葵のことを奈月に訊ねた。

「彼女は神楽坂葵。あたしの同級生ですぐそこにある甘味処うたかたの娘よ」

「あつ、先輩なんですか。碓氷茜です。よろしくお願いします」

「その妹の堇です。よろしくお願いします」

「八坂いずみ。よろしく、葵」
ぶっきらぼうに挨拶をし、ティッシュ配りに戻る。

「ねえ、いずみんって、夏休み前に溺れた娘を助けたって言う噂の人魚姫？」

ズルツ——

葵の言葉に思わず転ける。

「たぶん、当たってます……」
溺れた本人である茜が応えた。

——って、

「人魚姫ってどう言うことなんだよ!？」

「溺れ死に行く少女を助けに、さっそうと現れた白馬に乗った王子様ならぬ、さっそうと飛び込んだ可憐な人魚姫だって、学園中の噂なのだよ」

「そんな噂が流れているのか？」
知らなかった。

「あんた、終業式を休んだでしょ。そのせいであんたの正体がミステリアスになって、噂に尾びれが生えたのよ」

「尾びれが生えるにも、人魚姫ってのは無茶苦茶だな」
背びれ尾びれどころじゃない。足が生えて二足方向を始めてる気がする。

「それだけ、あんたの助ける姿が格好良かったってコトじゃない」
「そう言われてもな……まあ、いいけどさ」

どうせ男に戻ってしまえば、八坂いずみがどう思われようが関係ない。

どうでもいいと言いたげに、私は大通りの中央へと戻っていった。

「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」
反射的に、近くを歩く男性にティッシュを配る。

「え？ あっ、ありが——？」
ティッシュを受け取りつつ小首を傾げる金髪の男性。

「八坂君!？」

げっ……風祭。

視線を上げれば、見知った優男が立っていた。

「八坂君——じゃなくて、八坂さんか。それに、碓氷さんだよね？
二人居るけど……」

茜と堇の二人の存在に不思議そうに風祭は頭を捻っていた。

「風祭だよ。風祭光太郎。クラスメイトの」
言われなくてもそれは解っている。

でも、

八坂いずみとして知らないフリをする。

「あ……そう。光太郎か。覚えた」

「あっはっはっは、覚えてくれてありがとう」

淡泊な対応に、苦笑を浮かべる光太郎。

「髪の毛切ったんだね。一瞬、八坂君かと思ったよ」

「暑かったからな」

なるべく視線を合わせないようにする。

「似合うよ。まるで八坂君みたいで格好いいし」

え？

一瞬間こえた不穏な言葉に振り向けば、すでに光太郎は茜達の方を向いていた。

「碓氷さんは覚えてくれてるよね？」

「ええ、風祭君のコトは覚えてますよ」

私と違って、茜はやんわりとした微笑みを浮かべて応えた。

「ありがと。碓氷さんとは話したことがないから、知らないかと思
っていたよ。覚えていてくれたのは嬉しいけど……双子なの？」

「妹の碓氷堇です。二学期からは私も通うことになると思うのでよ
ろしく願います」

ペコリと頭を下げて名乗る堇。

「ああ、こっちこそよろしく」

つられて頭を下げる光太郎だが、彼の視線は私達の衣装へと向け
られた。

「メイドさんのコスプレ？」

「しょ、商店街発展の為に協力してるだけだ。き、きにするな」

知ってる野郎に見られたことで、薄れかけていた羞恥心が甦って
きた。

視線を逸らすようにそっぽを向くが、意識した途端頬が熱くなる
のを感じた。

「よ、用がないならどいてくれ。仕事の邪魔だ」

「あっ、ごめん」

慌てて歩き出す光太郎だったが、思いだしたように振り返ってき
た。

「なんだ？」

「三人とも、可愛いね。よく似合ってるよ」

「うるさいぞ、さっさと行け」
気障なセリフに叫び返せば、光太郎は手を振って今度は本当に立ち去っていった。

「何が似合ってるだ、あのバカは」
光太郎の言葉に悪態を突く。

優男の光太郎は天然なのか、サラリと相手の心を突いてくるような言葉を言ったりする。
何が可愛いだ。何が似合ってるだ……私は可愛いのか？ 似合ってるのか？

トクンツ——

胸の奥で心臓が高鳴る。
奈々さん達の褒め言葉よりも光太郎の言葉は私の心に突き刺さり、苛立たせてくれた。

キュン——

「はぁ……、はぁ……」

零れる息は大きく乱れ、思考がふらつき始める。

欲しい。男が。

誰でも良いから、男が欲しい。

「いずみ!?!」

名前が呼ばれ振り返れば、ぼやけ気味の視界には慌てて駆け寄ってくる奈月の姿があった。

「ちょっと、しっかりしなさいよ！」

いつの間にかスカート越しに股間へと向かっていた私の手は、奈月の手で押さえられる。

やめてくれよ。

私のもっと感じたいんだから。

「むっ、精霊のヤツ、変な術を掛けていたみたいね」

奈月の言ってる言葉が解らない。ただ、私の快樂の邪魔をしようとしてるのは解った。

だから、私は奈月の手を振り解こうと、思いつ切り手を振る。身体の高ぶりが、火照りが収まらないのだ。

「ちょっと、落ち着きなさいって！」

「いやだよ、私は感じたいんだよ。放せってば！」

「仕方ないわね」

奈月の顔が近付いてきたかと思うと、唇に柔らかな感触が。

え！？

それが奈月の唇だと気付くには、しばしの時間が掛かった。

その間、奈月の舌が私の口の中へと進入してきて、歯ぐきをくすぐり、私の舌へと絡み付いてくる。

交換される唾液が、私の喉へと流れ込んできた。

——って、奈月!?

無理矢理引き剥がすように、奈月から飛び退く。離れた口からは唾液の糸が走るが、気にしてるゆとりはなかった。

「な、な、な、何するんだよ!?!」

「正気には戻れた様ね」

茫然自失とばかりに固まってる茜の籠から奈月はポケットティッシュを一つ取り、それで口元から垂れる唾液を拭ってみせた。

「何の真似だよ!」

「あんたね……」

ジト目で私を睨めてくる。

「あのまま往来のご真ん中でイケナイことをするつもりだったの?」

「あっ」

自分が何をしようとしたのかを思いだしては全身がカァーと熱くなる。

「——気が付いたから、通——の意識は——でずらした——いいけど」

ぼそっと奈月が呟くが、恥ずかしさで意識を飛ばしていた私にはよく聞こえなかった。

「あ、あのお……奈月先輩」

「今のキスはいったい?」

目の前でデニールプなのを展開され、顔を真っ赤にしている双子が奈月に訊ねてきた。

「ん、中和みたいなものよ」

「え?」

「あの精霊に変な術を掛けられていてね、それをキスのインパクトで解いたと思うてくれればいいわよ」

「術……ですか」

奈月はしれっと言うがその意味を解りかね、茜堇の二人は小首を傾げていた。

「いつの間に？」

「おおかた、あんたの股間を激写していた時にでも、催淫効果を呼び起こす術でも仕込んでいたんでしょ。乱れる女の姿を撮ろうとは思ったんじゃないの？」

奈月の言葉に青ざめる。

帰ったら、握り潰してやろうか……あの害虫。

「ねえ、奈月ち」

「なに？ 葵」

突然の展開に状況が解らず口をあんぐりと開けていた、葵が話しかけてきた。

「いずみんと奈月ちは、そう言う関係なのだね？」

「な、ちが——」

「ええ、そーいう関係よ」

私の首に腕を回してきては悪戯っぽく微笑む奈月。周りで見ている茜と堇はわあ、わあ、わあ、わあつと喚いて顔を赤くしている。

双子は騙せているようだけど、付き合いの深い私にはそれが奈月の冗談なのが解っていたから、そのまま振り解こうともしない。

そして、私と同じように付き合いの深い葵にもそれが解っていた。

「ふーん。出雲んがなびかないからって、いずみんに乗り換えた訳なのだね」

「え？」

周りの喧騒で聞き取れず、思わず聞き返す。

「出雲がどうかしたのか？」

「奈月ちってば、出雲んのコトが――」

「わあ、わあ、わあ！」

いきなり葵の口を塞いで叫ぶ奈月。そのまま甘味処うたかたの店内へと消えていった。

後に残るはメイドが三人。

「何だったんでしょうか？」

「さあ？」

自分のことが関係してる気はするけど、よく解らない。

「どうします？」

「ティッシュ配りの再開かな？」

ポケットティッシュ入りの籠を持つと、通行人へと向かった。

「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」

「ああ……疲れた」

木製のテーブルに身を預け、へばる。

昼過ぎになると、昼食兼休憩を兼ねて私達は甘味処うたかたにや

ってきた。

対面の席では、同じ姿の茜と堇ものびている。

「さすがに疲れましたね」

「これならまだ、里で修業していた方が楽ですよ」

何処かで私達の噂が漏れたのか、メイド目当ての訪問者が爆発的に増え、私達の疲労に比例する形でティッシュは凄い勢いで無くなった。

奈々さんから申し渡された段ボールは昼の間に消え、ほっと一息つくのもつかの間。私達の存在を嗅ぎ付けた柳町通り商店街組合組合長さんが、更なる追加分の段ボール箱を持ってきてくれた。もつとも、そのおかげでバイト料代わりに商店街で使える金券を貰っている。1人5千円ずつのを。

労働時間を考えるならば、妥当な金額だ。使えるのが商店街だけってのが微妙だけど。

「段ボール、あと何箱残っていたっけ？」

「5箱ですけど、あの勢いなら夜までに無くなると思いますよ」

「それって、夜までフルでガンバレってコトなのよね……」

堇の言葉に茜が力無く零す。

人の目を忍んで生きてきた彼女達にとっては、あそこまで目立つ行為は精神的にも疲れているんだろう。

かくいう自分も、珍獣を見るような眼差しには辟易していた。もつとも、女性達が可愛いと言ってくれるのは嬉しかったが……

対して男性達の、明らかに性的欲望を込めた視線は不快そのもの

だった。

写真撮っていたヤツも結構いたからな……あいつらのオカズにされるのかと考えると、ゾツとしてきた。

コトツ――

机の上でへばっている私の鼻先に一つの器が置かれる。

「はい、注文の餡蜜よ」

視線だけを上げれば、奈月がテーブルの上に遅めの昼飯として注文した餡蜜を並べていた。

「奈月？ その恰好は？」

奈月が餡蜜を持ってくるのも疑問だったが、何故か甘味処うたかたの文字が入ったエプロンを身に着けているのはもっと疑問だ。

「奈月ち、暇そうだったから、昼の間だけ手伝って貰ってるのよ」
楽しげに言う葵に対して、奈月は無然と横を向いていた。

「もう、お昼は終わったんだから、脱いでも良いでしょ」

「もう少し手伝って貰いたかったけど、良いよ」

葵の許可を貰うと、エプロンを戻しに奈月はそそくさと店の奥へと消えていく。

「いずみんって、出雲んの従姉妹だよね？」

「一応は……その『ん』ずけ、止めてくれないか？ 怪獣の名前のように聞こえるんだけど」

「ええ、面白いじゃない。ねえ、茜っち、堇っち」

「「っち!？」」

声を重ねて驚く茜と堇。

葵は、昔から人の名前に付属を付けて呼ぶ癖があるんだよな。奈月がそれを止めるように窘めるが聞き入れた試しはなく、今では諦めてしまっている。

「そんなコトより、出雲んはどうしたのだよ？」

「私と入れ替わりで外国」

「また外国に行ったんだ。その割には、奈月ちは平然としてるよね」
奥へと続く暖簾を見つめながら小首を傾げる葵。あんみつを匙で掬っていた茜が声を掛けてきた。

「出雲君がいないと、奈月先輩がどうにかなるんですか？」

「奈月ち本人は認めてないんだけど、出雲んと会えなくなると、その日数に比例して行動が大雑把になってくのだよ」

「奈月が？」

それは私も初耳だった。

「ちょうどあれだね。猫から爪研ぎ板を取り上げたようなもの。日に日にストレスを溜めていって——ぶばらっ!？」

顔面にマンガ雑誌の一撃を受けて吹き飛ぶ葵。飛んできた方を見れば、エプロンを置いてきた奈月が立っていた。

「葵、あんたは要らないことを言わなくて良いの!」

「葵さん!？」
だ、大丈夫ですか？」

「堇っち。あたしゃ、もうダメだ。あたしの墓標にはこう刻んでく

れ——『犯人は凶暴メガネザル娘』と」

「え、ええっと……」

「はいはい、くだらないこと言っていないで、堇ちゃんを困らせない」
二冊目の雑誌が飛んできた。

「奈月ちのきようばー!」

「あら、電話帳も読みたいみたいね」

手の中の電話帳を弄ぶ奈月に、葵は慌ててその場を飛び退いた。

「た、た、たんま! 電話帳は洒落にならないよ!」

慌てて厨房へと逃げだそうとする。

「あっ、葵。激辛ハバネロソフト頼むわね」

「りょーかい」

ひらひらと手を振って応え、葵はカウンター脇に設置されているソフトクリームフリーザーで、真っ赤なソフトを巻きだす。

「はい、特製激辛ハバネロソフトよ」

「ありがと♪」

差し出された毒々しいまでに真っ赤なソフトを、奈月は嬉しそうに受け取る。

「あ、あの……そ、そのソフトクリームは?」

「我が甘味処うたかた唯一の激辛メニューだよ」

「美味しいんですか?」

双子は興味津々とそのソフトを見つめる。

「食べてみたいなら——」

葵は小皿に少しだけハバネロソフトを出し、テーブルの上に置いてきた。それを双子はあんみつの匙でそれを掬って口へと運ぶ。

「「☆@&£%#*¢◇〒」」

目を白黒させながら奇怪な言葉が飛び出した。

「おい、二人ともあんみつを食べろ」

私の指示で、二人は残っていたあんみつを一気に掻き込む。

「何なんですか……これ」

「冷たくて熱いなんて、始めて味わいましたよ」

「うう、舌がまだヒリヒリする……」

「売れるんですか、コレ？」

「根性試しや話のネタ、罰ゲームとして頼む人なら結構いるよ。ウチの売れ筋の一つだったりするし」

「げてもソフトとしては有名で、ネットでも伝説のソフトクリームとして紹介されている。」

「そう言えば、TVや雑誌の取材も何度か受けていたっけ。」

「あつ、でも、リピーターはまずいないわね。あたしの知ってる中じゃ、好んで何度も頼むのは奈月ちと美奈っち、奈々のすけの姫川三姉妹だけだよ」

「あら、美味しいじゃない」

「そう言うと、奈月は真っ赤なソレを舐め始めた。」

赤いソフトの上でペロペロと妖艶に動く舌。

普段は気にもならない奈月の舌の動きなんだけど、忘れていたさっきのキスを思いだしては、頬が熱くなってきた。

そう言えば、あれが私のファーストキスになるんだよな。
八坂出雲のファーストキスと数えるにはあまりにも異常でおかしなシチュエーションだけど。

——って、意識した途端、また心臓がバクバクしだしてきたよ。

「喰わないなら、貰うよ」

小皿に残っていたハバネロソフトを流し込む。

ぐわあ。

焼け付くような熱さに凍える冷たさ。冷たい溶岩とも言える物体が喉から胃へと流れ込む。

「いずみさん!？」

「だ、大丈夫ですか？」

「へ、へいきだから……」

全身からは嫌な脂汗が吹き出すが、努めて何でもないように笑う。

そんな私を奈月は眇め、何をバカなことを——とでも言いたげな眼差しを向けながら、顔色一つ変えずにソフトを完食してみせた。

「御馳走様。もう少し辛味を増すコトってできないの?」

「これ以上辛くしたら、さすがにネタとして食べに来る人もいなくなるよ」

「美味しいと思うんだけど……」

葵の言葉に、物足りなさそうに口を尖らせる奈月だった。

「まあ、いいわ」

すつくと立ち上がる奈月。

「休憩は終わり。ティッシュ配りに戻るわよ」

「はい」

「ちょっと待ってくれ」

残っていたあんみつをかつ喰らう。

「ごちそうさん」

空になった器に匙を投げ、慌てて三人の後を追いつけ――

「って、葵？」

肩を掴まれ、外に出られなかった。

「あんみつ3つにハバネロソフトで1400円」

「え？」

「だから、代金だよ」

あつ。

すっかりそのコトを忘れていた。

「財布持ってきてないんだけど……」

恐る恐る言ってみる。

メイド服に着替えて直ぐに商店街に来たため、お金は持っていなかった。

「いわゆる、食い逃げ？」

キラーンと葵の瞳が怪しく光る。

「ちょ、ちょっと、待て！ はらう、払うから！！」

慌ててスカートのポケットの中から紙切れを取り出した。

「こ、これならいいだろう？」

「商店街の金券？ いいけど、お釣り出ないよ？」

ティッシュの追加と同時に組合長さんから貰ったモノだ。

「お釣りの代わりに、後でアイスでも差し入れしてくれ」

「毎度あり」

外へと向かう足を止め、

「あつ、ハバネロは無しだからな」

「ちっ」

奥から聞こえてきた舌打ちは、気のせいだと思ふことにしておこう。

17話（後書き）

精霊編は次で終了で、次は短めになります（ベースになってる18禁仕様の話から、18禁部分を削ったら短くなったもので）

しかし、今回の精霊編はいいとして、その後をどーっすかな？
おかしくないように修正しようと思うと、かなり面倒くさかったりして（苦笑）

18話

「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」

茜達の元に戻ると、一緒になってティッシュ配りを再開する。

私達が昼休みをしている間に噂はさらに広まり、商店街の通りは何のイベントも無いのに空前絶後の人混みでゴった返していた。

「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」

「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」

「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」

周りの視線を一身に浴びながらも、ティッシュを配っていく。

携帯で私達の姿を撮る人も増えていき、中には一眼レフを手撮りしている輩までいた。そんな彼らにカメラ視線を向け、軽く手の一つも振ってやれば、顔を真っ赤に染めてくれる。

それが楽しく感じられ、ついつい私の動きが艶っぽくなっていく。

「いずみさん……馴染んでるね」

「うん。私達よりも仕草が女の子らしいね」

ぼそっと聞こえた双子の会話がぐさりと心に突き刺さる。

うう……私は男なのに。

少しだけ気を取り直して、真面目にティッシュを配る。

予定では夕方近くまで掛かりそうだったそれは、三時前には無くなるうとしていた。

「これで終わりですね」

最後の一掴み分のティッシュを段ボール箱から取り出す。

「ご苦労様、三人とも」

顔を上げれば、商店街の半纏を羽織った組合長が立っていた。

「あつ、組合長さん。これで頼まれた分は終わりです」

「それじゃ、これも頼めるかな？」

組合長さんがパチンと指を弾くと、背後には同じ半纏姿の男性が現れた。彼の肩には段ボール箱が積まれている。

「え？」

「せっかくいずみちゃん達が宣伝を買って出てくれてるんだから、有効に使わないとね」

買って出た覚えはないんだけど……

冷や汗が伝う頬をポリポリと掻きながら、目の前に積まれた段ボール箱を開けた。

「うちわ？」

「用意していたポケットティッシュはそれで無くなったからね。納涼祭り用のうちわを持ってきたんだよ。せっかくこれだけの人も居ることだし、宣伝しないに越したことはないよ」

「はあ……」

数百枚はあるうちわに、力が抜ける。

「じゃあ、頼んだよ」

組合長さんは気軽に言いわけ、立ち去っていった。

「どうします、これ？」

「配るしかないだろ」

うちわを一掴みすると、すつくと立ち上がる。

胸の前で抱えると、周りで見ていた通行人にそれを配っていく。

「こんにちは、柳町通り商店街です。どうぞ♪」

斜陽が商店街を緋に染め上げる。

結局うちわは全て配りきることが出来ず、残ったのは商店街組合の事務所へと返してきた。

居合わせた組合長さんからはまた手伝ってくれと言われるが、曖昧に言葉を濁して帰ってくる。

「あつ、ちょっと用事があるから、先に帰っていてくれ」

「解ったわ。夕飯はウチで用意しておくから」

奈月はパタパタと手を振り、茜と堇を連れて姫へと向かう。

一人残された私は、商店街のメインストリートからずれ、横通りに面した場所にある本屋へと寄った。

「ありがとうございました」

会長さんから貰った金券の残りで、今日発売のマンガの単行本を数冊買う。

「——♪————♪」

鼻歌を歌いながらそのまま裏路地から家へと向かう。いつしか陽は完全に没し、燦々と照らし出されている商店街とは違い、この路地はかなり暗かった。それでも通い慣れた道なので、私の歩みに淀みはない。

「あれ？ 八坂さんじゃないか？」

「え？」

背後からの声に振り返れば、暗闇の向こうに見える通りの光りの中に光太郎が立っていた。

「ん？ 光太郎も帰り？」

「あつ、うん、そうだけど……大丈夫？」

キョロキョロと辺りを見渡しながら言う光太郎。

「何が？」

「だって、商店街の通りと違ってこっちは暗いじゃないかい。女の一人歩きは危なくないかなって思ってた？」

「え！？」

何気ない光太郎の言葉に私は戸惑った。

言われてみればそうだな。今の私は女だし、裏路地ではたまにチカンが出たりもすると聞くし、奈月も美奈さんも夜に一人で帰宅する時はなるべく姫の方から帰っていると言っていた。意識した途端、暗闇が気になりだしてくる。

家までの僅か数十メートルの闇が――怖い。

「あ、あのさ、家まで付き合ってくれないかな？」

「いいよ」

足早に小走りしてきて私の隣りに立つ。

「悪いな。こう言うのは慣れて無くて、すっかりと忘れていたんだ」

「いいよ。僕も八坂さんに聞きたいことがあったし」

暗闇の道に私と光太郎の足音が響く。

「聞きたいこと？」

「うん。それで、ちょっといいかな？」

指さした先は路地裏にある小さな公園。小さな外灯が一つあるが、商店街と比べるとかなり暗い。

一瞬躊躇しかけたが、付き合って貰った手前、無碍に断ることも出来なかった。

「話って何だ？」

鉄棒を背にして訊ねる。

「八坂君のことなんだけど」

「出雲の？」

ぎゅっと鉄棒を握りしめながら、続きを待つ。

「八坂君って、日本にはいつ頃帰ってくるのかな？」

「あいにくと私は知らない」

「そうかい……」

光太郎の呟きに落胆の色が窺える。

どうして、こいつはここまで落ち込むんだ？

八坂出雲としての風祭光太郎はクラスメイト以上の関係は無いはずだ。

俯いて考え込んでいる私の視界に、光太郎の靴が見えた。

顔を上げれば目の前に光太郎が立っている。外灯を背にしているためか表情は解らないが、何か様子がおかしい。

「なん——うわぁ!？」

いきなり肩を掴まれ、声が零れた。

「八坂さんが悪いんだよ。そんな、八坂君にそっくりの顔してるからさ」

え？

気が付いた時には私の唇には光太郎の唇が重なっていた。

トクン——

心の内の奥底で何かが跳ね上がる。

それは昼に感じた性的欲求だった。

光太郎の束縛を振り解こうと心は訴えてくるが、身体が言うことを効いてくれない。

「や、やめろ……」

少しだけ離れた私の唇からは拒絶が零れ落ちるが、光太郎はそのまま抱きついてきた。

「だめなんだよ、もう収まらないんだよ。僕は八坂君が好きなんだよ。それで頑張っていた。頑張っていたのに……せっかくもう少しで終わるところだったのに、八坂さんが悪いんだから。キミが現れなかったら、僕は僕じゃなくなれたのに……」
何かがおかしい。

言っていることがちぐはぐで、明らかに様子がおかしかった。

そんな意味が掴めない言葉を喚き散らしながら、光太郎は腰の硬いモノを押し付けてきた。

キュン――

それが何なのかを理解した瞬間、腹の奥が疼くのを感じた。

奈月のキスで掻き消されたと思っていた精霊の術式が甦ってきたようだ。

自然と私の手は光太郎の下半身へと向けられる。ズボン越しに感じられるヤツの逸物。そのまま軽く揉むと、そいつはズボンの中で大きくなってきた。

「や、八坂――さん？」

突然の積極的な私の行為に、迫ってきていた光太郎自身が戸惑っているが、関係ない。

優しくも時には強く甘美的にもズボンの上からそいつに刺激を与えていく。

「うっ、ぐう……」

光太郎の口からこぼれ落ちるくぐもった声。

「苦しいんだね。今、楽にさせてやるよ」

軽くひと撫ですると、私は光太郎のを開放してやるべくファスナ
ーへと手を掛ける。

それを引き下ろそうとするも、

「ひい——!？」

いきなり肩を押され、私の身体は大きく引き離された。

「お、おい、なんだよ？ 勝手に人のスイッチを入れておいて、な
んなんだよ」

「く、くるな！ 来ないでくれよ!! 八坂君じゃないヤツなんて、
いないんだよ!!」

突然、光太郎は逃げ出すように公園を飛び出していった。

「なんなんだよ……あいつ」

独り呟く。

まるで私に脅えていた様な雰囲気の変容が解らない。

「どうしてくれるんだよ、私のこの高ぶりは——って、私は何を口
走ってるんだ!？」

光太郎が立ち去ったおかげで正気に戻った私は、自分のしでかし
ていた痴態に穴を掘っては埋まりたい気分だった。

「くっそ……、これもそれも、精霊の術式の影響だよな」

忌々しげに零す。

帰ったら、蚊取り線香で燻してやろうか。

復讐方法を考えつつも、光太郎の去り際の言葉が気になっていた。

「あいつ、私が八坂出雲じゃないことで拒絶していたよな」
勝手に襲ってきておきながら、一線を越える前に逃げていく理由が解らない。

ハッキリとしているのは、風祭光太郎と言う存在は、八坂いずみよりも八坂出雲に好意を抱いていることだ。

——って、それってもしかして、

「ホモ？」

脳裏に浮かんだ最悪の予想に、今までとは違った冷や汗が吹き出た。

でも、それならある程度は理由が説明できるんだよな。

ま、まさかな……

そう思いたいんだけど、嘘と割り切るには余りにも光太郎の言葉は怪しすぎた。

出雲そっくりの顔だから、つい襲ってしまったとか……

そして、私が女だと気が付いて正気に戻った！？

内心、頬が引きつっていく。

「二学期からは、なるべくあいつには尻を見せない方が良さそうだな」

はあ……

溜め息が零れる。

ここ数日、私の中での常識は音を発てて崩れて言ってる気がした。忍者はいるし、精霊はいるし、ホモのクラスメイトはいるし……

並べて考えると最後のが一番まともに思えるのは気のせいかな。自分がホモの対象にされてなければ、そうなんだろうな。

ポコンッ——

「いて！」

後頭部から走った突然の痛みに振り返れば、険しげに眉をつり上げた奈月が立っていた。

「あんた、帰ってこないで何やってるのよ」

「あっ、いや……色々と考えたいことがあって」

曖昧に誤魔化す。

さすがに何があったのかは言えないし、言いたくもない。男としての名誉のためにも——身体は女だけ。

「まあ、いいわ。行くわよ」

私の手を取る奈月だったけど、不意に彼女の眉が潜まった。

私の体中の匂いを嗅ぎ始める奈月。

眼鏡の下の瞳を眇めさせ、私の背後の鉄棒へと視線を向ける。

「もしかして、あれを試していたとか？」

「あれ？」

唐突な指摘に、戸惑う。

「だから、鉄棒に擦り付けていたんでしょ？」

「なっ!？」

その指摘に絶句する。

「――ちがう」

慌てて否定するも、にんまりとした笑みを浮かべてくる奈月。

「メイドさん姿で鉄棒に跨るだなんて、そこまでのフェチ魂がいずみにあるとは知らなかった」

知る以前に自分も知りませんって。

「でも、こんな薄暗い公園でだなんて、よく変質者に襲われなかったわね」

あつ、いえ、襲われたんです。

それも、ホモのヘンタイに。

声には出さずに心で突っ込んだ。

「ん？」

「まだ何か？」

じいーっと私の顔を見つめてくる奈月。不意に顎の先を摘んでくる。

え!？

二度目の奈月のキスが襲ってきた。

突然の出来事に固まる私を余所に、奈月の舌が口内へと進入してくる。

それはまるで私の味を確かめるように、検分している舌の動きだ

った。

「ふはあゝ」

色気の無い音を自ら口にしながら、奈月は私の唇から離れた。

「……中和の効き目が薄かったみたいね。唾液の交換程度だから大丈夫だけど……いずみの本質がばれなかったのは不幸中の幸いね」
険しい顔でぶつぶつ呟いているが、何を言っているのかまでは聞き取れなかった。

「奈月、おーい、奈月ってば」

「ん？ 何かよう？」

「今のは何の真似だよ」

「聞きたいの？ ディープなキスで何があんたの身の上に起こったのか分析した結果を」

「あっ、いや……いいです」

光太郎との行為がばれているようだけど……面と向かってそれを指摘される勇氣は私には無い。

「じゃあ、帰りましょう。茜ちゃん達や精霊も待ってるんだから」
先行する奈月に続いて夜道を歩く。ものの20メートルほどで我が家にたどり着けた。

「お帰りなさい、奈月さん、いずみさん」

「あっ、いずみさん見つけたんですね」

リビングに戻ると、茜と堇の双子はメイド服のままお互いの姿を撮影していた。

精霊は精霊で、部屋の奥の方でデジカメとビデオをテレビに接続して撮影内容を確認している。
結構色々と撮ってるんだな。

「いずみさん——」

「どこに行っていたんですか？」

「ええっと……」

「その公園で物思いに耽っていたのよ」

返事の言葉に窮していると、奈月が助け船を出してくれた。

「何を考えていたのかは知らないけどね。一人寂しげに星空を見上げながらぼーっとしていたわ」

「そうなんですか」

深くは追求されることなく、その話題はそれで終わった。

「ねえ、精霊。撮影内容はそれで良かったかしら？」

「ああ。申し分ないぞ。これなら八坂夫妻も満足のはずぞ」
テレビ画面から視線を私達の方へと向けてきた。

「んじゃ、カメラを貸した約束を果たして貰うわね」

「ああ」

デジカメの操作を止めると、畏まって奈月の言葉を待つ精霊。私も二人の隣りに立つ。

「いずみ——八坂出雲を元の男に戻してくれないかしら？ あなた
の術なんだから、簡単でしょ？」

「容易いことぞ」

クルリと私の方に向き直ったかと思うと、いきなり呪文のような
モノを唱え始めた。

「ちょ、ちよっと待て！　今、着替えてくるから、それまで待つてく——」

止めるよりも早く精霊の呪は完成したのか、私を中心にボンツと白煙が立ちこめた。

「けっほ、けっほ。待てって言っただろうが！」

咳き込む声は懐かしの男のモノへと戻っていたが……

「な、何よ、その姿は♪」

俺を見ては腹を抱えて笑い出す奈月——ねえ。隣では茜と董が口を押さえて笑いを堪えている。

三人が笑っている理由は解っている。だからこそ慌てて止めようとしたんだ。

メイド服のミニスカートの裾から伸びる脚は筋肉質の男の足に変わり、一回り大きくなった俺の体格に服はパンパンに引っ張られ、今にも弾けそうだ。

さらにメイド服の中では、胸はもちろん腹から腰まで覆っているビスチェによって上半身はきつく締め上げられていてかなり苦しい。

「き、着替えてく——」

ブチッ！

部屋を出ようと動いた負荷に耐えきれなかったのかメイド服は弾け飛んだ。

「きゃっはっはっは、何よ、それ。さいこーよ、出雲♪　一枚

撮っところ」

「うわあわあわあ……股間が、ショーツが膨らんでる」

「出海君、すっごいです」

「だあー！ 奈月ねえ、写真撮るんじゃない！！ 茜に堇も指の隙間から凝視するな！」

慌ててリビングから逃げ出す俺の姿は、完全武装の女性用下着を身にまとった変質者そのものだった。

「出雲君、ごめん。ごめんよ。あんな女の色気に負けた僕を許して」
電灯も付けていない薄暗い部屋の中、フォトスタンドに飾られた八坂出雲に向かって謝るのは風祭光太郎だった。

「もう少し、もう少しで僕はキミを受け入れられるようになるからね。そうしたら、姫川先輩にも碓氷さん達にも、八坂さんにも負けないんだから。だから待っていてね、出雲君」

フォトスタンドを置いてベランダへと出る光太郎。

月明かりに照らし出された彼の影には、何故か人としてはあり得ないモノが存在していた。

コウモリのような羽と二本の角。そして先の尖った尻尾が――

18話（後書き）

精霊編はこれにて終了です。

次話は、修正個所があまりに多すぎるのでまた間が空く——って言うか、P i x i vメインでの更新形態に戻ろうかと。

こちらでは編毎にまとめて一挙に公開するって形を考えていたりして（分量的に三話で一編ぐらいかな？）

ストック自体はあと2編分あるんだけど……18禁要素があまりに多すぎるので、新たに書き直した方が早そうだったりして（汗
しかも、ラストまで書き上がってない未完状態だったりするし……
ラストどーっすかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8765m/>

みすing -少女進行形物語-

2010年10月31日10時34分発行